

天使なヒーロー！

寧太

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

個性『天使』の女の子がヒーローを目指す話。

キャラクターイメージとしては、クラスに一人はいるお母さんみたいな子。恋愛要素あるよ

！

※話の都合上青山優雅は出ません。

あ、要望があったため、アバター作成サイトでなんちゃってフジノン（初期コスチュームver.）作ってみました！

何故私はこんな表現しにくい髪型に設定したのか（遠い目）

※ある素材で頑張って作ってみたんですが、あくまでイメージです。

制服ver.

目次

10	USJ襲撃事件 前篇	162
09	女子会!	142
08	委員長を決めよう	113
07	訓練のその後で	97
06	初めての戦闘訓練	74
05	個性把握テスト	58
04	雄英高校 入学	42
03	入学準備	35
02	合格発表	23
01	雄英入学試験 後編	13
00	雄英入学試験 前編	6
1		1

1	USJ襲撃事件 後編	187
1	戦いの後	221
1	オールマイトの秘密	242

あれはそう、今からもう十年も前の話。

事のきっかけは中国、軽慶市にて発光する赤子が産まれたという世界的なニュースから。後に『個性』と名を変えた超常的な力が人々に現れ始めた超常黎明期から幾年、今や人口の約8割が個性を発現するその5世代目が私達にあたり、例に漏れず私も4歳までの発現時期に個性が発現した。

授かった個性は『天使』。治癒系の個性を待つ父、翼を持つ母の個性の複合型個性と見られ、後に他にも能力が見つかったけれど、この時の私は母のような白い翼が自分にも生えて、母のように自由に大空を翔べるのが嬉しくて、時間の許す限り翔んでいた。

しかし、個性を用いて治安を守るヒーローという職あれば、個性を己の私利私欲や人を害することにしか使わない敵^{ライバル}がいるように、持たざる者からしてみれば持てる者のその力は畏怖の対象でしかなく、個性そのものの行使に国はルールを敷いた。つまり、公共の場での個性は資格が無いと使えませんというルール。なので、両親がヒーローとい

う立場の私は個性発現から何度も何度も教わったルールに則り、自宅、というか私の家が所有している土地のみで翔んでいたのだ。それに、当時はまだまだ幼かったのもあって大人の目の届くところで、という約束もすっかりしていた。

けれど、所詮はまだ5歳6歳の子供で、ふと近寄ってきた鳥の群れに気をとられていたら、知らぬ間にどこかの公園の雑木林に迷い込んでいた。

どれくらい翔んでいたのかはわからないけれど、全く見覚えのない風景。あたりを見回しても木々ばかりで代わり映えない景色に、上昇して上から帰り道を見ようとしたけれど、体力が続かず一旦手頃な木の枝に腰掛けて休憩することにした。が、枝に腰掛けた瞬間、どうやら脆い枝だったらしくぼきりと折れる音がして少しの浮遊感の後にガサツと凄まじい音が耳元でした。

反射で瞑っていた目を開ければ眼の前には緑。そんなに高い木の上にはいなかったけれど、無事だったのは草むらに突っ込んだかららしい。びっくりして少し泣きそうだったけど、とにかく起き上がって帰り道を探さないと、と足に力を入れた瞬間ズキリと痛みだして、起き上がろうと中途半端に力を入れていた体はバランスを崩して、草むらからは出られたものの今度は地面にズシャッと音を立てて転んだ。

「……ひっ……うっ……」

なんとか再び起き上がってぺたりと地べたに座る形になったけれど、さつき落ちたと

きはなんとか引つ込んだ涙はもう引つ込んでくれそうにはなかった。ぼたぼたと落ちてくる雫を収めようと少しだけ目を擦ってみるけれど、涙は止まらないし足は痛いし帰り道はわからないししまいにはなんだかどんどん暗くなってきている気がする。

「ママあ……パパあ……うっ……ひうう……!」

今何よりも会いたい存在の名前を口に出してしまってもうダメだった。どんどん溢れてくる涙と嗚咽をそのままに一人泣いていれば、ふと少し遠くの方からがさりとくさむらが揺れる音がした。しゃくりをあげながら音の方へ顔を向ければ、どんどん音が近づいてくるのがわかった。

そして、程なくして一人の少年が姿を現した。

「!おまえ……!」

「ひつく……うっ……うっ……あなた、だあれ……?」

「おっおまえこそだれだよ!なんでこんなところで泣いてんだよ?!それに、それ、羽か……?」

自分と似た金の髪に赤い目をしたその少年は、とても珍しいものを見たように私の背にある羽を指さした。

「ひつく……うっ……うん、羽……っ。わたつわたし、とんでたら、まよつちやつて、おうち、わからなくて、木からおちちやつて、足いたくて、とべなくて、もう……ママたちにあえ

ないのかなあ…？ひうつ…ううつ！」

「なっ泣いてんじやねーよ！なんだよただの迷子だろ?!いえ、どこだよ！」

「ひつく…○○ちよう…」

「どこだそれ？」

「わかんない…：…おうちかえりたいたい…ひつく…！」

この目の前の少年が、私の住んでるところを知らないくらい遠いところに来ちゃったんだ！なんて、幼子にありがちな超悲観的な考えが頭をよぎって、やっぱり両親にはもう会えないかもしれないと不安と寂しさをさらに募らせれば、それに比例するようにどんどん涙の量が増えて顔を覆って泣き続ける。

「だから泣くなっつーの！しかたねーからおれさまがおくつてやるよー！」

「え…？」

少年の言葉に思わず顔を上げれば、さらに少年が言った。

「なんとたっておれさまはしょーらい、オールマイトみたいなヒーローになるからな！泣いてるやつたすけるのもヒーローのしごとだ！」

「ほんと…？わたし、かえられる？」

思わぬ提案に縋るように言えば、

「おう！おれはヒーローだからな！」

眩しい笑顔とともに手を差し出された。

握った手のひらは、幼子独特の柔らかさをしながらも、とても暖かくて大きかった。不安で泣いてばかりだった私に手を差し伸べて、助けてくれると言ってくれたその少年の存在は、とてもとても嬉しくて、オールマイトなんか目じやないくらいカツコよくて、その笑顔に元気をもらえて、そして私もこんな人になりたいなあと、心の奥の奥で少しだけ思った。

これがヒーローを目指す私の原点^{オリジン}。

00 雄英入学試験 前編

「藤乃、もうすぐ着くよー」

お父さんの声でふつと現実に戻ってくる。いつの間にかうたた寝してしまっていたみたいで、車のルームミラー越しにお父さんと目が合つて、その目が微笑ましいものを見たと言いたげに緩く弧を描く。

「流石僕たちの娘！難関雄英高校の入試だけど、全然緊張はしてないんだねえ」

「そんなことはないけれど：後は全力を出しきるだけなもの」

「まあ藤乃なら心配はないね。だって僕と母さんの娘だし！」

「ふふ、ありがとうお父さん」

父の信頼が嬉しくて笑みを浮かべながら走る車の窓の外を見れば、歩道には多種多様な制服を纏った学生たちが同じ方向に歩いている。私達が向かっている方向と同じなので、きつと同じく雄英を受験する生徒だろう。

気づけばあと200mもないところに巨大な建物と長い長い外壁が見え始めた。人の波も送迎の車も増えてきて、これ以上進むと、私はいいけれどお父さんの車が出られなくなるかもしれない。

「お父さん、ここでいいわ」

「え？ 正門まで行かなくていいのかい？」

「人も車も多くなってきたし、車出られなくなっちゃうよ？ ここから歩くことにするね」

「そうか……あ、さつきも言ったけど、帰りは相棒サイドキックの癒手くんが迎えに来てくれるから

ね！ えっと、最初が筆記試験で、それから実技試験でしょ？ 帰りは16時くらい？」

鞆の中から入試のプログラムを取り出して確認すれば、午前からお昼休憩を挟みながら5教科の筆記試験、そして実技試験で終了時刻が16時と記載している。

「試験終了が16時だから、16時半くらいがいいかな」

「了解。じゃあそれくらいに来てもらえるよう連絡入れとくよ」

「うん、お願いするね」

昨日から何回もした荷物の確認をざっとして、首にお気に入りの白いマフラーを巻く。季節は2月。まだまだ肌寒い時期なので防寒はしっかりしないと。学校指定のコートのポケットから白い手袋を取り出して身につけてから車の外に出た。

「藤乃！」

いつの間にか助手席側の窓が開いてそこからお父さんが顔を覗かせる。

「全力でやっておいで！」

「……うん！ いつてきます！」

お父さんの声援に笑顔で応えて、カバンの紐をギュッと握って歩き出した。

塀沿いに歩いていけばほどなく正門らしきところが見えてきた。学生服の人の波も吸い込まれるようにそこに向かっていて、少しだけドキドキしてくる。後少しで正門だという距離で、私の数歩前を歩いている黒い背中、おそらく学ランだろうか。その背中の上にいつか見た自分とは違う金色が見えて思わず足が止まる。

「(え…)」

金色の彼は、知り合いだろうか、正門前で佇んでいた緑色の髪ふわふわした頭の男の子を一瞥？した後、緑の彼に背を向けて正門をくぐろうとしたその時、ちょうど横を向いた彼とばかりと目が合った。

いきなりのことで特に反応を返せずにいれば、少しだけ目を見開いてそのまま行ってしまう。

あの反応は、覚えていてくれたのだろうか。ほんの少しだけ期待をいだきつつ再び足を動かして正門に向かう。そして、門を潜ろうとしたところで件の緑髪の男の子が駆けそうになって思わず手を出そうとしたところで、茶色髪の女の子の個性で事なきを得、

そつと手を下ろして改めて正門をくぐって雄英高校の敷地に足を踏み入れた。

「今問題用紙と答案用紙を配ってますので少々お待ちください」

早いものでもう5教科目。これが筆記最後で、このあとは実技試験。今は試験3分前で係の方が受験生それぞれに答案用紙を配っているのを眺めていれば、隣の席からなんだか焦ったような小さい声が聞こえた。

「げっ鉛筆削るの忘れた……無事なのは……やべえ、無え……」

どうやら芯が折れて使える鉛筆が無いらしい赤い髪の男の子は、必死にペンケースやカバンを探しているものかどうかやらず備は無さそうだ。

「あの……」

「!あ、すつすいません!煩かったつすか?」

「これ、良ければ使ってください」

自分のペンケースから予備の鉛筆を差し出せば、驚いたような顔で私の顔と鉛筆を交互に見ていて、ちらりと係の人を伺えばそろそろ用紙を配り終えて試験が始まりそうなので、有無を言わず彼の手に鉛筆を握らせる。

「！え、あの」

「それでは最終教科の筆記試験開始します」

なにか言いたげではあったものの号令がかかったので前を向く。そして響く「始めてください」の合図でいつせいに試験用紙を捲り眼の前の問題に集中し始めた。

・

・

・

「時間です、筆記具をおいでください。答案用紙は係の者が回収しますのでそのままお願いします。では、この後講堂にてヒーロー科実技試験の説明がありますのでそちらにご移動お願いいたします」

係の人が言い終わるやいなや、筆記を終えたということとで少しだけ緩んだ空気があちこちでし始める。

軽く荷物をまとめて、カバンにコート、マフラーと忘れ物が無いかを確認して席を立ったときに隣から「あの！」と声をかけられた。

「これ！めっちゃ助かった！あ、助かりました！ありがとうございます！」

「ふふ、お役に立てたようで良かった」

笑顔でどういたしましてを言って鉛筆を受け取る。

「いや本当にもう駄目かと思つてたから本当に助かつた！お礼したいんだけど……！」
「大袈裟ねえ。お礼なんて別に大丈夫ですよ。それより、講堂に移動しませんか？」
カバンに鉛筆をしまつて、荷物を手に持ちながら教室の出入り口を指させば慌てて荷物を纏め始める彼にクスリとひとつ笑いを零す。

なんとなく連れ立つて教室を出れば、講堂へ向かう道すがら自己紹介が始まつた。

「俺、結田付中の切島。切島鋭児郎！」

「聖グレイス女学院の天使藤乃です、よろしくお願いしますね、切島くん」

「よろしく！タメ口でいいって……にしてもやっぱり聖女だったか。その制服有名だよな！」

「？そなの？確かに歴史ある学校だから有名だけれど、制服も有名なのねえ」

歩きながら小声で世間話していたら、鉛筆のお礼にジューズを奢ってもらうことになつてしまつた。別にいいのにと言つたら、本当に助かつたから！と。ずいぶん義理堅い人なんだなあと思ひながら、それならこのあとの実技試験も頑張つて雄英^{ユウエイ}で再会したらねと言へば、一瞬きよんとしたものの、おう！と頼もしい返事が。これで私自身が落ちたらかつこ悪いので、なおさら頑張らなきゃと心の中で気合を入れ直した。

「そういえば天使さんは実技の会場は何処だったんだ？」

「私は……C、ですな。」

「そっか、俺はEなんだ。お互い頑張ろうな！」

「ええ、再会できるのを楽しみにしてるわ」

「じゃ、俺席こつちみたいだから」

「ええ、お互い全力を尽くしましょうね」

「おう！」

講堂の入り口で霧島くんと別れて、受験票の番号の通りの席を探す。

自分の座席の下に荷物をおいてなんとなしに講堂を見渡せば、沢山の人が轟めくのにまだ部屋の広さに余裕を感じるから流石雄英高校：なんて感心しつつ、うちの学校の礼拝堂より大きいかしらと余所事を考えながらゆっくり見回していれば、ふと何故だか人の視線を感じるような。少し耳を済ませてヒソヒソ聞こえる声に意識を向ければ、「聖女」やら「綺麗」やらの単語が拾えて、なるほどこの制服は目立つのかと納得した。そういうええさつきも切島くん制服が有名だと聞いたなあなんてまた余所事に思考が飛びそうになった時、キーンとマイクに音が入った時独特の音が響いた。

まだ説明の段階ではあるけれど、いよいよ実技試験！と気持ちを入れ替え前を向いた。

01 雄英入学試験 後編

説明会を終え指定の更衣室で動きやすい服装に着替えて今立つココは、雄英高校演習場C。

ぞくぞくと着替え終えた受験者達が会場入りしてきて、各々精神統一なり準備運動をしている様子がそこかしこで見える。

かく言う私も、いつもトレーニングで着ている背中の上半分には布がないハイネックの白いインナーにはジャージという出で立ちでぐぐつと背中を伸ばす。仮想敵^{ザイラン}という名のロボット相手の戦闘試験、おそらくほぼほぼ翔んでいることになるだろうから念入りに背中を解しておく。

準備運動を初めて数分、物見台のような高いところから姿を表したのはプロヒーロー《13号》さん。彼が現れたということはそろそろ始まるのかなと、いつでもスタートしていいように翼を出す。背中に翼が生えるいつもの感覚と視界の端に見える白い羽。羽を出した途端周囲からなんだか「おお」だとか「うわあ」だとか声が聞こえたような気がしたけれど、変形型の中でも翼なんて珍しくないし多分違う誰かのことでしようという気にせず合図を待つ。

「演習場Cの受験者の皆さんは全員集まっていますね？では、これより試験を開始します。制限時間は10分。はいでは、スタート！」

スタートの合図に翼と足に力を込めて空に舞い上がる。あつという間に20mほど飛び上がって、飛行しながら敵ロボットを探し始めればすぐに見つかった。強度がわからなかったのとおりあえず試し打ち、と空の手で弓矢を構えれば、光が収束してあつという間に光の弓矢になる。そのままロボ目掛けて矢を射れば、ずぶりと矢が刺さりその後ボンツと派手な音を立てて頭部にショートしたように小爆発を起こした。やはり機械なのか、ショートしたらそのまま動きが止まる。

「そんなに硬くないみたいね…」

思ったほど硬くないみたいなので、そのまま空を飛びながら次々と地上を闊歩するロボ目掛けて矢を射ってゆく。5、10、15…と順調に数を重ねていきもう少して20といったところで、ロボが壊した瓦礫の影に片膝を抱えて蹲る人を見つける。

「！どうしました？怪我ですか？」

思わず地上に降りて駆け寄れば、俯いていた視線をあげて女の子が「足が…」と呟いた。

「足？こっちの伸ばしてる方の足かしら？」

「捻ったみたいで…折角の試験なのに……っ」

悔しげにまたうつむく女の子。捻った方の足を見てみれば見かけではわからないけれど、相当痛いのか少しだけ震えている。

「足以外は？怪我はない？」

「足以外は大丈夫だけど……でもこの足じゃもう……っ」

「捻挫よね？ちよつと触るわね」

一言断つて患部であろうところを触れば「いつ……！」と小さく悲鳴があがったけれど、どうやら骨や腱は無事で本当にただの捻挫のようで安心する。

「これくらいなら大丈夫よ」

「え？」

女の子当人を安心させるように微笑み、次いで患部に視線を戻して両手を翳す。すると、先程弓矢を形成したように手のひらに光が集まってポウつと彼女の患部を光が覆う。時間にして数秒、そろそろかと光を収めれば、当の女の子がきよんとしたような驚いたような顔をしていた。

「どう？まだ痛い？」

「！え？痛くない?!なんで?!」

「大丈夫そうね。じゃあまだ時間はあるから、お互い試験頑張りましょうね」

平気そうな様子を見てもう大丈夫かとその場を離れる。後ろから女の子の声が聞こ

えたけれど、時間は有限なものね、と振り返らずにまた大空へ舞い戻って口ポ探しに戻る私だった。

道中で怪我人を見つけたら安全地帯に退避させたり怪我を治したりしながら他の受験者の取りこぼしを射抜いて順調にポイントを重ねていったら、説明会にあったOPロボがとうとう出てきた。空の上から遠目でだけれどその異様な大きさを目にして思わず言葉をなくす。地上を見れば、どうやらみんな退避しているようで一斉にスタート地点方面へ駆け出している。

空中にいる分余裕がある私は、逃げ遅れている人や怪我している人がいないか見回しながら飛行していれば、どこからか小さく「たすけて」の声が聞こえた。慌てて声が聞こえた方を低空飛行で探していれば、瓦礫の下で藻掻いている……ジャージの上下とグローブ?を見つける。

「たーすーけーてー!」

「えつと……?」

「!おお天使っぽい人!お願い手伝って!足がハマって抜け出せないのー!」

「ええつと、透明?なのね?あの、えつと、瓦礫はこれ?」

「そうーアイアム透明人間！その瓦礫だよー！お願い手伝つてー！」

ちらりと後方を伺えば、例の巨大ロボとの距離はだいたい2、300mくらいだけだ、あの大きさからして然程時間に余裕はないだろうと急いで瓦礫を退かすために動き出す。

まずは素手で持ち上がるか試したけれど、瓦礫の塊が大きくて私の力では持ち上がらない。ならばと瓦礫の出っ張り何箇所かに光を紐状にしてくりつけて暇で瓦礫を吊るようになりながら思いっきり翔ぶ！

「おおー！今ゴトつて音したよー！もう少し！」

「ううっ……うううう!!」

すぐ背後から今までに無いくらいバツバツと羽ばたきが聞こえるけれどそんなものに意識を向けちゃうとせっかくなんとなく持ち上がってきた瓦礫を落としてしまいそうになるので必死に目の前に集中する。

「もうちよつと！あとーセンチ！」

「うううう……ッはあああ!!」

「抜けたー！」

(声音からして)彼女が無事に這い出てきたのを確認してゆつくりと瓦礫を吊り上げる光の紐から力を抜く。流石に少し疲れた……と小さく息を吐きながら彼女の元へ降り立

つと、ペタンと地面に座ったまま激しい身振り手振りで「ありがとう！」と言われた。

「間に合つてよかつた……さ、OPロボが近づいていますよ。退避しましょう?」

「ええつと……足やつちやつて……」

「それは……」

言いかけたところでドーンと大きな音が。ハッと顔を上げればもう残り数十mの距離に例のロボがいて、急いで退避を!と彼女の様子を見る。

「うわああああ巨大ロボ!!」

「足は?!走れる?!」

「無理!!」

「わかりました。高所恐怖症だったら……ごめんなさいね!!」

言いながらジャージからだいたいのあたりをつけて膝裏と背中に手を回して抱き上げ、一気に空へ駆け上がる。

「うひゃあああああ?!」

「しつかり捕まつててね!」

ほんの数瞬でいつの間にか肉薄してた巨大ロボの腕をくぐり抜ければ、空に到達するまではあつと言う間で。気づけば首に回っていた透明な腕の温もりに、透明でもやつぱり体温はあるんだなあなんて考えながらロボから距離を取るべく翔ぶ。

「すごいすごい！私空飛んでる!!」

「良かった、高所恐怖症は無いみたいね」

「大丈夫だよー！むしろ好き！ジェットコースターとかめっちゃ好き！」

キヤツキヤツとはしやぎながら空の逃避行を楽しんでる彼女。ちらりと後ろを振り返ればロボからはだいぶ距離を取れたみたいでもう大丈夫だろうと息をつく。

「ふふふ、ジェットコースターとか好きなのね。じゃあ……こんなのは、どう？」

言い終わるやいなや、長年の飛行訓練の成果を見せるかのように宙返りやら逆さま飛行やらアクロバティックな飛行をすれば、嬉しげに「キヤー！なにこれ楽しいー！」と悲鳴混じりに声をあげてくれる。

他の受験者が退避していたスタート地点に私達が着いたところで、ちようど13号さんからの終了の合図が響き渡る。他の受験生の視線を浴びながら、ゆっくりと地上に降り立ち、手頃な瓦礫の上に彼女を座らせる。

「あー楽しかった！」

「ふふふ、楽しんでもらえて良かったわあ。…さて、怪我した足はどちら？」

「？右足だよ？」

「右足ね。捻挫かしら？」

「たぶん！血は出てないし！」

「ちよつと失礼するわね」

彼女のジャージを慎重に捲りあげておそらく患部であろう足を晒す。やはり靴とジャージの間は透明で地面がそのまま見えるけれど、多分ココだろうというところに手をかざして光を集めれば、「おおお?! あつたかい! すごい!」と治癒されてる本人から歓声があがった。

「……よし。どう? まだ痛い?」

「うわあ! 痛くない! えっえっすごい! 天使?! 天使サマ?!」

「あはは、確かに私の個性は『天使』っていうけれど、天使サマって呼ばれたのは初めてだわあ、ふふっ」

「でもホントにすごいよ?! あつという間に治っちゃったもん! あっえつと、助けてくれてありがとう! 私葉隠透!」

「天使藤乃です。よろしくね」

座っていた瓦礫から立ち上がって、本当に足が治っているのが不思議なのかその場でピョンピョンと飛び跳ねながら興奮を顕にする彼女、葉隠さんと和やかに自己紹介を交わす。と、そこで別のところから声がかかった。

「あの!」

不思議に思いながら声の方へ顔を向ければ、そこには最初に怪我を治したあの女の子

が。

「あら、貴女……」

「あの！私も助けてくれてありがとう！あの後もなんとか試験続けることができて、受かっているかはわからないけど、全力は出せたから悔いはないよ！」

「そう……良かった！もう怪我はない？」

「うん！大丈夫！本当にありがとう！」

「どういたしまして！」

にこやかにその女の子と話していれば、「俺もあの時は……」とか「あたしも！避難させてくれてありがとう！」とか「天使サマ！」とか「付き合ってください！」などと続々と試験中に手を貸した方たちから矢継ぎ早に声を掛けられて気づけば人の群れに囲まれていた。各々にそれぞれ返事を返しながら、その群れを抜けるのが叶ったのはおよそ15分後のことだった。

人の群れから脱出して更衣室で着替え、無事に迎えに来てくれた癒手さんと合流。帰路につく。

疲れた体を車のシートに預けながら、全力は出し切って後悔は無いので、後は結果を待つだけだなあなんて考えていたら、車の揺れと暖房の暖かな空気でだんだん瞼が重くなってきた。

さざ波のようにゆつくりと迫ってくる睡魔に抵抗せず身を委ねながら、頭の遠くで彼はとうだったのかな…と独り言ちた。

02 合格発表

3月某日、気づけば雄英入学試験から一週間経ったある日。

今年で3歳になる小さくて可愛い弟・蒼翔あおとと遊びながらのんびり休日を謳歌していた。

「ねえたん、ねえたん！つぎこれ！」

「《クッキープリンセス》？あーちゃん、次はこの絵本がいいの？」

「んー！」

いそいそとソファアーに座ってる私の膝の上に腰掛け、早く早くと催促するように絵本を持つている腕をぺちぺちしてくる我が家の小さな天使の様子に笑みを零しつつ、見えるように弟の目の前で絵本を開いてゆつくりと読み始める。と、ここで我が家のお手伝いさん、物間 寧子ねいこさんがリビングに入ってきた。

「藤乃さん、雄英からお手紙ですよ」

「寧子さん、ありがとうございます」

「ねえたん？おてがみ？」

「ええ、とつても大事な、ね」

絵本を一旦脇に置いて受け取った封筒を開封する。と、入ってるのは手紙が一枚と映像再生端末が一つ。

まずは手紙からかしら、と封筒の中から手紙を取り出した時、ローテーブルに置いた再生端末を物珍しそうに触っていた蒼翔が偶然スイッチを押してしまつたらしく空中にヴン…という起動音とともに映像が投影された。

《私がア！投影されたアアツ!!》

「?!え、オールマイト…?あ、電気！えつと、停止はこれかしら…」

いきなりのオールマイトで少しびっくりしたものの、現在は明るい昼間のリビングで投影されたものだから少し映像が見づらい。なので、おそらく停止ボタンであろう■ボタンを押せばいつもの笑みでオールマイトの映像が止まったので、見やすくするべく部屋を暗くしようとまずは膝の上にあーちゃんをどかさうとすれば寧子さんから声がかかる。

「藤乃さん、カーテンは私が」

「ああ、ありがとうございます。…それにしてもあーちゃん?わからないものをいきなり触つたらいけないでしょう?もう」

「ごめんしゃい…」

「次からはしないでね。お姉ちゃんとの約束、ね?」

「あーいー」

元氣な返事に良い子良い子、と私と同じふわふわとした金色の髪を撫でれば、撫でられて嬉しいのかふにやっと笑う弟につられて私も笑う。そうこうしてる間に寧子さんがカーテンを締め終れば、昼間といえども部屋が薄暗くなった。これくらいなら大丈夫かなと再度テーブルの上の再生端末の再生ボタンをON。オールマイトがまた動き出した。

《H A H A H A！驚いたかな？何故私が投影されたのか！…ズバリ！それは、今年度から私も雄英で教鞭を取るからだよ！！》

オールマイトが雄英に？思わぬビッグニュースに再び驚くも、続きを黙って待つ。

《さて天使少女！先日の入試結果をお伝えしよう！》

いよいよなお話に思わず心臓がドキドキする。映像から聞こえるドラムロール音が更にドキドキを加速させているようで、ちらりと見ればいつの間にか隣りに座っていた寧子さんも両手を握りしめて固唾を呑んで同じく映像のオールマイトを見ているし、膝の上のあーちゃんもよくわからないなりにとても真剣な表情だ。

《結果発表！！筆記は文句なしの好成績！そして気になる実技試験はア！！…敵 ワイラン ポイン

ト・41ポイント！そして、今回試験の裏で実は秘密裏に審査・加算されているポイントがある。それが、レスキューポイントツ！！こちらは全受験者中堂々1位の70ポイン

ト！……よって、総得点116ポイントで文句なしの入試1位だア！おめでとう！！》

入試1位……言葉にならなくてついつい口に手をあて映像のポイント情報を食い入るように見つめる。

《……流石、Dr. ライトとエル・レディの娘さんだけあるね！私も入試の映像を見させてもらったが、怪我人の治療や避難の手助け、実にお見事！敵を倒すだけがヒーローの仕事じゃあない。君のその助けようという尊い心は誇つていいッ！……再度言おう、入学おめでとう！》

オールマイトの言葉に胸がいっぱいに嬉しさが広がるも、まさか両親の名前が出てくるなんてと少し驚く。同じヒーローだし何処かで接点があつても不思議ではないけれど、まさかオールマイトとつながりがあるなんて聞いたこともなかった。

《さて、入学に必要な物品や手続きなどについては同封してある用紙に記載されているから確認するように！》

先程取り出した手紙がおそらく用紙だろう。流れ的にももうそろそろ映像も終わりそうだし、まずは両親に合格の連絡をして、用紙を確認して入学に必要な物を確認して……と頭の中で軽く今後の予定を立てていけば、映像にはまさかの続きがあつた。

《……と、本来の受験者にはここで締め言葉とともに映像が終わるんだが、君の場合少し特殊だね。続いてはこの方からお話して頂こう！》

え?と思ったのも束の間、オールマイトが画面端にはけてから入れ替わるように映像に出てきたのは……

《……よっこらしよ、と……もう喋っても良いのかい?あ、そのまま回ってる?……こほん。あたしやあ雄英で養護教諭をやってるリカバリーガールだよ。天使藤乃……入試の様子を見せてもらったよ。あんたのおかげで毎年大なり小なり怪我人が出て大忙しなのに、あんたが演習やってた会場だけ怪我人が少なくてねえ。楽させてもらったよ。まさか光黄こうきの娘が雄英に入ってくるなんて……あたしも年取ったねえ》

思わぬ人からまたもや思わぬ名前が出てきて驚くも、リカバリーガールはさらに爆弾を落とした。

《光黄……いや、Dr. ライトはね、あたしの弟子の一人だね。治癒の能力についてはあたしが叩き込んだんだよ。で、だ……あの子の娘なら頭もいんだろうし察しはついてると思うけど、あんたの能力を見て、あんたにその気があるならあたしが教鞭をとるのも吝かじやないと思ってるね。知っての通り、治癒系の個性持ちは他の個性に比べると少ない。だから公にはしていなくても、毎年治癒系の個性がいた場合こうして特別教室のお誘いしてるんだよ。最初はただの弟子育成だったのに気づいたら【チヨ教室】なんて名前がついてるけどね。……はあ、年寄りに長々と話させるんじゃないよ。お茶かなんか無いのかい?》

一旦お茶休憩をとっているリカバリーガールを見ながら、今まで聞いたことも無い事実、予期せぬ提案にしばし頭を巡らせる。と、一息ついたリカバリーガールが再び口を開いた。

《……ふう。ええと、どこまで話したかね？ああ、そうそう、現状この特別教室に在籍しているのは、3年の普通科2名、2年のサポーター科が1名、1年ではあんただけだよ。この合格通知が届いた日からだいたい3日後くらいかねえ？それくらいに、雄英の来客用使い切りセキユリティーパスが届くはずだから、セキユリティーパスに同封してある日にちに一旦会いにおいて。返事はその時に聞くよ。それじゃ、会えるのを楽しみにしてるよ》

そうしてプツリと映像が消える。私と寧子さんはあまりの内容に若干放心していて、あーちゃんはりカバリーガールが話している途中から話が難しくて飽きたのかうとうととしていた。

とりあえず寧子さんにカーテンを開けてもらって部屋を明るくする。

「なんだか凄いことになりましたねえ…」

「ええ、本当に。合格や入試1位は素直に嬉しいけれど、そのあとのリカバリーガールの話もうびつくりし過ぎて……」

「とりあえず、光黄さんがお弟子さんだったという話でしたから、光黄さんが帰ってから

話し合われたらどうです？」

「ええ、そうします…」

わからないこと、というより両親から今まで聞いたこともないような話がたくさんでしてきたので、寧子さんの言う通りいろいろ考えるのはあとでいいだろうと一旦考えるのを辞めた。

部屋がいきなり明るくなってうとうとが醒めたのか、「ねえたん、おやつ！」というあーちゃんの言葉に、とりあえず今は衝撃を受けた脳みそを回復すべく糖分を取ることにした。

《———それじゃ、会えるのを楽しみにしてるよ》

今日の昼にも見た映像がブツリと消える。

時刻は夜、合格の連絡を入れておいた両親から両手いっぱいのお祝いと称したお土産

と豪華なご飯を楽しんだ後、寝支度を整えて一足先にあーちゃんを寝かしつけ、ソファーで対面して両親と一緒に再度映像を見終わったところだった。

「はあああ流石僕たちの娘！入試1位だった!!」

「ね！ね！流石藤乃よねー！何度も言っちゃうけど、本当に入学おめでとう!!」

「お父さんお母さん、ありがとう。：でもね、聞きたいことが多すぎて…」

今日何度目かのおめでとうとはしやぎつばなしの両親の様子に思わず苦笑いが溢れる。

「ああ、そうだね。藤乃には話したことなかったね。と言っても、治与先生の言ってた通り、医療系ヒーローやるにあたって先生に師事してたってだけだよ。当時は『チヨ教室』なんて名前はなかったけど、僕の他にも弟子はいたから授業っぽいのもあったしね。いやーレポートたくさん書かされたなあ。実習は吐くほどキツかったし！ちなみに今でも年賀状やらで挨拶はしてるかな」

「そうだったの……ああ、オールマイトは？お知り合いのようだったけれど……」

「オールマイトに関してはまあ守秘義務もあるんだけど……まあ昔大きな怪我をして僕や他に何人か医療系の個性持ちが治療にあたったって関係だよ」

「そんなことが……」

あのオールマイトが大怪我って少し想像がつかないけれど、そういうことなら納得は

できる。要は父の患者さんだったということだろう。

「それで？藤乃はどうするの？」

「……お話を、受けようと思ってます」

自分の正直な気持ちを告げれば、まるで予想していたかのような両親の様子。次いで「やっぱりね」とお母さんが一言。

「藤乃は昔からお父さんみたいなのヒーローになる！って言ってたもんね。同じヒーローとしてはちよっぴり悔しいけど、でも藤乃には光黄くんみたいなのヒーローになれる力がある。頑張りなさい」

「はいっお母さん！」

「じゃあ僕からも一言。……正直ね、僕はヒーローはともかく医療系ヒーローを目指してほしくは無いって思ってるよ」

「……え？」

突然のお父さんの言葉に体が固まった。

「反対……とはちよつと違うんだけど、やっぱり実際に現場に出るとね……。特に医療系の現場は大変だよ。必ず救えるわけじゃないっていうのを嫌でも実感する。それは医療の現場では勿論当たり前前んだけど、僕ら医療系ヒーローは特にそうだ。ヒーローっていうのは、何か、が起こらないと駆けつけない。逆に言うと、何か、があつ

てから駆けつけるから現場は常に医療の最前線だ。機器や薬が側にある病院内で診察するのはワケが違う。：正直、手元手持ちにある個性ちからと仲間、物資でなんとかしなきゃいけない状況なんてザラで、目一杯手を尽くしても零れ落ちる命もある」

医療系ヒーローとして日々現場に立つてるお父さんの重い言葉がずっしりと私にのしかかる感覚に陥る。

「父親としては子供に憧れてもらえるのは嬉しい限りだけどね。でも、憧れだけじゃやっていけない世界でもある。いざって時、看取る覚悟をしないとイケない。……藤乃は、どう？ その覚悟、持てそう？」

お父さんの：いや、医療系ヒーロー・Dr. ライトの問いかけに少しだけ怖じ気づいて視線を俯かせるも、一度深呼吸してから視線をあげる。

いつもは優しげな笑みを浮かべるお父さんがいつになく真剣な顔をしていて、隣のお母さんもことの成り行きを静観しているように静かに見守ってた。

「：ヒーローになりたいって思った小さい頃から、お父さんの事務所や病院を見て、もちろん医療ではどうにもできない人を見てきたりもしました。昨日までは笑ってお話ししてたお友達の子のベッドが次の日には何もなかったように空になってたり、敵の事件で足を怪我して、でもリハビリ頑張ってまたサッカーやるんだって笑ってたお兄ちゃんが、実はもう治らない足に病室で一人泣いていたり……まだまだ小さな世界かも

しれないけど、それでも見てきたつもりです。お父さんの憧れだけではやっていけない世界っていうのも少しだけ想像もつきません。……正直、看取る覚悟はまだわかりません。でも、一度憧れたんだから貫き通したい……！ヒーローになりたいと思わせてくれたあの男の子にも、ずっと見てきた……医療系ヒーローで一番憧れてるお父さんにも、恥ずかしい姿は見せませんっ……だから、勉強……させてくれませんか……？」

まっすぐお父さんの目を見て言い切った後、立ち上がって頭を下げた。

数秒経つても何も言わない両親にだんだん不安が募るけれど、それでも頭を下げ続けていれば、お父さんから「はあああああ」と大きな大きなため息が聞こえた。

「赤羽ちゃんあかね!!僕らの娘がこんなに尊い……！天使か！いや天使だったわ!!」

「そうだねー光黄くん！二人共良い子に育ってくれて嬉しいねー!!」

思わず頭を上げれば、顔を両手で覆い蹲る父と、父の横からぎゅっと抱きついてよしよしと背中を撫でている母の姿。先程までの空気との違いに少しだけ呆気にとられるものの、いつもの両親だと肩の力を抜いてソファーに座り直す。

「……藤乃」

「ーはいっ」

「治与先生の授業は死ぬほどキツイし、それに加えてヒーロー科の勉強や訓練もある。普通にヒーロー目指すより倍大変だけど……頑張りなさい」

「はいつー！」

医療系ヒーローDr. ライトとしてじやなく、天使 光黄といういつもの優しげな笑顔のお父さんが、笑顔の中に

まるで何か今後楽しみなものを見つけたような表情を滲ませてそう言った。

03 入学準備

合格発表から幾日、無事に卒業式を終えて後は入学を待つ身となった今、やらなきやいけないことはいろいろある。例えば、通学カバンや靴の用意、制服や体操服の採寸、教科書の用意やその他細かいことを上げればキリがない。

1学年1ークラスもある雄英はいわゆるマンモス校で、当然被服店などで採寸する際期間中各々が訪れる日付がバラけるとは言え途方もない人が押し寄せるのが目に見えるので指定被服店は関東各県に5店舗はある。

その他の学用品、例えば靴や鞆は学校指定ではなく個人の自由で、教科書などは自宅に郵送される。

今日はその制服・運動着の採寸の為、都内某所の被服店に来ていた。

制服・運動着自体はどの科も共通なので、複数店舗で人が分散しているとは言えやはり人は多い。あちこちで見かける両親または片親で受付や採寸しているのはおそらく同じ新入生だろう。発動型はともかく、私のように体の一部を変化させる変形型や常時個性が発動しているような異形型はより詳しく採寸して、場合によっては体に合うように改造をしなければいけないので、普通の人に比べると少し時間がかかるけれど、割と

早い段階に訪れてもうすでに採寸が終わっている私は現在一緒に来ている母を待つているところだった。

郵送手続きや会計を済ませるカウンターは、同じような人で列をなしていてまだまだ母の番は遠いだろうことが遠目でもわかって、いっそ近くのカフェで時間でも潰そうかと思っていたところ、気づけば私が立っていた壁際の数歩隣に一人の小さな女の子がいるのに気づいた。

今日手続きに来た新入生のご家族だろうとなんとなしに様子を伺っていたのだけけれど、なんだかオロオロとしていてまるで何かを探すようにキョロキョロとしている姿にピンと来た。

「こんにちわ」

怖がらせないようにゆっくり歩み寄りながら声を掛けて、視線を合わせるために女の子のすぐ目の前に膝をついた。

「けろっ……っ、こんにちわ!」

びっくりしつつも挨拶を返してくれた女の子。一瞬「(けろ?)」と思ったものの、なるほどよく見ればまん丸の目や少しだけ大きい口元はどことなくカエルっぽいような気がするのでおそらくそういう個性なのだろうと一人納得する。

「私ね、今年から雄英のヒーロー科に入学する天使藤乃アマツカフジノっていうの」

「！ヒーロー科……お姉ちゃんとおなじ……！」

「あらそうなのね。今日はお姉さんの制服を作りに来たのかしら？」

「うん、そうなの！ケロっ！」

自分のお姉さんと同じヒーロー科ということはどうやら変に警戒はされていないみたいで内心ホっとする。聞けば愛知からお母さんとお姉さんとお兄さんの4人で来たらしく、別件で東京に用事があったからそのついでに制服を作りに来たらしい。

「そういえば、お名前を聞いてもいいかしら？」

「蛙吹 さつきです！6さいです！」

「さつきちゃんね。よろしくね。……ところで、そのお母様たちは何処にいるのかしら？」

「……わからない。気づいたら一人で……けるお……」

やはり迷子だったみたいで、聞いた瞬間に俯いてしまったさつきちゃん。二つ括りて可愛く結んである頭をそつと撫でれば顔を上げたさつきちゃんと目が合った。安心させるようににっこり微笑んで口を開く。

「大丈夫！私と一緒にお母様たちを探しましょうか」

「！ほんと……？」

「ええ、勿論！これでもヒーローの卵だからね、ふふ」

さつきちゃんに一つウインクをして、さて何処から探したものかと考えながら立ち上

がる。

「最後にお母様達と一緒にいたところはわかる?」

「わかる!」

「じゃあ一先ずそこまで行きましょうか」

また迷わないように手を…と思つたけれど、如何せん女子の中でも背の高いほうな私と小柄なさつきちゃんでは歩きづらいかもしれないと考えて、一言断つて彼女を抱き上げた。あーちゃんとは違う小さな子の重さに一瞬戸惑つたけれど、いつものようにしっかりと抱っこする。

「さて、では道案内をお願いできますか?小さなカエルさん?」

「けろ!まかせて!」

元気な声を合図に、さつきちゃんの家族を探し隊が意気揚々と出発するのであつた。

「さつきー!」

さつきちゃんの家族を探し隊が出発してから15分程、最後に家族と一緒にいたところの周辺で人が多そうなところを重点的に探していた私達の後方から声が聞こえてき

た。そちらを振り向けば、おそらくお兄さんであろう少年とその後ろにはお母様と、道中教えて貰った、梅雨、お姉さんが立っていた。

抱っこしていたさつきちゃんをゆっくりと地面に下ろせば、ご家族の3人がこちらに走り寄ってきた。

「さつき！おまえ…」

「無事で良かった…探したのよお、けろお…っ」

「本当に無事で良かったわ…」

「お母さん、お姉ちゃん、お兄ちゃん…ごめんさい」

無事に合流できて良かった、と胸を撫で下ろしてれば、さつきちゃんのお母様が私の方に話しかけてきた。

「貴女がさつきを保護してくださいね？本当にありがとうございます」

「いえいえとんでもないです！…無事合流できて良かったね、さつきちゃん」

「ふじのお姉ちゃんありがとう！…あ、お姉ちゃん！ふじのお姉ちゃんもゆーえーなんだったー！」

「あら…ええと、先輩かしら？妹を保護していただきありがとうございます」

「大したことはしてませんよ。…ふふ、実は同級生なんですよ？」

「けろっ？…じゃあ新入生なの？」

「ええ、雄英ヒーロー科入学予定の天使藤乃です。よろしくね、蛙吹梅雨さん？」

これも縁、仲良くしてくださいなと手を差し出せば、体が小柄なのに少しだけ大きな手で握り返してくれた。

「ふふ、嬉しいわ。まだ入学していないのにもうお友達ができるなんて。蛙吹梅雨よ。梅雨ちゃんと呼んで？天使ちゃん」

「ええ！私も雄英のお友達第一号がこんな可愛いカエルさんで嬉しいわ、梅雨ちゃん！私のことも藤乃でいいのよ」

「ケロケロっ…よろしくね、藤乃ちゃん」

ちようどその時、諸々終わつたらしい母から連絡がきたので、梅雨ちゃんと手早く連絡先を交換してまた学校で！と別れた。本当にありがとうございました、と頭を下げるお母様と、またねと手を降つてくれた梅雨ちゃんとさつきちゃん、それとお兄さんを手を振り返して母の元へ向かう。

「藤乃ー！」

「お母さん！もう済んだの？」

「バッチリ！あとは届くのを待つのみね！そういえば何処にいたのー？てつきり近くで待つてるかと思つたのに」

「ふふ、ちよつとヒーロー活動して、新しいお友達ができたわ」

「えー？なにそれどういうこと？」

出口に向かって連れ立って歩く中、ついさつきあったことをお母さんに話して聞かせながら、また一つ学校が楽しみな出来事が増えたなあ顔を綻ばせる私だった。

04 雄英高校 入学

眼の前にデンと聳えるのは、雄英高校の正門……ではなく、私が入学するクラス、1—Aの教室の入口だった。

大人3人分はあろうかという程の高さに、お相撲さんでも余裕で通れそうな横幅。いろいろな個性の人がいるからこんな作りなのかしら？と内心首を傾げつつ、つい先日まで通っていた学校と比べてもやはり大きいなという感想が出てくる。

扉の感想に関してはこれくらいにして、いぎーとドアに手をかけて教室の中に入れば、自分では結構早めに来たつもりだったのにすでに何人かが席についていた。

ドアを開けたことで注目を浴びたので、第一印象は大事よね、とにっこり笑って「おはようございます！」と心なしか大きな声を出して挨拶すれば、幾人かは「おはよう」や「おはようございます」と返してくれた。

挨拶を返してもらえたことにホッとして、さて席はどうなってるのかなと見渡してみると、眼鏡の男の子が親切にも声を掛けてくれた。

「おはよう！初日からいい挨拶で感心してしまったよ。ぼ……俺は私立聡明中学出身、飯田天哉だ」

「あら、丁寧な挨拶ありがとうございます。聖グレイス女学院出身の天使藤乃アマツカフジノと申します。飯田くん、よろしくね」

「天使くん、よろしく。それにしても、聖グレイス女学院か……キリスト系の歴史ある有名校じゃあないか！」

「ふふ、出身校を褒めていただいて嬉しいわ。…それより、席はどうなっているのかしら？」

「ああ、出席番号順で黒板に記されているよ。天使くんは、確か僕の前の席だったはずだ」

言いながら案内された席は、廊下側一番端の前から3番目。前の学校では窓側から出席番号が若い順だったので、廊下側は初めてでなんだか少しワクワクした。

駅に荷物を置いて腰掛け、改めて教室を見回す。入り口のドアの大きさからして天井は高く、たった20人の教室なのに十分な広さの室内は、ちらほら見かける背の高い方々でも問題なく使えそうなくらいの開放感があった。

またガラリとドアが開いてクラスメートであろう人たちが入ってくる。

どうやら数人同じタイミングで入ってきたらしくぞくぞくと教室内に入ってくると、その中でつい最近見た子が一人いた。彼女もこちらに気づいたようで、たまらず私から声を掛ける。

「!…梅雨ちゃん!」

「藤乃ちゃん。早いよね。また会えて嬉しいわ」

「私も、また会えて嬉しいわあ。さつきちゃん達は、お元気かしら?」

「ええ、今朝もはりきつてお見送りしてくれたの、ケロケロツ」

嬉しそうに話してくれる梅雨ちゃんは、どうやら私の前の席だったらしく、荷物を置いた梅雨ちゃんと世間話をしていると、飯田くんが驚いたような表情で口を開いた。

「仲がいいんだな。同じ中学かい?まさかあの聖グレイス女学院から二人も雄英に来るとは…」

「え?」

「けろつ…:違うのよ。藤乃ちゃんとは制服の採寸のときにお友達になったの」

「ああ、そうだったのか。失礼した。:僕は私立聡明中学出身、飯田天哉だ。君は?」

「蛙吹梅雨よ。梅雨ちゃんと呼んで。飯田ちゃん」

私を挟んで自己紹介をする二人を見守っていたら、入り口の方からまた人が入ってきた気配がして、次いで「あー!」という何処かで聞いた声があった。思わず声の方を見れば、いつかの透明少女、葉隠透ちゃんが立っている。相変わらず衣服のみが浮いているように見えて、初めて見る人はギョッと驚いているのがわかる。

「天使サマー…:じゃなかった、藤乃ちゃん!一緒のクラスだったんだねー!」

「透ちちゃん、お久しぶりね」

「久しぶりー！連絡はとってたけど顔を合わすのは入試以来だよ！合格の連絡はもらってたけど、同じクラスだったんだー！嬉しいー！」

「ふふ、相変わらず元気ね」

「元気元気！だって今日から雄英生だよ?!テンションアがるでしょー！あ、テンションで思い出した！ねえねえまた空の散歩連れてってよー！」

「気に入ってくれてるのね、ふふふ。ええ、今度機会があればぜひ！それより、荷物置いてきたらどうかしら？席は出席番号順みたいよ？」

「はーい！また後で話そうねー！」

腕のフリで手を振っているのがわかったので、私も手を振り返して自分の席へ向かう透ちちゃんを見送る。

「藤乃ちゃん、お友達かしら？」

「ええ、入試で縁あって、ね」

「天使くんは顔が広いんだな……入学前にクラスメートともう交友を持つてるのか」「クラスが同じなのは偶然だけど、縁あってお友達になれたの。……あら、もう一人」

今しがた入ってきた赤い髪の男の子。もしやあれは……と思っていたら、黒板で席を確認したその男の子がこちら側に歩いてきて、進行方向にいる私と目が合うなり驚いたよ

うな顔になる。

「え……天使さん？」

「やっぱり！久しぶりね、切島くん」

「おおー！一緒のクラスだったのか……それで、また席隣みたいだな。よろしくな、お隣さん！」

「ええ、またよろしくね、お隣さん」

和やかに自己紹介を終えたその時、入り口からバンツと大きな音を立ててドアを開け教室に入ってきた人がいて、あまりにも突然響いた音に思わずそちらを見れば、そこには入試のときにも見た思い出の少年がするりと教室に入ってきた。

むすりと何処か不機嫌そうにカバンを持って入ってきたその人は、ちらりと黒板を一瞥してそのままざつと教室を見渡したときに、あの入試のときのようにバチリと音が立ちそうな勢いで目が合うと、少しだけ目を見開いてからふいに視線を外して自分の席に向かつてしまう。なんとなくそのまま行動を見ていれば、ドカつと席に腰掛けてそのまま足を机に乗せて慥然とした表情で佇んでいた。

「なんだあの態度は！先程のドアの件といい、少し物申してくる！」

お世辞にも褒められるような態度ではない彼の姿に、飯田くんが熱り立って席を立ち、彼の方へずんずんと歩いていく。彼の前に立つなり「やめないか！」と声を上げた

飯田くんと、「ああ?!」と鋭い眼光で睨みつける彼らが言い合いをしているのを眺めていたら、切島くんが「またすげえのが入ってきたなあ」とぼつりと呟いた。

「けるっ…なんだか怖そうな人ね」

「そうねえ、怖い顔よね…ふふっ」

「? 藤乃ちゃん?」

不思議そうに私を呼ぶ梅雨ちゃんに、顔は怖いけど実はとつても優しくて正義感がある男の子なのよ、なんて言えるはずもなく、なんでもないと返していれば、気づいたら教室の入口に近い最近会った男の人が立っていた。

「はい、静かになるのに8秒かかりました。時間は有限…君たちは合理性に欠けるね」
更に男の人が続ける。

「担任の相澤消太だ、よろしくね…」

先日の「チヨ教室」の際に皆さんより早く担任の先生と顔合わせをした私は特に驚くことはなかったけれど、教室の空氣的に皆さん驚いているのが手に取るようにわかった。

今日は初日ということでガイドダンス等で終わるのかしら、と頭の端で疑問に思っていれば、相澤先生は片手に持つ寝袋を突如ゴソゴソと漁りだした。

「早速だが、お前からこれ着てグラウンドに出ろ」

そして取り出したのは何故か雄英の運動着だった。

何故運動着？というかグラウンド？入学式等はどうするのか。頭の中に疑問符を浮かべていれば、突然「天使」と先生に呼ばれたので何事かと目を瞬かせながら返事をする。

「はい…？」

「ちよつと手伝え」

有無を言わさぬ物言いだだったので、席を立つて相澤先生の方へ近寄る。

「廊下の台車に各人が発注した運動着があるからそれ配つてくれ。貴重品はロッカーに。で、配り終わったら更衣室に案内しろ。更衣室はわかるな？」

「え？ええと、はい。グラウンド出口前の更衣室ですよね？」

「ああ。じゃあ俺はグラウンドにいるから、後はよろしく」

「わ、かりました…？」

言うだけ言つてささつと行つてしまった先生を見送りながら、何故私なのかしら？という疑問は尽きないけれど、人より早く雄英に通つていた身だ。きつと地理や部屋の使い方を知つてる分こき使われたのだろうと無理やり納得する。

呆氣にとられたまま固まった教室内の空気。入口近くには飯田くんと、入試のときに正門前にいた緑髪の男の子と茶髪の女の子がまだ立っていて、男の子と女の子はまだ荷

物すら置いていない。

「ええと、とりあえず指示の通りにしますね。…その前にあなた方、席を確認して荷物を置きに行つたほうがいいのではないかしら？」

「!はっはい!」

「!あ、ぼっ僕も…!」

ばたばたと動き出した二人をそのままに、廊下から教室内に台車を運び入れてダンボールを開封していく。雄英の校章がデカデカと印刷されている袋を取り出せば、右下隅の方には漢字で名前、ローマ字でフリガナが刺繍されているらしく、良かったこれめちゃんとお名前を呼べる、と少しだけ安心する。この個性社会、個性の影響なのかかわらないけれど一見ただけでは正確な読み方がわからない名前が多々あるのだ。

パツとダンボール内を見た感じではどうやら出席番号順などではなくバラバラに入っているそれにどう配ろうかと悩んでいたら、透ちちゃんから声が上がった。

「えつと?!なんで藤乃ちゃんが手伝い頼まれるの?!近くにいたとか出席番号1番だからとかじゃなく名指しだったよね?!」

「え?ああ、それは…多分私が皆さんより一週間早く学校に来ていたからでしょうね」

「うえ?!なんで?!」

「あとで話すわね。…ええと、名前を呼ぶので運動着を取りに来ていただけますか?あ

と、教室後ろにあるのが個人ロッカーになりますので、貴重品等はそちらにお願いします。使い方は後で説明しますね。では：尾白さん？」

「！ああ、俺だ」

「常闇さん」

「：む、俺か」

「芦戸さん」

「はい！」

「飯田くん」

「……あら？飯田くん？」

名前を呼んでも反応がないので再度名前を呼べば、先程の状態のまま固まっている飯田くんがハツとしたように動き出す。

「：飯田くん？」

「：はっ！僕か！」

「はい、飯田くんの運動着」

「ああ、ありがとう。：聞きたいことはいろいろあるが、まずは先生の指示を全うしよう。手伝うよ」

「あら、ありがとう」

どうやら一つのダンボールに10着入っているようで、もう一つのダンボールを飯田くんに預けて残りを配ることにした。

「ええと、轟さん？」

「ああ、轟は俺だ」

「麗日さん」

「あつはーい！ウチが麗日ですー！」

「緑谷さん」

「はははははい！」

「切島くん」

「おう！サンキューな！」

「で、これが私ので……ええと最後が、爆豪さん？」

最後の一人の名前を呼んだら、目の前にぬつと手が出てきた。少しだけ驚いて固まっ
てしまったら、イライラしたように手を振って催促される。

「…チツ、早よ渡せコラ」

「ああ、ごめんなさい…これ、爆豪さんの運動着です」

「……フンツ」

運動着を受け取って席に戻っていく彼を見送りながら飯田くんの方を伺えば、どうや

らちようど最後の人に渡し終えたらしい。仕事が早いなあと感心しながら教室全体を見回して確認する。

「ええと、皆さん運動着は行き渡ってますね？では、ロッカーの使い方を説明するので教室後ろの方が見える位置にお願いします」

道中自分の席から私自身の貴重品をカバンから取り出して教室後ろにあるロッカーに向かう。思ったとおりロッカーには個人の名前が振られていて、廊下側から出席番号順のようだ。縦2列、横10列のロッカーが並ぶ中、自分の名前が書かれている廊下側から2列目上段のロッカー横に立つ。

「ええと、見えますか？雄英のロッカーはまず先に使用者登録をします。この取っ手の横にある液晶パネルがそうです。一度パネルをタッチすると画面が明るくなるので、画面右下の登録ボタンを押します。登録方法が指紋・その他と選べますが、防犯上の理由で一部を除いて指紋認証です」

「はいはい！一部を除いてってなーに？藤乃ちゃん」

「ええと、個性異形型の方には指紋自体が無い方もいらつしやるので、そういった事情がある方は他の方法でも良いそうです。透ちゃんの場合は……声帯認証かしら？失礼だけれど、指紋認証は通る？」

「あ、それは大丈夫！パネルに触っちゃえば指紋は認識されるよ！」

「そう、良かったわ。ええと、どこまで話したかしら？…あ、そうそう！指紋認証を選んで、そうすると読み取り画面になるので登録する。登録が完了すると…」

カチツと音が響いて、取っ手に手をかければロッカーの扉が開いた。

「うん、このような感じでロッカーが開きます。ちなみに締める時は自動ロックだから、扉を閉めるだけで大丈夫ですよ」

言いながら中にお財布を仕舞って扉を閉めれば、再度カチツという音がして液晶パネルにLockの文字が浮かぶ。

「…「おおー！」」

「流石雄英！ハイテクだな！」

「うっしや、さっさと登録しちまうかー！」

「開ける時は画面が暗い状態でもパネルを触れば開きますので、ええと、他にわからないことがあれば聞いてくださればお教えます。では、皆さんご登録お願いします！」

教室入り口の方にはけてロッカーの登録をお願いすれば、少しした後でそこかしこでカチツカチツと音が響いて、無事に登録が進んでいるようで内心ホツとする。人前で話したり説明したりするのは初めてではないけれど、まさか入学初日にこんな役割を振られるとは思っていなかったし、先に学校に通っていたとは言えたつたの一週間だ。私だつてまだまだ雄英についてはわからないことだらけなので、うまく説明できたか不安

だったけれど、この様子を見ればとりあえずは大丈夫そうだ。

「藤乃ちゃん！登録終わったよー！」

「はい。では、皆さん、入学の手引きに記載があつたと思うのですが、各々運動靴と先程お渡しした運動着を持って更衣室に移動しますので、荷物を持つたら廊下へお願いします」

そう声を掛けてから自分の荷物を持って廊下に出れば、あとに続くように続々と皆さん手に荷物を持って出てきた。

「全員いらつしやいますね？…では、ご案内します」

そう言つて、総勢19名を連れて歩き出した。

なにせ広い校内、なんとか迷わず目的地の更衣室に到着できた。女性の皆さんには先に女子更衣室の中で着替えて待つて頂いて、先に男性側から説明する為に「男性の皆さんはこちらです」と先導して歩く。更衣室自体は隣り合つていて男女とも作りは変わらないと聞いているが実際入るのは初めてなので少し緊張するけれど、着いた男性更衣

室の扉を念の為ノックして誰もいないことを確認してから開ければ、聞いた話通り女性側と然程大きな違いは無いようだ。

「簡単に」説明しますね。それぞれ並んでいるロッカーは何処を使っていたかでも大丈夫です。鍵はナンバー式で、ご自分で好きな数字を決めていただく形になります。万が一ロッカーの中にどなたかの忘れ物等が入っていた場合は、こちらの壁に設置してある落とし物シユートに入れてあげてください。一応ウォーターサーバーやシャワールームは使用自由ですが…今日使う機会はないかもしれないですね。着替え終わったら、扉を出て左手に真っ直ぐ行くとグラウンドへ出られますので、靴は忘れずに。…飯田くん、あとはお願いしてもいいかしら？」

「ああ、着替え終わったら先導は俺がしよう。扉を出て左手に真っ直ぐだな？」
「ええ、すぐわかると思うわ。じゃあお願いしますね」

後は飯田くんにまかせて、すぐ隣の女子更衣室にノックをすれば「はい！」と返事が聞こえてきたので中に入る。

「お待たせしてごめんなさい」

「藤乃ちゃんおかえりー！」

「けろっ…説明係、大変ね。あ、これ藤乃ちゃんの荷物よ」

「あはは…いきなりなこと驚いたけれどね。梅雨ちゃん、荷物ありがとうね。…さて、

着替えながらざつと説明しますね」

そして男性更衣室でもした説明を再度しながら、適当なロッカーに脱いだ制服を入れて運動着に着替えていく。

「そうそう、自己紹介がまだだったわね。天使藤乃と申します。男性に比べると女性は少ないけれど、3年間仲良くしてくださいと嬉しいわあ」

上はインナー下はジャージの姿で丁寧にお辞儀をして自己紹介をすれば、すでに着替え終わっている方々が自己紹介を返してくださいました。

「八百万百と申します……こちらこそ、よろしくお願いしますわ!」

豊かな黒髪を一つに纏めている背の高い彼女が八百万さん。

「はーい!あたし芦戸三奈!みんなよろしくね!」

ピンクの肌というとても目立つ容姿をしている明るい女の子が芦戸さん。

「ウチ、麗日お茶子っていういいいます!こちらこそ、仲良くしてな!」

関西訛りの例の茶髪の女の子が麗日さん。

「耳郎響香だよ。よろしく!」

変わった耳たぶ持つ、なんだかクールでカッコイイ雰囲気なのが耳郎さん。

「はーい!葉隠透でーっす!見ての通り透明人間だよ!見えないけど!」

元気に挨拶するのがお馴染み透明少女、透ちゃん。

「けろっ…蛙吹梅雨よ。梅雨ちゃんと呼んで」

そしてクラスで一番小柄な女の子、私の雄英入学してからのお友達第一号な梅雨ちゃんだ。

梅雨ちゃん「梅雨ちゃんと呼んで」発言から、それならと女子全員が自分のことも好きに呼んで欲しいという話になったので、お言葉に甘えて私は全員をちゃん付けで呼ぶことにした。

前の学校ではほとんどがさん付けでの呼び方だったから、同年代の女の子をちゃん付けで呼ぶのはなんだかまだ少しむず痒い気がしたけれど、みんな良い子で仲良くできそうな嬉しさのほうが勝った。全員が着替え終わったのを確認して、更衣室を出る。

入学早々運動場で何をやらされるのかと疑問や不安を抱きながら、少しでも薄暗い廊下、日光が降り注ぐ外への出口に向かって歩を進めた。

05 個性把握テスト

「個性把握テストオ?!」

各々準備が終わってグラウンドに集合した私達。皆が集まったのを確認した相澤先生から告げられたのは「これから個性把握テストを行う」という一言だった。

「ええ?!入学式は?!ガイダンスは?!」

お茶子ちゃんが困惑したように言うその言葉に、相澤先生はまるで何を言っているんだというような顔で答える。

「ヒーローになるならそんな悠長な行事、出る時間ないよ」

覇気のない声でさらに続く。

「雄英は、自由な校風、が売り文句。そしてそれは、先生側、もまた然り。…お前たちも中学の頃からやってるだろう?個性使用禁止の体力テスト」

そうして端末で見せられたのは、ボール投げ・立ち幅跳び・50m走・持久走・握力・反復横跳び・上体起こし・長座体前屈の8種目だった。

「…が、国は未だ画一的な記録を取って平均を作り続けている。合理的じゃない。まあ文部科学省の怠慢だな」

なんて合理主義な先生だろうかと驚く。確かに初めて顔合わせをしたときから片鱗はあったけれど、ここまで合理的だとは…無駄が嫌いな方だろうか。確かに個性を解禁してしまえばもう平均なんてあつてないようなものだものね、と一人納得する。

「実技試験成績1位の天使^{アマツカ}」

「！はい」

「案内ご苦労だったな。…で、中学の時のボール投げの記録、何mだった？」

「ええと、42mです」

「じゃあこれ、個性使って全力で投げてみる」

「わ、わかりました！」

私の個性は物を投げるというのにあまり使わないのだけれど…。いきなりの指示で戸惑うも、まずは翼を出してからと上着のチャックに手をかけてその場で脱ぐ。

「おおー?!」

「きゃー藤乃ちゃんセクシー！背中ガラ空きー！」

なんだか興奮するように声をあげた小さい男の子と透ちゃんに苦笑いを返しながら、上着を片手に先生からボールを受け取ってサークルまで歩き出す。

「藤乃ちゃん、良ければ上着預かるわよ」

「あら、梅雨ちゃんありがとう。お願いね」

梅雨ちゃんの提案を有り難く受けて上着を渡してサークルの中央に立つ。

そしていつものように翼を出した。

「うわあ…白い羽!」

「藤乃ちゃんの羽ってやつぱり綺麗!」

「天使の個性って翼だったのか!」

「わあ…綺麗やねえ!」

同級生たちの声を背に受けつつ、翼にぐつと力を込めてボールを構える。

「円から出なきや何しても良い。思いつきりな」

「はいっ」

一呼吸置いた後、翼で風を起こすのと同時に腕を振り下ろしてボールを投げた。

「つはああッ!」

翼からの強風でグラウンドが埃立つも、空を見ればちゃんと風を押されてボールが流れていく。翼で風を起こすだけだから、最初に後押しはできるけど持続力は然程無いので徐々に高度が落ち、そしてポトリとボールが落ちた。

「はい、これが天使の記録な」

見せられた端末には602m。個性無しで投げたときのおよそ1.4倍。個性を使う

ところも伸びるのかと素直に驚く。

「まずは自分の最大値を知る。それがヒーローの素地を形成する合理的手段だ」

「うおー！すげー！」

「602mってマジかよ……？」

「何これー！面白そうー！」

「個性思いつきり使えんだー！流石ヒーロー科！」

皆が興奮したように口々に言う言葉に、ふいに相澤先生が「面白そう、か……」と呟いた。

梅雨ちゃんから上着を受け取って皆の方に近寄れば、先生が続けて言う。

「ヒーローになる3年間、そんな腹づもりで過ごす気にいるのかい？」

その言葉に浮足立っていた空気がまたもや困惑に変わる。

「……よし、8種目トータル成績最下位のは、見込み無し、と判断し、除籍処分としよう」

まるで楽しいおもちゃを見つけたかのように口元に弧を描いて先生が言った途端、まさかの発言にいたる所から「ええ?!」「そんな?!」などの悲鳴が聞こえた。

「生徒の如何は俺達の自由………ようこそ、これが雄英高校ヒーロー科だ！」

手厚い歓迎を受けて思わず苦笑いが零れた。【チヨ教室】の2年の先輩に聞いたけれ

ど、現在2年のヒーロー科は1クラスしかないらしい。つまり、これは脅しても何でもなくそういうことなんだろう。

「最下位除籍って…入学初日ですよ?!いや…初日じゃなくても理不尽過ぎるっ!」

「自然災害・大事故、そして身勝手な敵達…いつ何処から来るかわからない厄災、日本は理不尽に塗れている。そういうピンチを覆していくのがヒーロー。放課後マックで談笑したかったのならお生憎。これから3年間、雄英は君たちに苦難を与え続ける。…更に向こうへ《Plus Ultra》さ!」

そして挑発するように人差し指をクイクイと揺らす。

「全力で乗り越えてこい!」

その一言で、皆の闘志に火が着いたように空気が変わった。

流石日本最高峰のヒーロー科…苦難を超えてPlus^更ultra^向、か。その言葉を胸に刻むように心の中で反芻する。

「さてデモンストレーションは終わり。ここからが本番だ!」

その言葉を合図に、雄英入学初日の苦難が始まった。

《ピッ……反復横跳び 天使藤乃 記録 56点》

競技を終えて記録ロボットが私の成績を読み上げた。

自分のデータはもちろんわかるけれど、他の方のデータは目立つようなものしか知らない。自分が現在どのような順位にいるか全くわからないのが少し不安だけれど、でも個性を全開に使ってのテストだからさほど悪い成績ではないだろうと冷静に自己分析する。…なんて、他の人の個性がどのようなものか全くわからないからただの空元気でしかないけれど。

人力ではなくロボットが記録を測ってくれるので空いているところから順々に回つていき、気づけば残りは50m走の1種目のみ。今終わった反復横跳びや握力、上体起こしなど、私の個性とは相性が悪い種目を除けば成績は悪い方ではないはず。立ち幅跳びでは、お茶子ちゃんのボール投げに続いて∞の記録も出したし、あまりにもあんなりな成績を取ってチヨ先生に怒られるなんてこともないだろうと安心していれば、难道かボール投げのブースが騒がしい気がして少し近寄ってみた。

「先生ッ……まだ、動けませんッ!!」

凄まじい形相と脂汗、そして抱えるように右手を押さえる緑谷くんの姿に、いったい何があったのだろうかと思っていたら、漏れ聞く話を聞く限り、彼の個性です

「ごい記録を出したけれど、個性の反動で怪我をしてしまったらしい。」

怪我と聞いて思わず先生に近寄った。

「あの、相澤先生」

「どうした天使」

「あの、競技が終わってからでいいので、彼の怪我を治しても…?」

「……競技が終わったらな」

「!はいっ!」

先生からの許可も取れたので、まずは自分の競技を終わらそうと急いで50m走のブースに走った。

「全員競技は終わったな?じゃあパパッと結果発表。トータルは単純に、各種目の評点を合計した数だ。口頭で説明するのは時間の無駄なんで一括開示する」
そう言って手元の端末から順位表が投影された。

1位 八百万百

2位 轟焦凍

3位 爆豪勝己

4位 天使藤乃

自分の名前が4位にあつてほつと息をつく。自分の名前のすぐ上に目を滑らせてから、当の本人の背中をちらりと盗み見れば、むすりとした顔で画面を睨みつけていた。

そして最下位の名前は：緑谷出久くん。その彼を見ると、やはり除籍の言葉を気にしているのか暗い表情で俯いていて顔は見えない。

「ちなみに除籍は嘘な」

ふいに言った相澤先生の言葉に呆気にとられた。

「君らの個性を最大限引き出す、合理的虚偽、つてやつさ」

人の悪そうな笑顔でそう話す相澤先生。たちまち最下位の緑谷くんや他のひとからもちらほらと「ええええ?!」という悲鳴が聞こえた。

「あんなの嘘に決まつてるじゃない：ちよつと考えればわかりますわ」

緑谷くんたちの様子に百ちやんがそう零すけれど、先輩の話を聞いていた身としてはとても嘘とは思えない。余計な混乱を招くだけだから口にはしないが、きつと合理的虚偽になつたのだろうと察した。

「これにて終わりだ。教室にカリキュラムなどの書類があるから、戻ったら目を通して
おけ。…あ、天使」

「!はい?」

「この後呼び出した」

「わかりました」

きつと「[チヨ教室]」のことだろうと返事を返せば、戻ろうとした相澤先生の背中に
「待ってください!」と飯田くんの声がかかった。

「…どうした?」

「カリキュラム等については書類を確認すればいいとのことでした。ですが、
天使くんのことはどういうことでしょうか?彼女の一週間前から学校に来ているとい
う発言や、同じ新入生であるのに校内について詳しくかったり…正直腑に落ちない点がた
くさんあります」

「なんだ天使…話してなかったのか」

「ええと、言つて良いものがわからなくて…」

そういえば後で話すと言ったきりそのままだった。後で先生に確認しようとしてい
たのをすっかりと忘れていて、呆れたような視線を投げかける先生に苦笑いを返す。背
を向けたままだった先生が再び私達の方へ向いてひとつため息をついた。

「天使のことを説明する前に……緑谷」

「!はっはい!」

「ちよつとこつち来い」

「ははははい!」

オドオドびくびくとまるで何か悪い子としたのかと言いたげな顔で相澤先生の近くに寄る緑谷くん。他の皆も何故いきなり緑谷くんが呼ばれたのかわからず不思議そうにこの成り行きを見守っていた。

「ええと……な、なんででしょうか? なにかしましたか? ?あ! やっぱり除籍だとか? !」
「違う。…天使」

「はい。……ああ、そういうことですね」

「早くしろ」

「わかりました」

先生の言わんとする事、皆に見せたいものや意図がわかったので、緑谷くんに近づく。

「あ、まつかさん?」

「そういえば自己紹介がまだだったわね。天使藤乃です。よろしくね、緑谷くん」

「!ははははい!よ、よろしくお願いします!!」

「それじゃあちよつと手を見せていただけける?」

「手……？こつちですか？」

「ああ、違うの、ごめんなさい。怪我している方よ」

不思議そうな顔をしながら緑谷くんが手を差し出したので、怪我に触らないようにその手を握って具合を見る。

「ひえ?!」

「…うん、これなら大丈夫そうね」

怪我の具合を見てこれなら私でも治せそうだと確認できたら、上着を脱いで本日何度目かの翼を出した。いきなり目の前に白い翼が出てきた緑谷くんはなんだかとても驚いていたけれど、気にせず彼の掌を下から支えるように持ち上げ、空いてる片方の手を怪我の上に翳す。

何をするのかわからないなりに私が何をしようとしているのか想像がついたのだろう。先程までは驚いたり慌てふためいていた緑谷くんが、真剣な表情で重なっている自分の手と私の手を見ていた。

程なく光が集まって緑谷くんの手を覆う。

「す……あたたかい……!」

数秒後、もういいかなと光を収めて手をどければ、そこには傷なんて無かったかのよう綺麗になった緑谷くんの手。

「!!治ってる……!!すごい!あんなに痛かったのに!!」

「「「「おとおお!!」」」」

怪我をしていた右手を翳して凄く凄いと連呼する緑谷くんと、つられたように歓声を上げるクラスメートをそのままに、まるで光の粒子が溶けるように翼を消して上着を着込む。

「どう?もう痛くない?」

「うん!!凄いや!天使さんの個性って治癒もできるんだね!さっきまで痛かったのにもう何ともない!翼も綺麗だしなにより飛行能力もあるしこれでもしかしなくても凄いいんじゃ?まだ体力テストで能力を見ただけだしそう言えば入試1位だったって相澤先生が言ってたっけなら敵ポイントとレスキューポイントが高かったってことだよねそれならなんらかの攻撃手段もあるということだ」

「あの、緑谷くん?」

「緑谷、そこまでにしろ」

「はっ!すすすすいません!!」

いきなり虚空を見つめて手を口に当てながらブツブツと呟く緑谷くんにとストップをかけて皆の方へ向き直る。と、ここで相澤先生から説明が始まった。

「見てもらった通り、天使の個性は治癒もできる。で、お前ら治癒に使える個性が他の個

性に比べて極端に少ないって知ってるな？希少だと言ってもいい。雄英では毎年治癒系の個性持ちが入ると、リカバリーガールの下、特別教室、で勉強するんだ。昔はただの弟子育成だったんだが、今じゃ通称「チヨ教室」なんて名前がついてるな。で、天使はそこに在籍してて入学1週間前から登校してリカバリーガールに師事してる。だからお前より少し校内やなんかについては詳しい」

「特別教室？」

「そんなの聞いたこともないぞ？」

ざわざわと漏れ聞こえてくる声に答えるように先生が続ける。

「別に公にはしてないが昔からあるぞ。ただ、個性の希少性からして在籍者は少ないかな。確か今は……」

「3年の普通科が2名、2年のサポート科が1名、そして私の計4人です」

「ま、そういうことだ。いかに治癒系の個性が少ないかわかるだろ。学校側としても治癒系の個性は積極的に伸ばしたいって方針だな。まあ自分が在籍してる科の勉強と並行して勉強するんだ。在籍している本人たちは大変なわけだが……」

「あはは……」

まだ師事して一週間あまりだが、たしかに大変は大変だと思う。明言はせずとも苦笑いで察してくれたのか、幾人かから同情を含んだ視線を頂いた。

「ま、そんなわけで、別に鼻屑しているわけじゃないが事情が事情なんだな。飯田、これでいいか」

「はい！説明していただきありがとうございます！ごぎいます！」

「じゃ、そういうことで。今度こそ教室にもどれー」

そう言つて今度こそ去つていく相澤先生の背中を見送り、さて私も着替えなきやと歩き出そうとしたところで「あの！」と緑谷くんから声がかかった。

「?どうかした?緑谷くん?」

「怪我、治してくれてありがとう!それで、天使さんの個性なんだけど…Dr. ライトに似てる気がして…」

「あら、父を知ってるのね」

「ち、父い?!」

目をまんまるにして驚いた顔をしている緑谷くんに思わずくりと笑いが零れる。

「ふふ、そんな驚かなくても!」

「えっあつごごごめん!…でも親子なら納得がいくよ。じゃあその翼はやつぱり…」

「ええ。母のエル・レディからの遺伝なの。私の個性は父と母の複合個性《天使》」

「てんし……」

「ちよつと恥ずかしいけどね。でも父のような医療系ヒーローになりたいって思ってるから、この個性は気に入ってるの」

「うっうん！すごい個性だと思っよ！本当に！」

興奮したように目を輝かせる緑谷くんの顔が、なんだか好物を目の前にしたあーちゃんを思い出させて少しだけ可愛いなあとほっこりしていれば、いつの間にか他のクラスメートも近くに来ていた。

「藤乃ちゃんー！いやもうフジノンだ！超絶美少女天使フジノンの個性って、やっぱり凄いよねー！」

「なんだよ超絶美少女天使って。でも、確かにすごい個性だよね」

「けろっ…透ちゃんは知ってたの？藤乃ちゃんの個性」

「うん！入試の会場一緒だった！それに、私も怪我治してもらったし、抱っこしてもらって空も一緒に翔んだし！」

「へえーやっぱ空飛べるのっていいよなあ！あ、天使さん！俺上鳴電気！よろしくな！治癒系の個性持ちってすげーな！」

「オイラは峰田実！なあなあもう一回羽だしてくんないか?!上着脱いで!!」

「俺は瀬呂範太！天使って入試のときに目立ってた子だよな？聖女の制服着てたし！」

「天使くん！鼻屑を疑うような言動をしてすまない！だが先生に説明して頂いて納得し

たよ！ヒーロー科と特別教室の両立、ぜひ頑張ってくれたまえ！僕にできる事があれば微力ながら協力しよう！」

矢継ぎ早に話しかけられてなんと返したものと困りながらも、せっかくのクラスメートとの交流。一人一人の話を聞きながらゆっくりと更衣室に戻る私達だった。

06 初めての戦闘訓練

怒涛の個性把握テストがあつた日の翌日。

この日からスケジュール通りのカリキュラムに沿って、午前は必修科目の普通教科、お昼を挟んで午後からはヒーロー学の勉強が始まる。

なんと雄英ではプロヒーローがヒーロー科目だけでなく普通教科も教えてくれるので最初は驚いた。

現在は4限目の英語で、担当教諭はなんとあのボイスヒーロー『プレゼント・マイク』。「はい、じゃあこの例文のうち間違っているのは？」

あのハイテンションな話し方が特徴的なプレゼント・マイク先生の授業風景は驚くほど普通で、逆にたまに出る例の話し方に少しびっくりするほどだった。

「エヴィバデイヘンズアップ!!盛り上がれエ!!」

その号令に教室内で幾人かの手が上がり、当てられた人が回答していく。

「正解だツ!!…じゃあ次は教書10ページの英文を読んでもらうぞー。…じゃあ、エンジェル天使^{アマツカ}ア!ステンドアップ!!」

「(エンジェル天使…?) はい」

その場で立ち上がって指定ページを開くと、息を吸い込んで読み上げてく。

「I wander, dlonely as a cloud That flo
ats on high, over vales and hills,
When all at once I saw a crowd, A host
of golden daffodils,
Beside the lake, beneath the trees Flu
ttering and dancing in the breeze.

(まるで谷や丘の上を浮かぶ雲のように 僕は彷徨っていた。そうしたら突然、金色に輝く水仙の花を見つけたんだ。それは湖の側で、木々の下で、そよ風に吹かれながら揺れたり、踊ったりしていた。)」

「グレイトだぜエンジェル天使ア！」

と、ここでチャイムが鳴る。

「おっともうこんな時間か。じゃあ今日の授業はここまで。問題集の2〜7ページまでを宿題にしとくからやっておくように。……それじゃツスイーユーネクスタイツ！」

先生が教室を出たことよって一気に教室内の空気が緩くなる。

「んあー！ やっと午前の授業終わったー！」

私の二つ前の席に三奈ちゃんが大きく伸びをして言う。

さて入試の時を除いてこの学校で初めてのお昼だ。先輩の情報で雄英の学食はプロヒーロー《ランチラツシュ》が腕をふるってしていると聞いていたからせっつかくなので週の半分は学食、もう半分はお弁当にしようと思った。今日は学食のつもりで来たので、早速個人ロッカーからお財布を取り出してさあ大食堂に向かおうとした所で後ろから声がかかる。

「フジノニー！ご飯一緒に行こう！」

「私もご一緒してもいいかしら？けろっ」

「透ちゃん、梅雨ちゃん！ええ、喜んで！」

そうして3人連れ立ってやって来た大食堂は、流石にお昼時、既に混んでいて多くの人で賑わっていた。注文カウンターの列に並びながら何を食べようか話し合っている、前の人ランチラツシュの「白米に落ち着くよね！最終的に！」の言葉に定食にしたようで、定食も美味しそうだと少しだけ心惹かれる。

「はいいらつしやい。何にする？」

「？あの、メニューは無いですか？」

「無いよ！なんでも作るよ！」

「ええと、では焼き魚を中心に和定食をお願いします」

「焼き魚だと今日は鯖か鯖かな！どっちにする？」

「では鯖で」

「了解！じゃあ横の機械で会計をして、その隣が受け取り口だよ！」

「ありがとうございます」

言われたとおり受付カウンターのすぐ右隣に自動精算機のような機械が置いてありそこで会計を済ませる。そしてさらに右にずれて待つこと5分少々、「焼き魚の和定食、あがりー！」と声が響いたのでお盆ごと料理を受け取り、さて空いてる席はと見渡せば運良くテーブルが一つ空いていたので、先に座って席を取ることにした。

「おまたせー！」

テーブル一番端に腰掛けた私のすぐ隣に梅雨ちゃん、お向かいには透ちゃんがそれぞれお盆を置いて席に着く。

「フジノンはお魚定食？ 渋いねー！」

「白米がいいなあと思って定食にしたの。透ちゃんはミートスパ？ 梅雨ちゃんは？」

「私は親子丼にしたわ」

「どちらも美味しそうねえ」

冷めないうちにと3人で手を合わせていただきますを合唱する。

お箸を取ってまずはお味噌汁から。お椀に口をつければ、お出汁と合わせ味噌の味がふんわりと広がって文句なしに美味しい。

「うん！流石ランチラッシユ！めっちゃ美味しいー！」

「ええ、本当ねえ」

「プロって凄いのね。親子丼はよく作るけれど、ここまでの味が出せるようになるかしら。」

「そうね、和食ってやっぱり難しいわよねえ」

「おおー！フジノンも梅雨ちゃんもお料理するんだね！」

「私はまだ小さい弟と妹がいるし、両親が共働きだから必然的によくするわ」

「私も弟がいるからそういう意味では梅雨ちゃんと似たような形だけれど、そうじゃなくともお料理は好きよ。趣味みたいなものかしらね」

お互いのことや今日の授業のことなどを話しながら食事を楽しんでいると、「おーいー！」と少し遠くから声がした。

「流石昼時、人がいっぱいだな！此処良いか？」

「あら切島くん。ええ、どうぞ」

「サンキュー！……おーい、此処空いてんぞー！」

「でかした切島！……はいはい、お邪魔しますよーっと！」

「俺もお邪魔しますー！」

そうしてそれぞれ開いてる席にお盆を置いたのは上鳴くんと瀬呂くんだった。

「はーい！いらっしやいいらっしやーい！」

「ええと、葉隠さんだよな？」

「うん！葉隠透だよ！」

「んで、天使さんはわかるとして、そっちの君は？」

「蛙吹梅雨よ。梅雨ちゃんと呼んで」

「おお！よろしくな！梅雨ちゃん！」

人が増えて更に賑やかになったテーブル。まだ入学二日目でお互いの名前があやふやなので、軽く自己紹介をしながら食事の続きを取る。ちなみに切島くんはステーキ定食、上鳴くんがハンバーガーセット、瀬呂くんが生姜焼き定食をそれぞれ頼んでいて、流石男子と言って良いのか私達が食べている量とは明らかに違うのに少し驚く。

「ずいぶん食べるのねえ」

「そうか？いつもこんくらいだぞ？なあ？」

「俺はわりと食細いほうだけだなー」

「まあ高校生男子ならこんなモンだろ？それになにより、この後はヒーロー基礎学だろ？きつと体動かすヤツだったって！」

「ご飯を頬張りながらそういう瀬呂くんの言葉に、そういえばカリキュラムでは午後はヒーロー基礎学の予定だったかしら、と脳内で思い出していけば、初のヒーロー科なら

ではの授業に皆ワクワクとした雰囲気です話し出す。

「どんなことやるとのかしら？」

「最初の授業だしねー！体作りでトレーニングとか？」

「まあ順当に行くとも最初は基礎訓練だよなー！」

「いや相澤先生の例もあるしな…意外とアレかもよ？」

「アレってなんだよ？」

「アレはアレだろ！」

何をするのか、誰が担当する授業なのかと話題は尽きないまま賑やかな食事の時間は過ぎていき、そしていよいよ待望の授業の時間になった。

「わあたあしいがアアアアア!!…普通にはドアから来たツ!!」

「オールマイトだ…！」

「すげえや…！本当に先生やってるんだな！」

「あれ、シルバエイジ銀時代のコスチュームね！」

「画風違いすぎて鳥肌が……!」

思わぬ人物の登場に一気に教室内が浮足立つ。そして教壇にゆつくりとあがったオールマイトが口を開いた。

「私の担当は、ヒーロー基礎学、!ヒーローの素地を作るため、様々な訓練を行う科目だ。単位数ももつとも多いぞ……早速だが、今日はコレツ!!」

そして掲げられたプレートには《BATTLE》の文字が。

「そう! 戦闘訓練!」

いきなりな授業内容に少し驚く。相澤先生といい、雄英の先生方というのは本当に、自由、なのね……と内心苦笑いを浮かべていれば、更にオールマイトが続ける。

「そしてそいつに伴ってエ……こちらツ!」

オールマイトが指さした窓側の壁から、ウィーンという機械音とともに壁が飛び出てきて、そこにはそれぞれ番号が振られているトランクがずらり。

「入学前に送ってもらった個性届と要望に沿って作られたコスチュームツ!!」

途端教室内に歓声が上がります。

なるほど、確かに入学前に被服控除という事でコスチュームの要望や身体情報、個性届を提出したことを思い出した。翼人としてすぐ身近にいる母や、一目で医療系ヒーローだとわかる父を参考に散々頭を悩ませて提出したものがどんな形になったのかと

でも気になるところ。

「さて、それぞれ着替えたらグラウンドβに集合だ！」

「「「はい！」「」」」

「じゃあ私は先に行ってるから、遅れて来るんじゃないぞッ！」

そう言っつて教室から去っていくオールマイトを尻目に、我先にと皆がトランクを取りに行く。パツと見た限りだと少し混雑していそうだったので、先にロッカーに貴重品を預けて自分のコスチュームを取りに行く。自分だけのヒーローコスチューム、そして初めての戦闘訓練！いろいろなワクワクで胸を高鳴らせながらしつかりとトランクを持って更衣室に移動し始めた。

「格好から入るってのも大切なことなんだぜ、少年少女！自覚するんだ……今日から自分は、ヒーローなんだとッ！」

ずらりと総勢20名がコスチュームに身を包んだ姿は圧巻の一言だった。ボディスーツや道着のようなものから、既に補助アイテムを依頼していたのか様々な装備品を

つけているコスチュームまで多種多様で、格好だけ見れば皆本物のヒーローとなんなら遜色ない出来。サポート会社というのは凄いお仕事をするのねえと一人感動する。

「いろんなコスチュームがいるのねえ…」

「ね！フジノンのはあれだね！白いね！」

「ふふ、医療に携わるものとしては白は欠かせないから」

「うーん！衣装も白だし羽も白いですますます天使サマー！ていうかもうなんかRPGのキャラクターにいそうな感じだよ！」

「そうかしら？」

ここで私のコスチュームの説明を軽く。透ちゃんの言う通り、すべてを白と銀で統一している私のコスチュームは上から、翼のために背中が開いたノースリーブハイネック、首元にはマイクつきの音を増幅する指向性スピーカー小型版（首輪型）、腕には二の腕まである白い指ぬきロング手袋に西洋の騎士がつけているような銀の籠手。下は白い短パンに普段から愛用しているガーターベルトでニーハイソックスを吊って、走りやすいようにローヒールのショートブーツ、膝にも銀の膝当てをつけている。そして腰にはふわりと広がる腰マント、さらには簡易の治療道具などを入れてあるヒップバッグだ。…ちなみに要望には出していないけれど、何故かマントには銀糸で十字架がワンポイント刺繍してある。

「なんかもう綺麗とセクシーとカッコイイが同居してる感じ！」

「ふふふ、ありがとう。そういう透ちゃんのは……何か特殊な生地なのかしら？こう、個性に合わせて透明になるような……？」

「ううん？違うよ？」

「え」

「私のはグローブと靴だけ！」

「……ええと、寒くないの？風邪引かないかしら……？」

「今は大丈夫かな！」

グローブと靴だけ？つまりほとんど裸？羞恥心が……慎みを……でも本人の個性的には最善……？でもでも女の子がみだりに肌を晒すのは……けれど透ちゃんの個性は透明化だから見えないし……。

ものすごく葛藤があつたけれど、「体調崩さないように、ね」と一言添えるのが限界だった。

「いいじゃないか、皆。かつこいいぜ……さあ始めようか！有精卵共ツ！」

オールマイトのその言葉に、授業の説明が始まる。

初の戦闘訓練の内容はなんとヒーロー組2名と敵組2名に別れての模擬戦闘。

流れとしては、敵組が今回の舞台であるビル型のアジトでヒーロー組を待ち構えてい

て、ヒーロー側はハリボテの核兵器を確保するか適役を確保する。敵側は制限時間15分以内に核兵器を守るかヒーロー側を捕まえることが勝敗条件となる。ちなみに確保は白い確保テープを用いて行われ、さらに建物の見取り図の配布、そして敵側はペアと連絡がとれるイヤホン型の小型無線を使用できる。

組み合わせは厳正なるくじ引きで対戦相手もまた然り。：説明の最中飯田くんが「組分けは適当なんですか?!」と声を上げたけれど、緑谷くんの「プロは他事務所の人と急造チームアップする場合もあるから!」という一言で納得して矛を収めた。

「さて組み合わせを発表するよ!」

そしてくじにより分けられたペアが発表される。

Aチーム 緑谷・麗日ペア

Bチーム 障子・轟ペア

Cチーム 八百万・峰田ペア

Dチーム 爆豪・飯田ペア

Eチーム 芦戸・天使ペア

Fチーム 口田・砂藤ペア

Gチーム 耳郎・上鳴ペア

Hチーム 常闇・蛙吹ペア

I チーム 尾白・葉隠ペア

J チーム 切島・瀬呂ペア

「おおー藤乃つちとペアだ！藤乃つち！よろしくね！」

「ええ、三奈ちゃん。こちらこそよろしくね」

ペア相手である三奈ちゃんと互いに挨拶していれば、どうやら最初の対戦相手が発表されたようだ。対戦カードは敵側がDチーム、ヒーロー側がAチーム。つまり、爆豪くん飯田くんのペアと緑谷くんとお茶子ちゃんのペアの対戦だった。

「確か二人は幼馴染だったはず……なら互いの手は知り尽くしてるのかしら？」

顎に手を当てててどういう試合運びになるか想像していると、オールマイトから移動の指示が出る。これから対戦する2組と別れて、私達はモニタールームへと向かうのだった。

「なんつー試合だよ……」

誰かの言葉が耳に響く。

モニタールームで観戦していた第一試合。終始ハラハラするような試合運びで、幼馴染染ということは何やら確執があるらしい二人は、純粹に勝利を狙った緑谷くんの機転とお茶子ちゃんのチームワークでヒーロー側の勝利という形で幕を閉じた、が敗者が無傷で勝者が双方行動不能という、訓練でなければあまり褒められたものでない終わりに、試合後の講評もどちらのチームにとつても散々なものだっただろう。唯一飯田くんは褒められていたけれど。

私の彼に対してのイメージは6歳のあの時で止まっているけれど、今日一日の様子を見て自信家なところやそれを裏付ける実力の高さ等は健在のようで、当時から多少あった物言いのキツさは輪をかけていたけれどそれでも強く逞しい男の子に成長したんだと思っていた。

……なのに、その男の子は今、勝敗が決まっただけからひたすらに俯いていて顔が見えない。けれど、硬く握りしめられた拳が彼が今抱える感情を物語っているようで、なんだか少し胸の奥が粟立つような感覚がした。と、そういうえば緑谷くんがまた個性の反動で怪我をしたのを思い出した。

「オールマイト先生」

「なんだい、天使少女？」

「あの、緑谷くんの治療をしても…?」

「うーん、君の能力などのことは聞いてるし、その気持ちはとても尊いものだと思うがね、君もこの後訓練があるだろう?今は許可できないかな!大丈夫!リカバリーガールが対応してくれるさ!」

「そうですか…すみません、わかりました」

一応申し出たものの、オールマイトの言い分に納得して引き下がる。授業が終わった様子を見に行けばいいかと頭の隅で考えて、続いて始まるヒーロー側Bチーム障子・轟ペアと敵側Iチーム尾白・葉隠ペアがフィールドに向かうのを何となしに眺めながら、そういうえば何でさつきは胸が粟立つような感覚を感じたんだろうと内心一人首をひねった。

何故だろう、私にとって彼は特別な男の子だ。これは間違いない。なにせ自分の恩人であるし、ヒーローになりたいと初めて思わせてくれた存在だ。強くて、優しく、ぶっきらぼうで口が悪くて、性格も決して穏やかとは言えないけれど、でも、それでも彼はすごい人なのだ、彼は彼のまますごい人になったのだと私の直感が告げている。現に体力テストでも私より上に名前があつたり、ちらりと盗み見たテスト風景も、爆破という一見すると派手だがしっかりコントロールしないと下手したら大惨事になり得る強い個性を駆使して記録を出していた。

何故なんだろう……と疑問が浮かびつつも、オールマイトの「さあて、配置についたかな？では第2回戦、始めるよ！」の声に思考の海から帰ってきて、今は授業！とモニターに集中した。

第2回戦は驚くほどの速さで決着が着いた。まさかビル一つを凍らせるなんてその勝利方法やあまりに強い個性に驚き、さて自分ならどうするかというのを脳内シミュレーションを繰り返す。

ふと、ちらりと横目でまた彼の様子を伺えば、今度は目を見開いて食い入るようにモニターを見つめながらざりりと音がしそうなほど唇をかみしめていた。なんだか表情自体が愕然としているようにも見えて、さらに胸の奥がざわざわとする。

第3回戦、ヒーロー側Hチーム常闇・蛙吹ペアと敵側Cチーム峰田・八百万ペアの試合は、カメラの死角になってよく見えなかったけれど、Cチーム二人が隙きを突かれる形でヒーロー側の勝利で終わる。試合を見ながら私は、さっきの胸の奥の感覚が苛

立ちや怒りに似たもの……いやそのものだということに気づいた。

第4回戦、ヒーロー側Fチーム口田・砂藤ペアと敵側Jチーム瀬呂・切島ペアの試合は、せつかく貼った瀬呂くんの罠が切島くんのうっかりで無駄になってしまったりとアクシデントがあったものの砂藤くんを確保。しかし砂藤くんは困で気づかぬ間に忍び寄ってた口田くんが核兵器を確保してヒーロー側の勝利。途中、罠で確保など男らしくないから再戦を！と詰め寄る切島くんの様子に少し苦笑しながら、頭の中では何故苛立つのかと考えていた。相変わらず彼の様子は顔をうつむかせていたり歯を食いしばっていたりとあまり様子は変わっていない。

どうしてこんな感情が…と答えが出ないまま迎えた第5試合。ヒーロー側がGチーム上鳴・耳郎ペアと敵側Eチーム私・芦戸ペアの対戦が始まる。

試合を行うビルの前に着き、先生からインカム型無線機を渡され耳に装着しながら三奈ちゃんとビル内部に入る。そしてビル内の核を設置してある部屋につくなり作戦会議を始めた。

「藤乃っち頑張ろうね！入試1位とペアなんてラッキー！」

「ふふふ、成績に恥じない成果を出せるように頑張るわ。それで、三奈ちゃんの個性について教えてもらえる？」

「オツケー！私の個性は、酸、！粘度も溶解度も調節できるよ！ただ、使いすぎると服

も溶けちゃうかなー。あ、あと調節はできるんだけど、それって身体の中での話だから外に出しちゃったらもう調節はできない！」

「ありがとう。ちなみに、溶解度って最高だとどれくらいなのかしら？例えば、この部屋の床などは溶かせる？」

「うーん、厚さによって時間かかっちゃうと思うけど、たぶんイける！」

三奈ちゃんの個性の話を聞いて、改めて部屋を見回す。今いる部屋は明るいけれど、通路は結構狭かった上に暗かったので私には不利な場所だ。だから、どうせならこの部屋で迎え撃ったほうが良い。確かちらりと聞いた話と体力テストでの成績を考えれば、上鳴くんは電気系の能力、響香ちゃんはたぶん耳たぶから考えて音による索敵はできると考えたほうが良いだろう。響香ちゃんが私みたいに音によるなんらかの攻撃を手段を持つてると仮定して、それでもよつかいなのは多分上鳴くんの能力。同程度なのか、どのくらいの範囲なのか、電気と言っても使いようはいろいろある。もしかしたら電波まで対象範囲だったなら無線もつ使えなくなるかもしれないから私と三奈ちゃんを分断して、という手も出来れば取りたくない。

「上鳴くんの能力がわからないのが不安ねえ…」

「え？上鳴？なんで？」

「電気系というのは聞いたことがあるんだけど、どの程度なのか全然わからないから、最

悪二人共放電されてという可能性も捨てきれなくて…」

「あーなるほど？」

「とりあえず罠を設置して迎え撃つしか無いわね。作戦があるんだけど聞いてくれる？」

「おー！さすが藤乃つち！聞かせて！」

そして作戦を手早く説明して制限時間ギリギリまで工作の準備をする。ギリギリ間に合ったところで、オールマイトの声がスピーカーから聞こえてきた。

《さあ時間だ！ではこれより第5回戦を開始するよ！ヒーローチーム、スタート！》

いよいよだ。さて、うまく罠にかかって貰えるといいんだけど。緊張と少しの不安で高鳴る心臓を深呼吸で抑えつつ、ヒーローチームがこの部屋に到着するのを待つ。

《これはまた……！敵チームWIN!!》

「やったー！勝ったー！」

「よかった……三奈ちゃん、お疲れ様」

「藤乃つちすごーい！お疲れ様!!」

「あちやー負けちゃったか」

「あの個性本当にズルいでしょ…」

呆然としたように呟く宙吊りにされ拘束された上鳴くんと、その横で同じく拘束されながら座り込む響香ちゃん。二人を拘束していた光を解いて、宙吊りにされていた上鳴くんがふわりと落ちていくのを翔んで彼の両脇に手を差し入れて持ち上げゆつくりと床に下ろす。

はしゃいでいる三奈ちゃんの隣に着地して、皆を伴ってモニタールームに戻る。

「いやはやお見事だEチーム！では講評の前に今回の作戦を皆にご説明願えるかな？」

「わかりました」

まず、Gチームお二人の能力が未知数でしたので不安はありましたが、今回のヒーロー側の勝利条件が核の確保か敵の捕縛だったので、他の皆さんもとってたように核部屋での籠城戦を選択しました。周囲には自分の個性の光球を浮かせて、核も万が一を考えて光を紐状にし宙吊りに固定。そして、入口付近の範囲の床を、タイルの目に沿って三奈ちゃんに脆くしてもらって、ついでに保険として天井にも何箇所か脆くしてもらったところを用意して、そうこうしているうちにまず上鳴くんが突貫してきたので浮かせていた光を輪に形成して足を拘束。そのまま体制を崩して地面に倒れた所をさらに身

体の何箇所かを同じように拘束。直感でなんとなくこのままだと危ないと思ったので、上鳴くんが寝転がっている地面がちようど脆くしたところだったのでさらに矢を放って床を抜けさせ、落ちる間際の上鳴くんを確保テープと光で再度宙吊りで固定、確保。あとは響香ちゃんだけ、ということ、三奈ちゃんだけに響香ちゃんを追って頂きました。これで、三奈ちゃんが響香ちゃんを確保できればよし、私達の打倒ではなく核の確保優先に動いていても、部屋には私がいきましたし、万が一三奈ちゃんが確保されてしまった場合でも、一対一なら勝算はあったので。結果は三奈ちゃんが響香ちゃんを確保して終了、という形ですね。

「…以上になります」

「なるほど、保険をかけての罠の配置や立ち回り、実にお見事！」

「いえとんでもない！穴だらけの作戦で、正直運が良かったのもありますわあ」

「確かに、改善の余地はまだまだある作戦だったけれども、運も実力の内、というだろうか？ ナイスファイトだ！ちなみに、もし芦戸少女がやられていた場合はどうしてたんだい？」

「ええと、三奈ちゃんに響香ちゃんを追っていたときに、インカムのスイッチは入れっぱなしにしてもらっていたんです。それで、戦いながらこんなことしてきた！というのを報告していただいて、三奈ちゃんに戦ってもらいながら響香ちゃんの情報収集をして

もらってたので、集めた情報を整理すると私の個性で対応可能な、と」

「なるほど、戦いながら味方に情報収集させる！これは敵でもヒーローでも通じるやり方だね！」

「恐れ入ります」

「あーそれで芦戸がやたら喋りながら攻撃してきたのか…なるほど、上鳴のジャミングで最初には使えなかった作戦だけど、上鳴をまつさきに確保したからこそその作戦だね」

「悪かったなー真っ先に捕まっちゃって。俺なんか何もできずに拘束、そのまま確保だぜ？地面に寝転びながらも電撃放とうとしたらそれさえも読んでたように床崩されてさらに宙吊りだし…爆豪も轟もやばかったけど、天使も十分やべえわ」

講評を聞き終えて、いえーい！とハイテンションで片掌を上げてくる三奈ちゃんに、再度お疲れ様と言いながらハイタッチする。

講評も終わったし私達の組で試合は最後だから、これにて初めてのヒーロー基礎学は終了だ。

ちらりと様子を伺った彼は、やはり表情暗く俯いていた。試合中は試合に集中していた為考えないようにしていたけれど、何故こんなにも彼の様子に苛立つのか再び考え始めたところでオールマイトから終了の挨拶が。

「お疲れさん！緑谷少年以外は大きな怪我もなし、皆真剣に取り組んだ！初めての訓練にしちや皆上出来だったぜ！さて私は、緑谷少年に講評を聞かせねば！着替えて教室にお戻りッ！」

そう言い放つて、まるで急ぐように走って行ってしまった。

あまりの速さに一瞬ほかんと呆けてしまうも、私も慌てて後を追う。

「あれ？フジノンどこいくのー？」

「緑谷くんの怪我が気になるから保健室に！先に戻っててー！」

そうしてオールマイトを追うように駆け出した。

07 訓練のその後で

試合が控えていたから止められてしまったが、やはり気になってつい着替えもせずに来てしまった保健室。

中に入る前に走って息が上がってしまったのを扉の前で落ち着けていると、中から扉を隔ててくぐもったようなチヨ先生の声でした。

「入学間もないっていうのにもう2度目だよ?!なんで止めてやらなかったオールマイト！」

チヨ先生が怒ってる……今回の緑谷くんの怪我は、昨日の体力テストの比じゃないくらいのものであった。本当に、強力な個性とはいえどうしてあんなにも酷い反動が来るのだろうか。しかも訓練明け、あれだけ派手な試合運びならきつと身体自体もヘトヘトだろう。

おそらくチヨ先生の個性では今は治せない。チヨ先生の個性【治癒】は、本人の体力を使って自己治癒力を活性化させるから、今の緑谷くんにはその体力が無いという状態と共に、相応の体力がないと治せないような大怪我なのだと更に続けて話す先生の言葉に察した。

じゃあ私の個性ならもしかして!と保健室の扉に手をかけようとしたその時のことだった。

「…まったく、力を渡した愛弟子だからって甘やかすんじゃないよ!」

、力を渡した愛弟子、? いったいどういう……?

突然のセリフにフリーズしていると、いつものような覇気のないオールマイトの声が聞こえた。

「返す言葉もありません。彼の気持ちを組んでやりたいと訓練を中断するのを躊躇しました……して、あまりワンフォーオールのことを話すのはどうか……!」

まるで懇願するように言うオールマイト。

ワンフォーオール? いったいなんの話をしているのかさっぱりわからなくて、その動揺が手に現れたのか指先がドアのセンサーに触れ、無情にもシュインツと音を立てて保健室のドアが開いてしまった。

「!!」

突然の開閉音にチョ先生と……そしてオールマイトの衣装を纏った金髪の痩せこけた男性が此方に振り向いた。

「あんた、どうして……」

「天使くん……?!」

「……わかりました。今回のことは緑谷少年を含めて話す場を設けるから、また改めて連絡させて欲しい。……さ、天使少女、とりあえず着替えてきなさい」

オールマイトのその言葉に、せめて火傷の傷だけでもと言い募り、チヨ先生の許可を得た上で緑谷くんの左腕の包帯を外した。黒く焦げ生々しい火傷があるそこを治した後に今度こそ保健室を後にする。

後日話す場を設けるということだったが、今はいろんな情報が頭の中を駆け巡っていて正直混乱していた。けれど、オールマイトがああ言った以上は待つ他ないと無理やり気持ちを切り替えて着替えに戻る。

と、更衣室へ向かう廊下、おそらく着替え終わりだろう爆豪くんとぼつたりと出くわしてしまった。切り替えたと言っても先ほどの混乱が尾を引いているのが、思わずそのまま足を止めて彼を真正面から見据える。

眉間に皺を寄せる不機嫌そうな顔に暗さを滲ませる表情の爆豪くんが真っ直ぐ私を見据えていた。

「爆豪くん……」

「……………」

正直何と言ったらいいかわからないけれど、でも何故だか今口を開かなくちやいけない気がした。だつて授業中もずっと違和感を感じて考えていたから。それに、いい機会だどずっと気になっていたことを聞くことにする。

小さく深呼吸をした後に口を開いた。

「あの…………あのね！私のこと、覚えていらつしやいますか…？」

途端、ピクリと片眉が動く。

「む、昔…………貴方に助けてもらったのだけれど…………」

「……………」

「ええと…………ごめんなさい、もう10年も前の話だから、覚えてないですよね。すみませ
ん、変なこと言つて…………それじゃ、あの、また教室で…………」

何も反応がないことに、きつと覚えてないのだろうと思つて彼の横を通り過ぎ更衣室
に向かおうとすれば、背後から「おい」と声が聞こえた。

「え？」

振り返れば、肩越しに彼が此方を見ていた。

「…………うまく飛べるようになったのかよ」

「!!っうん！あの頃よりずっと、うまく翔べるようになったのよ……」

「そうかよ」

そう言つて視線を外し再び歩き出した彼。

その背中を見て、何故胸の奥が粟立つたのか、どうして授業中そんな顔をするんだろうとイライラしたのか。その答えが喉からせり上がってきて、彼の背中に向けて声を張り上げた。

「あのね!!」

爆豪くんがピタリと足を止める。

「私爆豪くんに助けられたあの日!初めてヒーローになりたいつて、こんな風に人を助けられる、こんな風に手を差し伸べられるヒーローになりたいつて思つて、此処まで来たの。……あの日、泣いてる私に泣いてんじやねーつて手を差し出してくれた人は、ちよつと負けたからつて暗い顔するような人じやなかつた!」

「なつー!」

驚いたように此方を振り向く爆豪くと再び目があつて、怒りが浮かぶ鋭い眼光で身体が竦みそうになるけれど、気にしないようにして更に続ける。

「自分への酷い講評を気にして顔を俯かせるような人でも無かつたし、自分よりすごい個性を見て愕然とするような人でも無かつた!あの日!私が憧れたヒーローは!そんな顔しないわ!!」

「デメエ何を…ツ!!」

いきなりの私の言葉にカバンを落として怒りの形相で一步踏み出した彼に更に言い募る。

「なんでそんな顔してるの…! 爆豪勝己くんは、強くて、優しく、自信家で、今は、凄いい、今は、勝てないって思っても、あつという間にそんな壁乗り越えちゃうような人でしょう? たった一度、たった一日過ごしただけの私でも、そう思ったのに!」

「……………っ」

「二度プライド折られたくらいで……………! これ以上私が憧れたヒーローと同じ顔してるのに、そんな顔しないでっ!!」

言いながら、興奮したのか目の端に滲んできた涙をそのままに、あの日の記憶がぼんやりと脳裏を駆け巡る。

《ほら、おくつてやるから立てよ!》

《でも、足が…っ》

《なんだ立てないのか? チツしよーがねえな。…………ほら》

《え…?》

《はこんでやるつつつてんだよ! いいから早くのれよ!》

《う、うん…!》

《おもくない?》

《こっこれくらいよゆうだし!》

《ほんとう?…えへへ、すごいね!ちからもちだね!》

《なんだつておれさまはしよーらい、オールマイトみたいな……いや、オールマイトをこえるヒーローになるんだからな!まいごの一人くらい、はこんでやるわ!》

《おおー!オールマイトより?すごいヒーローになるの?》

《あつたりまえだろ!》

《…でも、このまえパパがいつてたよ…?すごいヒーローになるにはかべがたくさんあるんだつて》

《かべえ?そんなんこわせばいいだけだろ》

《でもこわれないようなかべだつたら?とつてもかたくて、たかかつたら?》

《そんなもん——》

「…:ぎやーぎやー何言うかと思えば、クソうぎつてえなオイ」

「!ごつごめんなさい…:つい…:」

「ホントウゼエわ。10年も前にたつた一日一緒にいたくらいで俺の何がわかんだよ…

！」

「確かにっ何も知らないのかもかもしれない……。でも！あの時オールマイトを超えるヒーローになるって言った爆豪くんは、成長してもそのままなんだろうなって……。勝手に私が信じてるだけだから！」

此方を睨みつけながらぎゅつと拳を握る爆豪くんに、私も胸の前で拳を握りしめる。

「《凄いヒーローになるためには壁がたくさんあるんだって》」

一瞬呆けた後ハツとしたような顔になる爆豪くん。

「《壁？そんなん壊せばいいだけだろ》《でも、壊れないような壁だったら？とつても硬くて、高かったら？》《そんなもん——》」

「《——壊れるまでブン殴りやあいいだらうが》」

二人の声が重なった。

覚えてた……！私の存在だけでなくあの日の会話まで覚えててくれた嬉しさになんだか胸がいっぱいになる。

爆豪くんは一度目を閉じてゆっくりと息を吐くと、再び目を開いてまた真っ直ぐに私を見た。そこにはさっきまでの怒りや暗さはもう映っていない。

「……チツ……お前、まだそんなこと覚えてんのか」

「爆豪くんだって……覚えててくれたじゃない」

「うん、早く着替えなくちゃ間に合わないものね。引き止めてごめんなさい、勝くん！
じゃあまたあとでね！」

言うなり踵を返して更衣室に小走りで向かう。その胸中は、安堵と嬉しさが緋い交ぜ
になって、向かう道中自然と頬が上がるほどだった。

やっぱり勝くんは、昔のまま、強くて素敵なヒーローだったなあ、なんて思いながら、
更衣室への道を急ぐ私だった。

「かつちゃん！」

夕日が照らす中、やっと見つけたその背中目掛けて声を張り上げた。

いつもの金髪が夕焼けで少し濃く色づくその背中の主は、僕の声でピタリと足を止め

少しだけ顔を横に向けていつもの敵ツイン顔負けな凶悪な顔で「ああ、？」と一言。

ここで、あれいつもの？と少しだけ疑問に思ったものの、長年の条件反射で思わず小さな悲鳴と共に足を引いて顔をうつむかせてしまう。

けれど、けれど……！言わなきゃ……！オールマイトとの約束で他言無用だけれど、彼だけには……！と意を決して口を開こうとした時、なんとかつちゃんの方から先に話した。

「なんだクソデク。負けた俺を笑いに来たのか？」

「ちつ違うよかつちゃん……その、僕の個性のことで……」

「ああ、？個性？ああ、俺を騙してたヤツか？」

「それも違うつ！かつちゃん……！ぼ、僕の個性は……人から授かったものなんだ……！」

「は？」

怪訝そうな顔でかつちゃんが言う。でも、これだけは君に伝えなきゃと思って走ってきたんだ。緊張と走ったことによつて乾く口内で少し話しにくいのを振りはらいつつ続ける。

「誰かからは絶対言えない……！言わないっ。……でも、コミックみたいな話だけで、本当で、おまけに、まだろくに扱えもしなくて……全然モノにできていない状態の借り物で……だから……っ」

「だから、なんだよ? どうでもいいわそんなこともうよ!」

「え?」

「テメエの個性が、もらいモン、で、借り物、? だからなんだよツ! 俺はツ! 今日お前に負けたんだよツ!」

「かつちゃん……」

激昂したように吠えるかつちゃんだけど、ここでもまた違和感を覚えた。なんとというか、怒ってはいるけれど、その怒りはいつもの怒りに近いのだ。なんだろう、妙に冷静さがみえるというか……。僕の戸惑う気持ちに声に現れていたのかももう一度「かつちゃん……?」と名前を呼べば、その声が少しだけ震えていた。そして、ぎりりと歯を食いしばってから絞り出すように話します。

「ツツ!!……氷のヤツ見て、かなわねえんじや、つて思っちゃまったツ。ポニーテールのやつ言うことに、納得しちまったツ……おまけに、アイツも……っ」

最後の方は声小さくて聞き取れなかったけれど、流石に聞き返すような雰囲気ではないため押し黙った。

「だけどなツ!!」

「!!」

「それが何だ?! 自分殺してエぐらい……、今は、なんて思っちゃまったけどツ俺は!! それ

全部越えていくッ！」

「え……？」

かっちゃん、認めた？今までにない行動に思わず動揺する。そんな僕にかまわず、さらにかっちゃんが吠えた。

「壁がある？上等だコラアツ。壁なんつーのは《壊れるまでブン殴りやあいんだろっ
が》ッ!!」

壁？今かっちゃんは壁と言ったのか？あのかっちゃんが、僕はともかく他の人を壁だと認めてる、のか……？まるで自分の知らない幼馴染を見るようで、声が出ずただただ目を見開く僕。

「いいかクソデクよく聞けエ!!俺はなッいずれオールマイトも超えるヒーローになるんだよッ！お前の個性がどうかともう関係ねえ！俺は全部を超えてトツプヒーローになるッ!!……だから、」

「!？」

「次は無えぞ、このクソナードがッ」

「え？」

「お前が勝つのは後にも先にもこれつきりだ！覚えとけクソデクッ！」

言いたいことを言ったらいつものようにふんつと鼻を鳴らしてそのまま歩き出す

かつちゃん。

今まで敗北を認めるなんてことをしてきたことがない男が、敗北を、そしてであろうことか、壁、を認めた…。あまりの出来事にそのまま立っていたら、怪我をしていない方の肩を誰かがポーンと叩く。

「ふむ、君からの話ではとても自尊心が高い男で、とても敗北を認めるような性格では無いと聞いていたんだが……」

「!!オールマイト!……そうだと、思ってたんですが……」

「おそらくだが、試合が終わってからの間何かあったんだらうね……」

「そう、なんででしょうか……?」

あのかつちゃんが誰かに何かを言われたくらいであんな風になるとは思えないと思うんだけど……。

不思議な事もあるもんだと、僕とオールマイトはそのまま遠ざかっていくかつちゃんの背中を見つめ続けた。

08 委員長を決めよう

今日で入学3日目。初日、二日目となかなか濃い一日だったなと思いを馳せながら通学路を歩いていけば、前を歩く人混みの中に見覚えるある色合いの金髪がカバンを後ろ手に背負い歩いていた。

あ！と思った瞬間にはもう駆け出していて、その背に「勝くん！」と呼びかけてる。無言で立ち止まりちらりと肩越しにこちらを振り返る彼は、いつも通りというか、何処か不機嫌そうな顔だ。

「おはよう」

「……ん」

小さい声ながらもちゃんと挨拶を返してくれて思わず口角があがる。

「一緒に行くこう？」

「…勝手にしろ」

ぼそりと呟いて歩き出す勝くんの隣を歩く。

別に会話なんて無かったけれど、また会えて、またこうして一緒にいられるなんて夢みたいだと思いつながら、もうすぐ正門というところまで来て何か人集りが出来ているこ

とに気づいた。

「あれは……」

「チツ……朝っぱらからクソうぜえな」

どうやら人集りはマスコミの人たちのようで、正門をくぐる生徒を捕まえて何やらマイクを向けている。このままじゃ捕まっちゃうかしら……と不安が頭に過ぎつていけば、もう一度だけ舌打ちをした勝くんが何故か歩調を早めた。きつとサツと通り過ぎようとしているのかなと考えて、私もそれに伴うように足早に正門へ向かう。

「あ、雄英の生徒さんですね？オールマイトが教鞭をとっているということではちよつとお話を……あれ？貴方へドロの時の……」

「ツうぜえ！遅れんだろうがっ！」

「ひっ」

「！あ、君！ちよつとお話を……」

「(ヘドロ?) ……その、すみません始業に遅れますので……」

勝くんはマイクを向けていた女の人なんだか気になることを言っていた気がするけれど、それよりもまず向けられたマイクと取り囲むような記者さんに苦笑いを零して先を急ぐ。流石に勝くんみたいな対応はできないのでやんわり断って勝くんの後に続こうとすれば、「ちよつとだけでいいので！」と腕を掴まれた。

「!あの、すみません、離してください…」

「それで!オールマイトはいつたいたいどんな授業を?!」

「何処の科の生徒さんでしょうか?オールマイトの授業は受けられたことは?!」

「いえですから、すみません腕を離していただけると……!」

腕を捕まれ無理やり引き止められて詰め寄られるけれど、一向に離してくれないこの男の記者さんにどうしようかと困っていれば、突如ボンツという音が響く。

「遅れるつつつてんだろーが!腕離せや!」

どうやら勝くんが威嚇として個性を使ったみたいで、片手の掌から少し煙を立たせながら怖い顔で私の腕を掴んでいる男記者さんを睨む。その音と勝くんの鋭い眼光に驚いたのか腕を掴んでいた力が抜けのでするりと腕を引き抜いた。

「おら、行くぞ藤乃」

「えつと、うん」

勝くんのおかげでやっと正門を通り抜けられて、小走りでまた勝くんの隣に戻る。

「ちんたらして捕まってんじゃねーよポケッ!」

「ごめんなさい…まさか腕を掴まれるとは思っていなくて。助けてくれてありがとう、

勝くん」

「フンツ…」

鼻を鳴らしてそっぽを向いてしまった勝くに再度お礼を言いながら微笑む。改めて、口は悪くなったけど優しいのは変わってないんだなあと朝から胸の中がほっこりした。

「昨日の戦闘訓練お疲れー。VTRと成績見させてもらった」

いつもの覇気のない声で相澤先生が言う。

「爆豪」

「！」

「お前もうガキみてーな真似するな。能力あるんだから」

「…わかってる」

静かな声で勝くんが呟いた。

「で、緑谷は……まーた腕ぶっ壊して一件落着か。個性の制御、いつまでもできねーから仕方ないじゃ通させねえぞ」

ちらりと視線を向ければ、相澤先生の言葉に気まずげに俯く緑谷くんが見えた。

「俺は同じことを言うのは嫌いだ。それさえクリアすればやれることは多い。焦れよ、緑谷」

「……はいっ！」

その言葉に俯いていた顔を上げて、しっかりと先生の目を見つめながら返事をする。そういえば、様子を見る限り今日の朝にでもチヨ先生に治してもらったのか、昨日つけていたギプスは見られなくて怪我は治ったみたいだと安心した。

「よし、ホームルームの本題だ。急で悪いが、今日は君らに——」

また何か突拍子もない事をさせられるのかと一瞬にして教室内の空気が緊張する。

「——学級委員長を決めてもらおう」

「「「学校っぱいのキター!!」」」」

そしてその空気が一瞬にして消え去った。途端、あちこちで手が上がり始める。

「委員長やりたいです！それ俺！」

「俺もー！」

「ウチもやりたいっす」

「リーダーやるやる！」

あちこちで同じような声上がり、逆に声や手を上げていないのは私を含めても極々少数だった。

確かに集団を率いるという点ではヒーロー科での学級委員長という役職は、トップヒーローとしての素地を鍛えるに当たりうってつけなのかもしれないけれど、私は特に興味が湧かなかつた。そもそも特別教室での勉強に時間を取られる分、何かあつたときは必然的にそちらを優先せねばならなくなることがどうしても出てくる。それに、昨日の特別教室で伝えられた件で今は尚更時間が惜しい。

と、ここで後ろの席から大きな声が聞こえる。

「静粛にしたまえッ！」

各々好き勝手話していた声がピタリと止まった。

「他を牽引する責任重大な仕事だぞ！ やりたい者がやれるものではないだろう。周囲からの信頼あつてこそ務まる政務！ 民主主義に則り、真のリーダーを皆で決めるといふのなら、これは投票で決めるべき議案！」

言いながらもピンと立つ腕に、「腕そびえ立つてるじゃねーか！」とツツコミが入る。

そして、自分もやりたいのに何故発案したのか、だとか、入学して日が浅いのに信頼もなにもないのでは、皆自分に投票するだろうといった様々な意見が寄せられる中、さらに飯田くんが言い募る。

「だから……その投票で複数票をとつたものこそがふさわしいと思わないか?!……どうでしょうか、先生！」

「時間内に決めればなんでもいいよ」

先生の許可も得つつ、投票という形で学級委員長を決めることになった。

かくして始まった学級委員長選挙、各々メモ帳やノートの切れ端で投票者の名前を書き、それを教卓の上に置いていく。発案者ということで飯田くんが開票しその結果を黒板に名前とともに書き込んでいくと、なんと驚くべき結果になった。

3票 緑谷出久

2票 八百万

2票 爆豪勝己

2票 天使藤乃

1票 尾白猿夫

1票 耳郎響香・・・

——と続々と名前が続く。

「ぼっ僕が3票ー?!」

「なんでデクに?!誰が…ッ」

「まあおめーに入れるよわかるけどなあー。つーか誰だよ爆豪に入れたやつ」

「勝くんの言葉に瀬呂くんがそう茶化すように言う。ギッと睨みつけて何か言い返そうとしていた勝くんとその時丁度目があつたのでにこにここと笑っていれば、ハツとした

ように黒板を見た後にまた私を見て、立ち上がっていた席にむつつりとした顔でどかりと腰掛け窓の方を向いてしまった。私の様子できつと誰が自分に入れたかわかったのだろう。その仕草にまったくすりと少しだけ笑って前を向く。

「あれ?というか、私が2票…?」

どうせ自分には入らないだろうと思つてあまりよく見てなかったが、黒板に名前がないのが飯田くん、お茶子ちゃん、透ちゃん、梅雨ちゃん、轟くんのみ。ええと、名前が無いメンバーを顧みれば、誰が誰に入れたかは予測しやすくて、おそらくそうだろうとすぐ前の席の梅雨ちゃんや遠くの席の透ちゃんに視線を向ければ、私が見ていることに気づいた梅雨ちゃんにはいつもの「けろっ」という声とともに微笑まれ、透ちゃんは服の様子から手を振ってくれたのがわかつて嬉しさやら就任する気の無い申し訳なさやらで曖昧に微笑み返す。

「ぜ、ゼロ票…っ。わかつてはいたが、流石は聖職というところか…っ」

「他に入れたのね…」

「お前もやりたがつてたのに…何がしたいんだ飯田?」

自分もやりたがつていたのに違う方に票をいれたことが発覚してまあたまやツッコミを入れられる飯田くん。

「ん、票は出揃ったんだな。2票が3名いるが、どうする?」

相澤先生の言葉にハツとして、その場で「あの！」と手を上げた。

「どうした天使」

「ええと、私は辞退を……」

「ええー?! フジノンやらないの? セっかく入れたのにー!」

「ごめんね透ちゃん。私は特別教室の関係でどうしてもそちらに時間がとられるから、学級委員はちよつと……」

「けろつ…それなら仕方ないわね」

「梅雨ちゃんも、ごめんね」

「いいのよ。私は入りたい人に入れてただけなもの」

勿体無いなーとちらほら聞こえる中はずきりと辞退を申し出れば、「じゃあ天使は辞退で、残りは爆豪と八百万か」と黒板の私の名前を消しながら話す相澤先生。

「じゃあもうめんどくさいから、ジャンケンで決めろお前ら」

との一言で、副委員長の座を賭けた勝くと百ちゃんの壮絶な一騎打ちが……と思われたところで、何故か勝くんが声を上げた。

「チツ……いい。俺も辞退で」

「「「ええ?!」」」

「なんでだよ爆豪! お前やりたがってたじゃねーか! 熱でもあんのか?!」

「うっせえな！無えよ……、副、じゃ意味無エからいいつつってんだよ!!」

なるほど、トップを目指す勝くんらしい言い分だと納得していると、後ろに座っていた緑谷くんが何故か信じられないものを見たような顔で勝くんのことを見ていた。

「(かかかかかかっちゃん、辞退…?!そそそそんなっ昨日の様子といいなんの前触れだ?!)もしかや天変地異が…?!)」

「じゃあ委員長は緑谷、副委員長が八百万で。はい決定なー。じゃ、この後の授業頑張れよー」

そう言つて教室を出ていく相澤先生。

こうして、我がI—Aの学級委員は無事に決まったのだった。

午前の授業が終わり、さあお昼だとお財布を取りに席を立とうとしたところで、ふと思ひ立ったのでそろりと目的の人物の机の前に立つ。

「ねえ、お昼ご飯一緒に食べない? ご馳走するから」

「…はあ?」

「今朝のお礼、ね?」

「…ケツ…はよしろ」

「ふふ…ええ、一緒に行きましようか」

「「「「ええええええええ?!」」」」」

どうやら一緒に食べてくれるようで、勝くに笑顔で頷けば何故か教室内から驚愕の声。何かあったのかしら? と周りを見渡せば、誰も彼もがこちらを驚いたように見えた。

「?! どうかした?」

「いやどうかしたって…え? 天使って爆豪と仲いいの?! 昨日まで話してるとこ見たことなかったけど?!」

「そうだよフジノン! なんで爆豪くん?!」

「なんでってなんだコラア透明女!」

「知らなかったわ…藤乃ちゃんて爆豪ちゃんともお友達だったの?」

「ちゃん付けで呼んでんじゃねーぞ蛙女ア!」

「もう、ちゃん付けくらいいいじゃない、勝くん」

「『『勝くん?!』』』」

「梅雨ちゃん正解よ。勝くんとは雄英に入学する前からの友達なの」

「……チツ。さつさとしろ、藤乃」

「はいはい、ちよつと待って。…じゃあ今日先にお昼行くわね」

梅雨ちゃんの質問にさらりと答え、教室後方のロッカーからお財布を取り出して勝くと連れ立って教室を出た。

「……ふふふ」

「何笑ってんだ、ああ?」

「さっきの皆の顔を思い出して。とても驚いていたわね。そんなに意外だったのかしら?」

「フンツドーでもいいわ」

鼻を鳴らしながら歩く勝くに気付かれないようにまた小さく笑って、隣同士で食堂への道をゆつくりと歩いていく私達だった。

その頃教室では――

「なにあれ。なにあれなにあれ?!なんであんな仲良さそうなの?!だってあの爆豪でしょ?!」

「つーかさりげに名前呼び捨てにしてなかったか?」

「俺も聞いた。確かに藤乃って呼んでた!」

「ひえー藤乃つちすごい!流石入試1位!もう爆豪とも仲いいんだー!」

「いや入試は関係ないんじゃない?」

「おう、緑谷なんか知ってるか?幼馴染なんだろう?」

「しししし知らない!僕もかっちゃんに他校の女友達がいるなんて全然知らなくて…と
いうか、女子の名前を呼び捨て…!」

「他校?じゃあ中学同じだったとかじゃないのか?」

「いや、天使くんは聖グレイス女学院出身だ。それは無いだろう」

「じゃあ学校が近かったからとか!天使くらい美人なら他校でも見に行くだろう!しかも聖女だし!」

「緑谷、出身中学は?」

「ぼ、僕もかつちゃんも折寺中出身だよ」

「聞いたことねえな。何処だ？」

「ええと、静岡らへんなんだけど…」

「ほーん。少なくとも天使は聖女で都内か東京近郊住みだろ？んで、爆豪は緑谷と一緒に地元がこつから近いから……接点なくね？」

「……(謎だ……)……」

「ハッこれはもしやアオハルの予感……?!今度フジノン問いたださなきゃ!」

「ケロケロっそれは楽しそうね」

「ウチもあの爆豪とって興味ある」

「そ、そうですね。後学のためにぜひお話をお伺いしたいですわ……!」

「あ、私も私も!たぶんあの学級委員長長の投票も爆豪くんに入れてみたいだし、ぜひ聞きたい!」

「え、藤乃っち爆豪に入れたんだー!よし!近いうちに日にち決めて皆で女子会ね!」

「……おー!……」

「……女子会……」

「辞めとけ峰田。お前は女子じゃあない」

「今日は何を食べようかしら…」

「何でも良いがウジャウジャとモブ共がいてクソうぜえ」

「それはお昼時だもの、他の科の生徒もいるでしょう？勝くん食堂は初めてなの？」

「誰が好き好んでモブ共が集まる場所に行くってんだよ…」

心底人混みが忌々しいという風には、勝くんは苦笑いを零す。そうこうしてる間に私達の番が来たので注文をお願いする。

「勝くんは何を食べるか決めたの？」

「激辛麻婆豆腐チャーハンセット大盛り」

「ええと、私はどうしようかしら……ではクリームシチューをパンでお願いします」

「了解！じゃあ精算機でお会計して隣で待つてね！」

言われるがまま精算機に向かって二人分の会計を済ませたようとした時、何故か「おい」という言葉とともに肩を引かれて、え？とびつくりしている間にささつと自分の分の会計を済ませてしまった勝くん。

「え？あの、今朝のお礼つて……」

「うっせえ、てめえの分くらいてめえで払うわっ」

「そう……？」

お礼にご馳走するということでお昼についてきてくれたと思っただけど、違うのかしら？

隣の受け取り口にまた一人さっさと移動してしまう勝くんの背を不思議そうに見ながら自分の会計を済ませて私も隣に向かう。

程なく待つていれば、美味しそうな香りとともに料理がやって来てお盆を受け取る。受け取るなりはずんずんと歩いていく勝くんの後ろをついていき、彼がお盆を置いたテーブルは端も端の席。きつとあまり騒がしくないところへ来たかったのだろう。勝くんのお向かいには既に人が座っていたため、隣にお盆を置いて席に着く。

「いただきます」

「……………す」

手を合わせて食前の挨拶をしてからスプーンを手を持ち一掬い。一口含めば丁寧に作られたのがわかるホワイトソースの味が口いっぱいに広がってとても美味しい。白い海に浮かぶ人参やジャガイモやブロッコリーなどの色鮮やかな具が目にも楽しく美味しいクリームシチューは、母の作るそれに負けないくらいの出来だ。お盆の上のミニバスケットに入っている二つのバターロールのうち一つを手にとり、一口ちぎって口に運べばこちらもバターの香りがふんわりと広がってまた美味しい。付け合わせのサラダも野菜がシャキシャキで瑞々しくて、掛かっているドレッシングもサツパリしたもので食べやすい。

「ニヤニヤしながら食いやがって…キメエわ」

「…あらいやだ、顔に出てた？一番好きなお料理だからつい、ね。…勝くんはどう？美味しい？」

「……まあ」

「ふふふ、勝くんだったっていつもの眉間のシワが無いわねえ。流石ランチラッシュよね。辛いものお好きなの？」

「ああ?! 悪いかコラー！」

「もうつすぐ怒鳴る。悪いなんて一言も言っていないわあ」

「チツ……黙って食えやボケ」

「ふふ、本当に昔と比べてお口が悪くなったのねえ」

食べながら思わず呟けば、また一つ舌打ちが返ってきた。

「…6歳と15歳比べてんじやねーよ」

「それもそうね、ごめんさい。……あら、15歳？ええと、たしか初めて会ったあの日って初夏よね？勝くん春生まれなの？」

問いかければ、特に返事は無く食事が続いている勝くんには、否定の言葉は無かったからたぶん春生まれで合っているということだろうと一人勝手に納得して話を続ける。

「まあ、じゃあもうすぐお誕生日？いつかしら？」

「…んでテメエに教えなきゃなんねえんだよ」

「あら、ダメ？」

じ…と勝くんの横顔を見ながら聞けば、レンゲを持って思い切り眉を顰めながらチャーハンをモグモグと咀嚼してた勝くんがごくんと嚙下し、口を聞くことなくさらにもう一口頬張った。

これは答える気がないわね…と内心ため息を付いてシチューを掬おうとした時、隣でボソリと「4月20日」と声が。

「え？」

「テメエ聞いたからには何か寄越せやコラ」

「……ふふ、まるで恐喝ね。何が欲しいの？ オールマイトグッズとか？」

「……メシの最中にどっかのクソナード思い出さすようなこと言うなや……！」

レンゲを持ったまま地を這うような声で此方を睨みつける勝くんに「失礼しました」と返事をしながら笑えば、また舌打ちが返ってくる。勝くんのプレゼントに関しては何か考えておこうと頭の隅に入れておく。

「……お前、なんで俺に入れた」

「……？ あ、もしかして今朝の投票のこと？」

「……………」

「なんでと言われても、そもそも私自身は勉強のことがあるからなる気はなかったもの。

……じゃあ誰に投票しようかしらと考えた時に勝くんが浮かんだだけよ？」

「はあ？」

「はあ？」と言われてもそれが全てなのだけれど、一体どんな答えを期待していたのかしら？

「昨日も言ったと思うけれど、勝くんは私の憧れのヒーローですからね。リーダーという肩書も似合いそうだったから……という理由じゃあ不満？」

「………そうかよ」

「どうやらこれでよかったですね。返事を返すなりそれきり黙々と真つ赤な麻婆豆腐

とチャーハンを食べている勝くんを少し眺めてから、私も自分の食事を再開した。

そして、勝くんはとつくに食べ終えていて私ももう少して食べ終わろうかというところで突然けたたましい音でベルが鳴る。

「え?」

ジリリリとなつた警報ベルの後に校内アナウンスで《セキュリティ3が突破されました。生徒の皆さんは速やかに屋外に避難してください》と繰り返し流れるそれに、セキュリティ3が何かわからないけれど、上級生らしき人たちの会話を漏れ聞くにどうやら校舎内に不法侵入者があつたらしい。食べかけの食事をそのままに、皆が我先にと食堂の入り口に詰めかけていくのが見えた。

「まあ不法侵入者……!」

「チツ……だりいな。雄英^コのセキュリティはどうなつてんだクソが!」

二つある食堂の入り口はどちらも人が集まって遠目から見ても寿司詰め状態だ。恐

らく廊下も似たような状況だろう。あそこに詰めかければ押し合いへし合いで怪我を負いそうだと判断したので、周りを見渡し窓か何かで外に出られそうな場所を探すと、運良く二階の窓が開いてるのを見つけた。

「勝くん、ちよつと外の様子を見てくるわね」

ひと声かけてながらブレザーを脱いで椅子の背もたれにかけ窓の方へ走り出す。後ろから「おいッ!」というドスの効いた声が聞こえたような気がするけれど、気にせず走りながら背に翼を出して窓目掛け飛び上がった。そのまま窓の下枠に一旦着地して、再度足にぐつと力を込めて空へ翔び上がる。

今はコスチュームではなく制服のスカートだけけど、万が一の為に下には短パンを着用しているからなんの問題もなく翔び続ければ、侵入者はここから見えるかしらと少し上の方から学校の敷地内を見渡せば、程近いある一箇所で見覚えのある先生二人が何故か今朝のマスコミの方々の方に囲まれていて、なるほど不法侵入者は記者の方たちだったかと来た道に戻った。

「!藤乃ツ!!」

出てきた窓から再び食堂内に戻って地につければ、勝くんが怖い顔をしながら私のブレザーを片手に持ってずんずんと近づいてきた。

「勝くん、ただいま。あら、ブレザーありがとうね」

「ただいまでもありがたいがとうでもねえよこのアホ女!! テメエ下スカートなの忘れてんのか?! 無闇に飛んでんじゃねえ! 慎みつつーのがねーのかクソボケが! 痴女かあゝ?!」

「まあ痴女とは酷いわあ。ちゃんと下に履いてますよ。いつ翔んでも良いようにちゃんとそこは抜かりなく」

「そういうことじゃねえッ!」

「あのね勝くん、不法侵入者、マスコミの方たちだつたわ」

「ああゝ?!…今朝のか」

「ええ多分」

勝くんから受け取ったブレザーに腕を通しながら、どうやって雄英のセキュリティを抜けたのかしら? と頭に疑問が浮かぶものの、侵入者が敵でも何でも無いただの一般人だとわかった。けれど、もうゆっくり食事を再開するなんて気分でもなくなってしまうので、とりあえずここから出ようかと入り口方面に足を向ける。

「クソが…これじゃあいつ出れんのかわかりやあしねえ」

「確かにねえ…」

廊下から食堂入口までたくさんの人が押しかけていて到底出られそうにない。食堂と廊下の間にある壁の材質はガラスで、パニック中の人達が我先にと前へ前へ詰め掛けているのがここからでもよく見える。

ふと、ガラス越しに廊下の様子を観察していれば、人の群れとは逆方向を向いている赤い髪と黄色い髪が見えて、よくよく目を凝らせばそれはクラスメートの切島くんと上鳴くんだった。人々のパニックの声やらなにやらで二人の声は聞こえないけれど、口の動きと身振り手振りでもうやら「落ち着いて！」と訴えかけているらしい。が、パニック中の生徒たちには届いていなくて、ここはお手伝いすべきか、とさらに近づくように入り口方面に歩を進める。

「あ？何する気だテメエ」

「彼処、見えるかしら？クラスメートの切島くんと上鳴くんが落ち着くように呼びかけてるんだけど届いていないらしくて、少しお手伝いしてくるわね」

「はあ？彼処突っ込むんか」

「いいえ、ちよつと傍に寄るだけよ」

近くまでくれば先程は聞こえなかった怒声やら悲鳴やらが喧騒の中に混じって聞こえる。これは本格的に早くなるとかしないと怪我人が出かねない、と気合を入れて大きく息を吸い込んだ。

「♪Ama——zig grace, how sweet——the sound——」

落ち着いてください、という気持ちを込めて個性でリラックス効果を乗せて唄を歌

う。

「♪That saved a wreck like me——」

まずはもつとも声が聞こえる手前側から何事だという感じで人々が振り返ってきた。

「♪I once was lost but now I'm fo——
nd」

更に個性を込めて歌えば、徐々に少しずつではあるが此方を振り返る人たちが増えてくる。落ち着いた人達が増えるということは、それだけパニックが収まってきているということだ。もう少しかしらと最後の一小節に更に効果に乗せた。

「♪Was blind but now I see——」

そして歌い終わると同時に何故かエンジン音が響く、その直後「グフツ」という悲鳴が。何事かと廊下奥の方を見れば、何故か飯田くんがメガネを外した状態で非常口の上にとっくりなポーズで立っていた。

「皆さん、大丈夫ー夫ツ!!ただのマスコミです!!」

飯田くんの大きな声が響いて、今度はそちらの方に視線が集中する。

「何もパニックになることはありません!大丈夫ー夫ツ!!ここは雄英!最高峰の人間に相応しい行動を取りましょう!!」

そして完全にパニックは収まった。だが私はまだこれで終わりではない。飯田くん

の後に続くように私も声を張り上げた。

「皆さーん！今のパニックで怪我をしている方はいらっしやいませんか？こちら保健委員なので手当できますよー！周りの方にも怪我してらっしやる方はいませんか？どうか見てあげてください！」

正確に言うともまだクラス内で委員会決めはやっていないけれど、特別教室のことを一から説明してもキリがないし、この場合は嘘も方便だろう。

少しのどよめきの後にちらほらと「足を捻った」「擦り傷が…」という方たちが数人出てきた。足を捻った方はお友達の方に肩を支えられてこちらにやってくる様子が見えたので、慌てて一番近くにあつた椅子を移動させてそこに座るように促す。

「どちらの足ですか？」

「み、右…」

「右足…少し触りますね」

「！いつつ！」

「…うん、ただの捻挫のようですね」

言つて、いつものように光で治療していく。

「と、これでどうでしょうか？」

「すつげえ…君治癒の個性持ちなの?!やべえ足もう痛くねえ！」

「それは良かったです。…他に怪我をしている方はいらっしゃいませんか？」

「あの、あたし膝擦りむいちゃって…」

「ごめんなさい、私も…」

「俺もお願いします！」

「はい、順番に診ますからこちらにお願いします！足を怪我して歩けない方は、お近くの方！肩を貸して差し上げてください！」

幾人かの治療をしていけば、幸いどれもこれも擦り傷や捻挫などの軽傷のみで特に大幅に体力を使う間もなく治療が終わる。が、一人あたりが軽くても数が続けば流石に少し疲れるもので、最後の方の治療をした後に小さく息を吐いた。

「ふう……」

「わっ治ってる！ありがとう！」

「いいえ、他に怪我はないですか？」

「うん！大丈夫みたい！本当にありがとう！」

「いえ、治ったなら良かったです」

さて今のが最後の人のはずだけれど、もういないかなと周りを見回していれば、一人の男子生徒が「あの…」と近づいてきた。

「はい？」

そちらを見れば、何故か先程最初に捻挫の治療をした方が、他にも怪我があったのかしらと首を傾げていると、何故か顔を赤くして興奮気味に捲し立てた。

「さつきは手当ありがとう！ねえ君名前は？！何年何組？よければ俺とー」

「言わせねーよ！それよりさつきは俺も手当ありがとう！ただあつという間に怪我を治してしまった君にどうやら胸を撃ち抜かれたようなんだ。だからこつちも診て——」

「おいおい、ちよつと待てよ。胸を撃ち抜かれたのはお前だけじゃねーから！なあ君さつき個性使つてパニックを沈静化してた子だろ？すげえ綺麗な声だったな！今度一緒に——」

「ああ！君入試の時に一緒にの演習場にいた天使みたいな子だろ？！俺あの時君に助けられて普通科に今いるんだけど——」

「天使！ああそうだねまさに天使だ！綺麗な歌声にその容姿や個性も相まってまるで天上の女神のような——」

「天使か女神かはつきりしろや!!つか俺が一番最初に話しかけて——」

「うっせえモブが出しやばんじゃねえ！」

「誰がモブだお前だつてモブじゃねえか！」

「んだとコラ！」

「えっあの、すみません喧嘩は……というかあの、え？怪我人はもういらつしやらないん

ですか？」

いろいろな人からいろんなことを捲し立てられてて正直全く聞き取れなかったけれど、なんだか今にも殴り合いの喧嘩が始まりそうな雰囲気で一人オロオロとしていると、気づけば勝くんが側まで来ていて「おら、藤乃行くぞ」と促した。

「え？でも、あれ放つて置いていいのかしら…？」

「いいんだよそこら辺のモブなんざほっとけや」

「そう？まあそろそろ行かないと時間になっちゃうし…うん、もう怪我人はいないみたいなので、行きましようか」

そつとその場を離れて勝くんと連れ立って食堂を出る。先程の警報で起こったパニックが嘘のように落ち着いていて、どうやらもう普通に教室まで帰れそうだ。

「お前ほいほい治し過ぎなんだよバカか」

「そうかしら…軽率だった？でも怪我人を放つておくのは…」

「ああ？保健室にはあのババアがいるだろうが」

「そのチヨ先生の負担を減らす為にやったのよ。まだ短い付き合いだけれど、厳しくもいい先生だもの。少しでも力になればな、と…」

「だからってあの場ですることじゃねえだろ。ちったー考えろやボケ女。だから変なモブ共に群がられんだよクソウゼエ」

「ああ、あの人達…早口だし皆がほぼ同時に話すから何を話しているのかよくわからなくて…勝くんはわかった？」

「知るか。モブが何を言おうと興味ねえわ」

「もう…本当に口が悪くなったのねえ。何人かは先輩もいたようだし、モブだなんて言っっては失礼よ？」

「ハッ…モブはモブだろうが」

「これは改める気がないなあ」と苦笑しながら、来たときと同じように隣同士で教室への道を歩く私達だった。

09 女子会！

入学して最初の週最後のホームルームが終わりぎわついた教室内。

明日は休日だ。今日は特別教室が無い日であるし、明日の休日はあーちゃんと遊びながらゆつくりしようかと帰り支度をしながらぼんやりと頭の中で予定を立てていれば、「フジノンー！」と透ちゃんが突撃してきた。

「どうしたの透ちゃん？」

「フジノン明日暇？女子皆で遊びに行かない?!」

「明日？」

ええと、明日の予定はあーちゃんとゆつくりしようとしていたのだけれど…。前もつて言ってくればお手伝いの寧子さんにお願いできるけれど、両親はヒーロー業で忙しいし寧子さんは基本平日に来ていただいているから、休日は私があーちゃんと一緒にいることが多い。

「ええと、折角のお誘いとでも嬉しいのだけれど、明日はちよつと無理かしら。幼い弟がいるから一緒にいてあげたくて…」

「あちやー藤乃っち予定あったんだー」

「ごめんね、三奈ちゃん」

「あ、じゃあじゃあ今日これからは？そんなに長い時間はいれないけど、どつかでお茶しよ?!」

「これから？それなら大丈夫だわあ」

今日は寧子さんが出てくるし連絡を入れれば多少帰りが遅れても平気だろう。

「よっしゃー！じゃあ女子会しよ女子会！女子集合ー！」

三奈ちゃんの号令で近くに百ちゃん・お茶子ちゃん・響香ちゃんが寄ってきて、――
Aの女子全員が私達の席周辺に集まる。

「？何ですの？」

「あのね！本当は明日がいいなって思ってたんだけど、藤乃っちが予定あるらしくて、今日この後ちよつと前に言ってた女子会しよ！って！ヤオモモ達は予定どう？」

「私は大丈夫ですわ。迎えの車も連絡を入れれば遅れても平気ですし」

「私も特に問題ないわ、けろ」

「ウチは今日は用事ないから平気だよ」

「私も大丈夫だよ！家に帰っても一人やしねー」

「おーし！じゃあー！A女子の女子会決定ー！場所どこにする？帰りのこと考えたら駅

の近くが良いよね？」

「駅の方に確かファミレスあつたよね？そこでいいんじゃないの？ばしよは…ちよつと待つて」

言いながら携帯端末を取り出して弄りだす響香ちゃん。あ、私も連絡を入れないと自分の端末を取り出して寧子さんに連絡を入れる。

《今日は帰りにクラスのお友達とお茶をして帰るので、少し帰りが遅れます》と連絡アプリに打ち込めば、程なくして《それは良かったです。楽しんできてくださいね。お夕飯は必要ですか？》と返信が。《夕飯までには帰ります》と再度打ち込めば、《了解です》の返事とともにOK！の文字を背景に親指をぐつと上げているオールマイトのスタンプが送られてくる。

「じゃあ今日はファミレスで！カフェとかはまた今度！」

「ファミレス…とはもしやファミリーストランのことですか…!？」

「？百ちゃん？」

「どうしたヤオモモ。ファミレスは確かにファミリーストランの略だけど？」

「私初めて行きますわ！」

「マジで?!薄々思ってたけど、ヤオモモつてやつぱり生粋のお嬢様なんだー！え、もしかして藤乃つちも？聖女出身だしお嬢様？」

「お嬢様と言うほどではないわあ。ファミレスくらいなら父の相棒サイドキックの方に連れて行ってもらったことがあるわ」

「……フジノン、それって何回くらい?」

「ええと……2回?かしら?」

「ひえええ、人生でファミレスが2回!藤乃ちゃんもブルジョワ族だったん?!!」

お茶子ちゃんの様子にブルジョワ族ってなんだろうか?と思いつつながら苦笑いを零す。そして、響香ちゃんの「早く行かないと遅くなるよ」という一言で各々荷物を持って女子全員で教室から出ようと動いた。

「じゃーねー!男子ー!また来週ー!」

三奈ちゃんの明るい声に何人かが「おう」と返事を返すのを聞きながら私達は教室を出た。

そして男子のみの教室では――

「女子は女子会かー」

「…女子会……」

「辞めとけ峰田。気持ちわかるけどな！」

「上鳴い……！」

「でもいいよな。男子も男子会するか？」

「お？行く？多分駅近くのファミレスつつたらー軒しかねえしきつと女子はそこだぜ？」

「おー？男子会？やるなら付き合うぜ？」

「男だけで集まって何が面白いんだよ……」

「峰田ブレねえな……まあでも入学して間もないしな！クラスの交流つつー意味ではないんじゃないか？」

「クラスメート同士の交流か……そういう目的なら俺も付き合おう。緑谷くんはどうする？」

「うえつばぼぼく?!いい、のかな……僕も行つても……？」

「何を言っているんだ、君もIーAのクラスメートじゃないか！」

「そうだけ緑谷！遠慮せず来いよ……他はどうする？如何せん急だし、用事があるやつは強制じゃねえぞ？」

「興味無え……帰る」

「!おーそつか、じゃあな轟!また来週!」

「おう」

「今現状行けるのは、俺と切島・瀬呂・飯田・緑谷か?峰田はどうすんの?」

「ケツ:しょうがねえからこの峰田様も付き合っつてやらあ」

「はいはい。尾白達はどうする?」

「俺は行けるぞ?」

「俺も、特に予定は無いが:」

「じゃあ尾白と障子も決定と。常闇と砂藤、口田は?」

「悪いが俺は今日予定がある」

「俺もパスだ」

「(フルフル)」

「オツケー、3人は欠席な」

「んで?爆豪はどうすんの?」

「はあ?クソ共と違っつて暇じゃ——」

「あ、爆豪は強制参加な」

「ああ?!テメエクソ髪!なんで俺が——」

「まあまあお前の分は俺が奢るから!」

「行かねーつつつてんだろが！おい！聞けや！」

「さーてじゃあ俺らも移動すつかー」

「だから！お前ら聞けや！」

「腹減ったなー。ファミレスでなんか摘むか」

「俺ピザ食いてー」

「おっいいねー！」

「（かかかかかっちゃんも一緒にファミレス?! いいいいいいのかな本当に僕がいて…でも何も言われてないし他のみんなもいるしいい、かな…う…）」

「?どうしたんだ緑谷くん。早くしないと置いていかれてしまうぞ」

「!あ、うっうん…!!（だけど放課後にクラスメートと寄り道…!初めてだ…!）」

「はい！カンパニー！」

8人がけのテーブルの上には各々が頼んだデザートやドリンク。

ホットドリンクを持ってきた子もいるからグラスこそ打ち付けられないものの、元気な三奈ちゃんの声に合わせて飲み物の器を掲げる。

席順は壁側向かって左から三奈ちゃん・透ちゃん・お茶子ちゃん・響香ちゃん。そして通路側に百ちゃん・私・梅雨ちゃん。

「このドリンクバーというシステムは画期的なのですね……！確かに使われている茶葉は我が家で飲んでいるものに劣りますが、このように多種多様な飲み物が飲み放題とは……採算は合うのでしょうか？」

「どうなのかしらね？でも、確かに各々が好きな時に好きな飲物を自由にとれるシステムが画期的なのはわかるわあ」

左隣に座っている百ちゃんの呟きにそう返せば、ここで三奈ちゃんが声を上げる。

「あのね！入学して1週間経つけど、まだ名前くらいしか自己紹介してないよね？—— A女子の絆を深める為にも、改めて自己紹介しよ！」

「いいね——！何言えばいい？」

「名前とか趣味とか、特技とかかしら？」

「じゃあ言い出しつぺってことで私から！こほん……ええと、千葉の結田付中出身の芦戸三奈だよ！特技はダンス！好きなものは納豆とオクラ！個性は『酸』で、溶解度と粘度は調整出来るよ！休みの日はよくダンスしたり買い物行ったり遊びに行くことが多いかな。改めてよろしくね！」

パチパチと拍手をしながら、なるほどこんなことを言えば良いのかと必要な要項を記憶する。

「じゃあ次は私ね！葉隠透だよ！個性は見ての通り『透明化』！東京の毛糸中出身で、好きなものはキャラメルとかドッキリ番組とか！休みの日は……私も遊びに行くことが多いかな！カフエ回ったりとか服買いに行ったりとか！よろしくー！」

「次は私やね！麗日お茶子です！三重の露座柳中出身で、個性は『無重力』！ゼログラヴィティ触れたものを浮かすことができるよ。好きなものは星空、かな。好物は和食全般！休みの日は……家のことやったりりのんびりしたりかなあ。改めて、仲良うしてね！」

「三重から……では、下宿か何かに入ってからっしやるの？」

「ううん！丁度いい下宿が見つからなかったから一人暮らししとるよ！」

「まあ……凄いのね」

「えへへ、毎日の授業で大変だから、さっきの通り家事は休みの日について感じやけどね

!

高校からの一人暮らしなんてさぞや大変だろうと思いつつそれでも感心する。他の子も同じように思ったのか凄く凄くとはしゃいでいるのを聞きながら、「何か困ったことがあったら気軽に声を掛けてね」と言えば「うん! ありがとう!」とはにかんでお礼を言ってくれるお茶子ちゃんはとっても可愛い女の子だ。

「次はウチか。静岡の辺須瓶中出身、耳郎響香。個性は『イヤホンジャック』で、音を聞いたりとか逆に音を聞かせたりとかかな。好きなものは……音楽鑑賞とか楽器とか。休みの日は楽器弾いたり音楽聴きながら雑誌読んでたり? まあよろしく」

「おー! 響香ちゃん楽器弾けるの? なになにー?」

「まあギターとか……」

「おおおー! ロックだー!」

「けろっ……じゃあ次は私でいいかしら? 愛知の塩ノ洲中学出身の蛙吹梅雨よ。前にも言ったけれど、梅雨ちゃんと呼んで。個性は蛙っぽいことなら大体できるわ。好きなものは雨の日とゼリーかしら。休日は弟や妹と過ごすことが多いわ。両親の仕事が忙しくてよく面倒を見ているの。仲良くしてね」

「あら、蛙吹さん……ではなくて、梅雨ちゃんも愛知出身ですね。私もなんですの!」
「あらそうなの。仲良くしてね、百ちゃん」

「ええ、私こそよろしくお願ひしますわ」

と、梅雨ちゃんと百ちゃんの話しが終わりここで自分の番が回ってきた。

「東京の聖グレイス女学院出身の天使藤乃です。個性は『天使』。光を集めて形を変えたり、治癒ができましたり、後は翼で翔んだり羽を飛ばしたりできます。ああ、あとは、唄を歌うと少しだけ効果を乗せられるわ」

「ああ、食堂の時の！私聞いてたよー！綺麗な声だったー！なんか…聞いたことあるような曲だったなあ」

「お茶子ちゃん、ありがとう。あの時歌ったのは *Amazing Grace* という有名な賛美歌の一つね」

「ほうほう。ちなみに効果って？」

「例えば安眠効果だとかリラックス効果だとかかしら。なんでしよう、昔言われたのだけれど、天使っぽいことならだいたいできる個性らしいわ。好きなものは白いもの。服や小物は白系統が多いわね。好物も白いもので、一番好きなのはクリームシチューかしら。特技はお料理とお裁縫。お休みの日は、私も梅雨ちゃんと一緒に幼い弟と過ごしていたりあとは服や小物を作ったりお菓子を作ったり。あ、翔ぶことと歌うことも好きね。皆さん、よろしくね」

「改めて聞くと凄いい個性だよね…」

「攻撃・拘束・飛行能力に加えて歌による範囲効果……」

「さすが藤乃つち入試1位!この前の戦闘訓練は藤乃つちのおかげで勝てたよー!」

「とんでもないわ!三奈ちゃんの協力あってこそだもの。あの時はありがとうね」

「最後は私ですわね。愛知県堀須磨大附属中学出身の八百万百と申します。個性は『創造』。生物以外なら何でも作り出せますわ。ただ体内の脂質を変換して作るので限界はありますし、大きなモノを作る際は時間がかかってしましますが……。趣味は読書、でしょうか。お休みの日は良く図鑑類を読みながら紅茶を飲んでいたり、後は勉強していたりですわね。副委員長ということで女性代表として牽引できるよう努めますので、皆さんよろしく願いますわ」

「ひええ……フジノンの聖女もヤバイけど、堀須磨大附属もかなりの名門校じゃん!」

「はあーやっぱり藤乃ちゃんと百ちゃんはガチのお嬢様なんやねえ……」

こうして女子全員の自己紹介が終わり少しだけ世間話に花が咲いたところで「さて!」と三奈ちゃんが声を上げる。

「今日の女子会の目的はA組女子の交流も勿論だけどそれだけじゃないよ!」

「??」

「フッフッフ……今日この場を設けたのは他でもない!フジノン!君に聞きたいことがあったからなのだアー!」

「??私?」

いきなりの透ちゃんの指名に面食らう。聞きたいこと：特別教室のことだろうかと内心首を傾げていれば「ズバリ!」と人差し指をこちらに向ける透ちゃん。

「葉隠さん、人に指を差してはいけません。はしたないですわ」

「あ、ごめんごめん!…じゃなくて!ズバリ!あの爆豪くんとの関係聞きに来たんだよ!」

「??勝くん?」

思わぬ名前が出て更に面食らう。と、そういえばこの前一緒にお昼を食べる時になんだか教室が騒がしかったのを思い出した。

「で?実際どうなの?付き合ってるの?」

「あの爆豪と藤乃がつてちよつと想像できないんだけど…」

「付き合う?恋人同士ということかしら?それなら違うわ。雄英に入学する前、それこそずつと昔に会ったことがあるのよ」

「ずつと昔?そんなに前なの?」

「ええ。…今から10年ほど前ね——」

そして、昨日のように思い出せるその記憶を皆に話して聞かせた。私がヒーローを志した、大切に特別な一日の記憶。

「…はええ…十年前、たった一日しか一緒にいなかったのに覚えてるもんなんだあ…」
「ふふふ、ええ…私にとつてはとても大切に特別な一日だったから。だから入試のときに見かけてもしやと思ったし、その後英雄で再会してとても驚いたの。向こうは覚えてないと思つていたから、話しかけにも行けなくて…」

「ん?じゃあなんでこの前急に話すようになったの?」

「ええと、初めての戦闘訓練の後に少し話す機会があつて、それで。勝くんも覚えててくれてとつても嬉しかったわあ…」

「素敵ですわね…! 幼い頃に自分を助けてくれた人と大きくなって再会…! まるでラブロマンス小説のようですわ…!」

「ていうかそれコイバナだよね?」

「え?」

三奈ちゃんの言葉に思わずカップを持ったまま固まる。

「幼い頃に自分を助けてくれたヒーローと高校生になって再会! そしてお互いいろいろ成長しているものの根は変わってないあの人…!」

「幼い頃の初恋が、今蘇る…!」

「キヤー!!」

「え? え? あの、そういうのでは…っ!」

なんだか妙な方向に話が進み始めたので慌ててカップをソーサーに置いて静止するも、盛り上がりつつある三奈ちゃんや透ちゃんはともかく響香ちゃんやお茶子ちゃん、梅雨ちゃんや百ちゃんまで目をキラキラさせて此方を見ている。

「まあまあまあ！初恋の殿方と時を経て再会なんて……！本当に恋愛小説みたいですよー！」

「相手があの爆豪っていうのはともかく……確かにすごいね」

「それだよね！本当に爆豪くんなのはちよつと信じられないけど、でも凄いよね！ヒーロー科がある高校なんてたくさんあるのに雄英で再会って！」

「爆豪ちゃんも小さい時は今より少し柔らかかったのね」

「確かに！今の爆豪くんが泣いてる女の子を助けるだなんて想像つかんわあ」

「ええと？うーん、初恋とは少し違うと思うのだけれど……」

どうしよう。そもそも今まで家族と中学の時仲の良かった後輩以外にこの話をしたことがないのでどうしてこんな流れになってしまったかわからない。後輩の時は「お姉様はその方との、思い出、を大事にしていらっしやるんですね」と何故か思い出を強調していたがそうとしか言っていなかったの、こういう展開になるだなんて思いもしなかった。

「もう認めちゃえよーフジノン！それは初恋だって！」

「当時爆豪のことなんて思ってた?」

「当時……?ん……優しくて強い男の子、かしら。泣いていた私に手を差し伸べてくれたり、背負って移動してくれたり……すごい人なんだなあだとかこんな人になりたいなあだとか?」

「ふむ。容姿は?」

「容姿?……確かに私のは色合いが違う金髪がキラキラして綺麗だなあだとかルビーみたいな赤い目が素敵だなどとか……ああ、そうね、当時から整ったお顔立ちだったわ。それは今も変わらないわね」

「ああ。確かにまあ顔は悪くないよね。顔は」

「そうだね、顔はね」

顔、顔と連呼する響香ちゃんと三奈ちゃん。他の皆もそこは同意なのかうんうんと頷いている。

「結論、やっぱりフジノンの初恋は爆豪くん!」

「「異議なし」」

「ええ?うーん……やっぱり初恋と言われると少し違うような気が……」

「どこが違うん?藤乃ちゃん」

「なんというか、憧憬……かしら。確かに大切で特別だけれど、それが恋愛感情に直結する

かといわれると…わからないわ。なんというか、好きなヒーローがいてそのヒーローのことは好きだけれど、では男性として愛してるかと言われると違うじゃない？」

「「あー…」」

「なるほど、天使さんの中では、爆豪さんはヒーローと変わらない存在ということですね？」

百ちゃんの言葉に少しだけ違和感を感じたような気がするも、何故違和感を感じたのかがわからなくて、そのまま「ええ、そうね」と返事をする。

「なるほどねー。じゃあコイバナとは違うのかーなんだ」

「あ、じゃあさー皆は今まで彼氏いたことある？」

透ちゃんの言葉に今度は皆に対してのコイバナに切り替わる。

すっかり話し込んでいると先ほど感じた違和感なんて頭の向こうに露と消えた。そのまま女の子同士、恋愛や授業のことなどいろいろ話しながら楽しい時間を過ごしたのだった。

おまけ 男子会の様子

「おっしや皆グラス持ったか? んじゃ、カンパ―イ!」

「「「カンパ―イ」」」」

「かつカンパイ!」

「流石にもう一週間になるし今更自己紹介はいらねーよな?」

「まあ濃い一週間だったからな、流石に名前くらいはわかるだろ」

「:クソ! 席が遠いから女子が何話してるのか全然聞こえねえ!」

「本当にブレねえな峰田::」

「まあ峰田は置いといてよ:::ぶっちゃけウチのクラスの女子ってレベル高くな?」

「「「あー::」」」

「筆頭が天使と八百万だろ? 葉隠は見えねーけど、麗日も蛙吹も耳郎も芦戸も結構可愛

いもんな。な、切島!」

「え、なんで俺?!!」

「不謹慎だぞ上鳴くん!」

「まあまあ飯田、落ち着けて。::で?」

「何がで？なんだ？」

「だってお前天使と入学前からの知り合いって話じゃん？」

「そりやそうだが…別に、入試の時に助けてもらったただけだぜ？」

「助けてもらった？そういえば葉隠くんも似たようなことを言っていたな…演習場が一緒だったのかい？」

「俺が助けてもらったのは筆記の方。いやー緊張して試験のたびにポキポキ鉛筆の芯折っちゃってな。休み時間に削るの忘れてて予備がなくて焦ってたら、隣の席だった天使が貸してくれたんだ」

「なるほどそういうことか…」

「つーか俺より爆豪じゃね？」

「そーだそーだ！爆豪お前どうなんだよ実際！二人で昼飯行つといてなんでもありませんは通じないぜ?!」

「…うっせえなアホ面。どうでもいいだらろーが」

「はい、チリポテト没収ー！」

「！てめっそれ返せやぶっ殺すぞ！」

「返してほしかつたらキリキリ吐けー？」

「ああ？別に、ガキの頃に会ったことがあんだよ。おら、皿返せやツー！」

「えー?そんだけかー?」

「うっせえ死ねしようゆ顔が!」

「(かつちゃんにそんな出会いが……全然知らなかった……!)」

「なるほど、入学前からの知り合いというのはそういうことだったのか。緑谷くん、知っていたのかい?」

「!いついや全然!僕も初めて知ったよ!」

「つーか緑谷緊張しすぎじゃね?こういうところ初めてか?」

「尾白くん……その、ファミレスは来たことあるんだけど、クラスメイトとが初めてと言うか……」

「そういうことか。俺も学校帰りに寄り道というのは初めてだよ。いつもはまっすぐ帰って自習や訓練に時間を当てているからな」

「飯田くんも初めてなんだね……!(そしてブレない飯田くん……!)」

「俺も……騒がしいのは苦手ゆえファミレスは久しいな……」

「障子くんもなんだ……!(学校終わりにクラスメイトと寄り道……!楽しいなあ!)」

女子と違い二つに別れたテーブルでは対象的な雰囲気ではあるものの、各々男子会を楽しんでる男子でしたとき。

10 USJ 襲撃事件 前篇

「今日のヒーロー基礎学だが、俺とオールマイルト、そしてもう一人の3人体制で見ることになった」

そんな相澤先生の一言から始まった午後一番の授業。

本来担当教諭はオールマイルト一人なんだけれど、おそらく先日の警報事件が多少なりとも関係しているのだろうと考察する。マスコミとはいえ雄英のセキュリティーが破られたのは事実。2度3度を許す雄英側ではないけれど、保険は何重にも掛けたほうがいいに決まっている。

そして、オールマイルトからまだ連絡がないことがふと頭に浮かんだ。まだ何の話も聞いていないのに推理や憶測で父に話を聞くわけにもいかないあの日の話。まあオールマイルトは教員で何かとお忙しいそうだし、私も週に2日は特別教室があるから、きっと近々連絡があるわよね、と頭を切り替える。

「はいー何するんですか?」

手を上げて発言する瀬呂くんの言葉に、相澤先生が懐から《RESCUE》と書かれ

たプレートを掲げた。

「災害水難何でもござれ、レスキュー訓練だ」

「「おおー!!!」」

途端あちこちで興奮したような声があがる。

救助訓練、ね。医療系ヒーローを目指す私にとつてはまさにうつつの訓練だ。幼い頃から見ていた父の背中が頭をよぎる。と、ここで「おいまだ途中」という先生の声に周囲の声が止む。

「…今回コスチュームの着用は各自の判断で構わない。中には活動を限定するコスチュームもあるだろうからな」

言いながら先生が手元のリモコンを操作すれば、いつかの戦闘訓練のときのように壁から収納されたコスチュームのトランクが出てくる。

「訓練場は少し離れた場所にあるから、バスに乗っていく。以上、準備開始」

その言葉を合図に一齐に皆が動き出した。

そういえばコスチュームのヒップバックに物資を追加しようとしていたのを思い出して、カバンからあるポーチを取り出す。

「ける？藤乃ちゃんそれは？」

「簡易医療キットなの。私のコスチュームはヒップバックがあるから、それに入れてお

こうと思つて」

「へえー流石天使。けど、個性で治癒できるのに必要なのか？」

「ありがとう、切島くん。…ええと、個性での治癒つてなにかしらのデメリットが人によつてあるのよ。例えばチヨ先生…リカバリーガールの個性は、患者さんの体力を使つて自己治癒力を活性化させるから、患者さん本人に体力がないとそもそも治癒できないでしょう？ 私の個性での治癒は、私自身の体力や精神力、そういったエネルギーを分けることで治しているから、私自身が疲労困憊であつたり満身創痍であつたり、そもそも光量が少なくて個性の使用が限定的になつたりするとキャパオーバーを起こしたりそもそも治癒ができないの。でも、だからと言つて怪我人を放つておくことはできないので、これは万が一の保険、ということね」

「なるほどそうだったのか。備えあれば憂い無しということだなー！」

「ふふ、ええそんなところよ飯田くん」

話しながらコスチュームトランクを手に取り更衣室に向かう。

今日も有意義な訓練になればいいなとワクワクしながらささつと準備を終えて女子全員で玄関前に集まれば、既にバスが待機していた。そして響くホイッスル。

「1—A集合！バスでの移動がスムーズに行くように皆で2列に並ぼうー！」

張り切つて集まりだした皆を整列させている声の主は、先日の警報事件の時に生徒の

パニックを落ち着けたということで委員長の緑谷くんから直々に指名され委員長に就任した飯田くんだ。

歌による鎮静を行った私は？ということでも切島くんから名前を挙げられたけれど、慌てたように緑谷くんが勉強を理由に副委員長を辞退したことを覚えていたようで、それで実際パニックを収めた飯田くんを推した！と説明。それで切島くんらは納得していた。しかし、飯田くん自身が「あの騒ぎを止めるきっかけをそもそも作ってくれたのは天使くんでは…」と若干渋る様子を見せたが、私自身が「私も飯田くんが適任だと思うわあ」と発言すれば、ならばと引き受け今に至る。

張り切っている飯田くん、なにかお手伝いと思つて、高い車体の窓から中の様子を見るように翔べば、前方の席は壁沿い横一列に配置、後方に2席ずつの座席、最後尾の席のみ一列のシートというタイプだった。

「あの、飯田くん」

「どうしたんだい、天使くん？」

「あのね、今少し窓からバスの中を見ていたのだけれど、席の形がなんというか…観光バスのようにずらりとシートが配置されてるタイプじゃなくて…普通のバスのような席で…」

「普通のバス？ということとは……ああ、なるほど、そういうことか！」

「ええ、そうなの」

「なーんだ、じゃあ並ばなくても適当に座ればいいんじゃないかね？」

「そうだねー！」

そうして列を多少崩しつつ各々談笑しながら待つていれば、プシューという音が鳴つてバスの扉が開くと同時に、相澤先生が恐らくバスの運転手であろう方を伴つて現れた。

「おら、出発すんぞ。お前ら適当に乗り込めー」

ぞろぞろと皆がバスに乗り込んで、訓練場へ向けてバスが走り出した。

「くつまさかバスがこのようなタイプだったとは……！天使くんのおかげで整列が空回りせずに済んだよ。ありがとう」

バス後方、2席ずつに並んでいる座席の窓側から、前方の壁一列の席でお礼を言つてきた飯田くんにどういたしましてを返して窓の景色を見る。と、ふと背中に視線を感じたので振り返れば、何故か慌てたようにそっぽを向く峰田くんが後ろの席にいた。

「??」

「♪ピューピュー」

口笛を吹いてあらゆる方向を見ながら頭の後ろで手を組んでいる峰田くんの様子に、随分ご機嫌なのね。そんなに訓練が楽しみなのかしらと内心首を傾げつつ再び窓の方を向く。そういうえば峰田くんの隣に座っている百ちゃんがなにやらすごい顔で峰田くんを見ていたような…と考えていたところで、隣から舌打ちが。

「お前…そのコスチュームもつと何とかならなかつたのかよ」

「??何か変かしら?」

「バカみてえに開いてる背中」

「でも、ここを開けないと翼を出す時に服が破れちゃうから……でもそうね、このままだと冬季に活動しづらいものね、ちよつと考えてみるわ」

「フンツ……」

なんで今コスチュームの話をも疑問はあるものの、勝くんの言うことも一理あると頭の中でどういったコスチュームがあるか考える。我が家では翼の個性がある私と母のコスチュームから私服に至るまでだいたい背中が開いた服を着ている。まあ出したしり消したりは自由なので、その背中が開いている服の上からたいい何かを羽織っているのだけれど、ヒーロー活動中は頻繁に上着を脱ぎ着するなんてできない。母の冬季コスチュームはどんな構造だったかしらと細部を思い出していけば、前の方の席から梅雨

ちゃんの「私、思ったことをなんでも言っちゃうの」という声が聞こえた。

「緑谷ちゃん」

「はっはい！蛙吹き…」

「梅雨ちゃんと呼んで」

「っ、ちゅゆき…ッ」

梅雨ちゃんのことを素直にそう呼べず照れた様子の緑谷くんに小さく笑っていれば、次の瞬間梅雨ちゃんが驚くべきことを口にした。

「貴方の個性、オールマイトに似てる」

その一言に、私と、おそらく緑谷くんがドキリとする。

慌てたように「へ?! そうかな?!」だとか「いやでもっ…!」だとか何か弁解をしようとしている緑谷くん。そのやり取りを私も気が気でない心持ちで見守りながら、ちらりと隣の席の勝くんを見れば、興味のない様子で腕を組みながら目を閉じていた。と、ここで切島くんが「待てよ梅雨ちゃん、オールマイトは怪我しねえぞ? 似て非なるアレだぜ?」と言ったことによつて話題が変わり、ほつと安心するように息をつく緑谷くんに、私も同じく内心で安堵する。

そして、脳内にやはり、という言葉が浮かんだ。というか、私は事の片鱗を自分の目で見てしまつて、先生たちの会話などからある程度推察してしまつたからなんとなく事

情を察しているだけであるので、傍から見たら緑谷くんの態度は不自然極まりない。一応、クラス共通認識として、《かなり内気だけれどやる時はやる人》だという印象を抱かれているから、どもったり慌てたりするのはさほど違和感はないけれど、察している身からしては少々隠す気があるのか少し疑問が浮かぶ。

「しつつかし、増強型のシンプルな個性は良いよな！派手でできることが多い！俺の《硬化》は対人じゃあ強えけど、如何せん地味なんだよなー」

言いながら個性を発動させて腕を硬化する切島くん。肌の色こそ変わらないものの、角ばって変異した腕は物理攻撃にはうってつけだろうなという感想を抱く。

「僕はすごい個性だと思うよ！プロにも十分通用する個性だよー」

「プロなー。しかしやっぱヒーローも人気商売みてーなところあるぜ？……まあ派手でつえーつつつたらやっぱー」

そこで切島くんたちの視線が私達の方へ向いた。

「轟と爆豪…あとは天使だなー」

「え？」

「あ？」

名前を呼ばれて思わず面食らう。後方の席に座っている轟くんの様子はわからないけれど、隣の勝くんは自分の名前が出たことで目を開けていた。

「爆豪ちゃんはキレてばかりだから人気でなきそう」

「なっ?!」

正直過ぎる梅雨ちゃんの言葉に勝くんの額に青筋が浮かんだ。

「ツんだとコラ蛙女! 出すわア!」

「ほら、やつぱりキレた。ねえ緑谷ちゃん」

「はわわわわっ」

「この付き合いの浅さで既にクソを下水で煮込んだような性格と認識されてるってすげーよ」

「ツ!! テメエのボキャブラリーはなんだコラこのアホ面ア殺すぞオ!!」

そして飛び交う勝くんの怒号と飯田くんの注意の声。後ろの席から百ちゃんとお茶子ちゃんの「低俗な会話ですこと…」「でもこういうの好きだ私!」という会話が聞こえ苦笑いを零していれば、今度は何故か私に声が。

「…その点、藤乃ちゃんは人気が出そうね」

「あ、わかるー! 個性強くて、性格良くて、容姿も良い! 女性トップヒーローも夢じゃないよね?! 私も頑張らなきゃー!」

「ハッハッハ! フジノンのファン第一号は私なんだからね! あ、今のうちにサインもらっとくべきかな?!」

そういう梅雨ちゃんや三奈ちゃん、透ちゃんの声に、嬉しいやら恥ずかしいやらで再び浮かぶ苦笑い。通路挟んで私達の反対側の席、狭い座席の中で激しい身振り手振りで興奮したように話す透ちゃんに、透ちゃんの隣の席に座っている尾白くんが困ったような様子をしていたので、落ち着くように話していれば、「もう着くぞ、いい加減にしてくれー」と相澤先生の声が車内に響いた。

そうして程なくして到着した訓練場、続々とバスを降りる私達を待ち構えていたのはなんと――

「皆さん、待ってましたよー！」

災害救助で目覚ましい活躍をしているプロヒーロー、スペースヒーロー13号だった。

こうして、史上稀に見る最悪な訓練の幕が上がったのだった。

訓練場の中はまるでテーマパークを詰め込んだような規模の施設で、パツと見ただけでも様々な災害を想定して作られているのがわかる場所だった。

「水難事故・土砂災害・火災・暴風 e t c あらゆる事故や災害を想定し僕が作った演習場です。その名も、嘘の 災害や 事故ルーム：略して、U S J !」

何処かで聞いたことがあるような略称に本日何度目かの苦笑が零れる。他の皆もその略称に呆けているようで、誰かが呟いた「本当にU S J だった…」という呟きに、なるほどそれでポカンとしていたのかと納得した。

そんな私達を尻目に相澤先生が13号先生に近づいていき何やら小声で話しているのを見て、そういえば今日は相澤先生ともう一人の方…そしてオールマイトとの授業ではなかったかと思ひ出す。13号先生は宇宙服のようなコスチュームで顔が隠れているし、相澤先生はこちらに背を向けているのでお顔は見えないけれど、話している雰囲気は決して楽しそうなものではなく、脳裏にこの間見てしまった痩せこけた姿がよぎる。

まさかお体の様子でも悪いのでは…と心配になったところで、相澤先生が「仕方ない、始めるか」と私達に声を掛けた。

「えー始まる前に、お小言を一つ…二つ…三つ…四つ…」

どんどん数が増えるお小言に、一体何を言われるのかと軽く身構えていれば、13号

先生が語ったのは個性の危険性についてだった。

13号先生の個性は《ブラックホール》。あらゆるモノを吸い込んで塵にしてしまうその能力で多くの災害現場で活躍してきた先生は、しかしてこの力は人をも容易く殺せる個性ちからだと言う。そして私達の中にもそういう力を持つ子はいらるだろうとも。

体力テストで自身の個性の秘めている可能性を知り、初めての対人戦闘訓練ではそれを人に向けて使う危うさを認識したことを説いて、この授業では、ではその力を如何に救助のために使うかを学ぶというお話だった。授業を通して、私達の持つ力は人を害するものではなく、人を救うためにあるものだと知って帰ってほしいと結んだ先生のお話には、途端歓声と拍手が聞こえる。

「わああカッコイイー！」

「流石災害救助のプロ！言うことが違うなー！」

父とはまた違うやり方で人を助けてきたヒーローの言葉に胸が熱くなる。

「よし、そんじやまずは……」

指示を出すために相澤先生が口を開いた途端、一瞬悪寒が走った。何故悪寒かと疑問に思ったのも束の間、突然天井のライトが消えて少し薄暗くなる。

「え……」

何事かと周囲を探っていると、私達から見て前方にある階段を降りた先の中央噴水の

ところに、黒い靄が現れた。最初は小さなものだったのに徐々に大きくなっていくそれ
にただ事ではないと身構えていれば、相澤先生が黄色いゴーグルをかけながら「一塊に
なって動くな！13号、生徒を守れ！」と叫ぶように指示を出す。

「なになに？何かの余興？」

「さあ？でも臨場感あんなー」

「入試試験の時みたくもう始まつてるつてヤツかー？」

呑気に話す誰かの声に「違う…」と、黒い靄の中からどんどん人が出てくる目の前の
光景から目を離さず呟く。

だって、私は知ってる。あの殺気ともいえる、平気で人を傷つけられる、傷つけるこ
とに何も感じない人が持つ特有の雰囲気……！

「フジノン？」

「どうしたの藤乃つち！怖い顔してるよ？」

「ツ！飯田くん！今すぐ皆を纏めて！あれは……本物の敵だから！」

「なっ?!」

驚いたような他の皆に構わず、背に翼を出して皆の最前列、先生達の後ろに移動し周
囲に光球を展開。相澤先生からの指示では待機だったけれど、それでもいつでも攻撃で
きるようにしていれば、私のただ事でない雰囲気を感じ取ったのか皆もそれぞれ警戒し

始めた。

「正解だ天使……あれは敵だ！」
ザイラン

私達生徒を庇うような立ち位置で構えながらちらりと私を振り返ってそう言う相澤先生。いったいどれだけ出てくるのかという程の人数が黒い靄から現れてはこちらにゆっくりと迫ってくる様子に、何故こんなところにとという疑問が浮かぶ。

「やはり先日のはクソ共の仕業だったか……」

そう呟いた相澤先生の言葉に、「先日……まさか、警報事件……？」と思わず口から零れる。「察しが良いな天使。これがただの授業なら満点やつてるよ」

顔は敵に向けたまま軽口を叩くように言う先生に、警戒をしたまま返す。

「あら、褒めていただいて嬉しいですね、先生」

「いの一番に動けたことといい察しの良さといい……できた生徒だよお前は。流石はあの人達の娘といったところか……」

まるで両親を知っているかのように話す先生の言葉が気になるものの、今はこの状況をどうしようかということに頭を回して眼の前の様子をつぶさに観察する。距離が離れているため声は聞こえないが、

迫ってくる敵とは別に黒い靄の前で動かない男が4人。

左から、見るからにあの黒い靄の発生源といった風で立つ、おそらく転移系かそれに

似たような個性を持つだろう人物。その隣には灰色の髪の毛で人の手のようなものをいくつも顔から身体にかけてつけている男。さらに隣には変異型か異形型の個性だろうか、まるで人型の怪物のような見目の黒い大男。そして向かって一番右端に立っているのは、背に蝙蝠のような翼を持つ黒髪の若い男だった。4名のうち顔がはつきり見えているのは黒髪の男だけ。

纏っている雰囲気から、おそらくこの4人が主要人物だと当たりをつける。

ここで様子を伺っていた私と黒髪の男の目が合った。

その瞬間、強烈なまでの悪寒と嫌な予感が背筋を走り、気づいたら指示も聞かずに「先生すみません！」と叫びながら前に飛び出していった。

「おい天使ッ！」

先生の怒鳴るような声が背に聞こえるが、まるで何かに掻き立てられるように手に弓矢を具現化させ、周囲の光球を矢に形成した後、敵の集団に向かって一斉に放つ。

矢が到達する頃には放つた矢を輪に変えて拘束しようとするも、相手も場数を踏んだ敵なのか拘束できたのはおよそ全体の2割にも満たず、他はなんらかの手段で防がれてしまったのが遠目にもわかった。

「なんだこりゃッはずれねえ！」

「なんの個性だよこれはッ?!」

少数ながらも捉えた敵が叫ぶのが遠くから聞こえる。

一斉に放った矢の中で敵の主要陣に向けたものは、何か黒い壁のようなもので防がれていた。

あれは何……？何の能力なのか一瞬考えていれば、すう……と黒い壁が消え、変わらず佇んでいる4人。しかし、右端の黒髪の男だけ手を軽く前に出していたのでおそらくあの男の能力なのだろうと察しがついた。

「天使……お前！」

「……すみません先生ッ。でも、恐らくあの黒い霧の前に立っている人物4人が主要人物と思われまます。あの……右端の黒髪の男の人……あの人と目が合った途端、なんというか……悪寒が……ッ」

声だけでなく手足も震えてきて、ぎゅつと腕を握り込む。

「……はあ……後で反省文だからな。13号ッ」

「はいっ先輩！」

「早く生徒の避難を——」

再度相澤先生が13号先生に指示を出そうとしたところで、突如上空から「こちらであー」と場違いなほど呑気な雰囲気の声が聞こえた。

慌てて上空を見れば、そこには先程目が合った瞬間に凄まじい悪寒を感じたあの黒髪

の敵。ワイラン

「!!」

「なツ?!」

いつの間に接近したのかと声もなく驚いていると、ニヤニヤと笑いながら私達を見下ろすその男は楽しげな様子で口を開く。

「せっかく会いに来たのに…帰っちゃダメだよ? 天使藤乃チャン…?」アマツカフジノ

「え……」

ワイラン

敵に名前を呼ばれたことで身体が固まった。目を見開いて驚愕の表情を浮かべている私を他所に、再度男が口を開きかけたところで、相澤先生がぶわりと捕縛布を展開して上空にいる男に放つ。

「13号!生徒を頼むツ!」

そう言いながら男に向かう先生の背を見て、次いで響いた13号先生の「生徒の皆さんはこちらにツ!」という声に従って背を向けて駆け出した。

「おっと。危ない危ない。ていうかイレイザーヘッドじゃなくて俺が会いに来たのは藤乃チャンなんだけどもー」

「ふざけるなよ敵がツ。ワイラン いったい天使に何の用があるか知らんが、ここは通さんツ!」

背後を伺いながら出入り口まで走っていれば、上空を翔んでいる男に向かって捕縛布

を飛ばし牽制している先生の姿が。しかし縦横無尽に翔ぶ男を捕まえることは難しいらしく、いつか見た先生の個性が発動している合図の髪の毛も逆だっているのに男の翼は消えていないことから、あれは発動型ではなく変異型か異形型なのだと察する。確か先生自身の個性《抹消》は発動を消すことはできても、既に発動してしまったモノに関しては消せないはずだ。

「先生、侵入者用の装置は?!」

「ありますが…起動していないの考えると、向こうにそういった個性持ちがいる可能性があります。外部にも連絡がとれるかどうか…!」

走りながら前方から聞こえてくる声に、ハツとして上鳴くんへ声を掛けた。

「上鳴くんツ貴方の個性で連絡は?!」

「!や、やってみる!」

「頼んだぞ、上鳴くん!」

「…現れたのはここだけか、それとも学校全体か…」

走りながら静かに呟く轟くんの声にちらりとそちらに視線を向ける。

「校舎と離れた隔離空間、そこにクラスが入る時間割、バカだがアホじゃねえ。これは何らかの目的があつて、用意周到に画策された奇襲だ」

轟くんの言う通り、用意が良すぎる。さっきの先生の言葉から推察すれば、マスコミ

を囷にカリキュラムを奪取、今日この日の為に策を練ってきたのだろう。主要陣に加えあの手勢の数。そして、何故敵の一人が私の名前を知っていたのか、会いに来たと言っていた言葉……考えても考えても疑問は尽きない。

あと十数mで出口に着くというそのタイミングで、「させませんよ」と声が聞こえた。また敵……と足を止めて警戒していれば、出入り口前にあの黒い霧が現れた。そして、霧の中に立っている人のように象つたその影が話し出す。

「はじめまして、我々は敵連合」

亀裂が走つたようなおそらく目だろうそこを黄色く輝かせて話す敵。

「僭越ながら、この度ヒーローの巣窟、雄英高校に入らせて頂いたのは、平和の象徴……オールマイトに息絶えて頂きたいと思つてのことです。本来ならばここにオールマイトがいらつしやるはず。ですが、何か変更があつたのでしょうか？まあ何にしても私の役目は——」

質問をしているはずなのにまるで答えを聞く気がないかのように途端またぶわりと霧が広がる。あの敵の大群が霧から現れたことといいきつと恐らく転移系の能力者。皆に霧に触つてはダメ！と叫びかけたところで——

「うらああああッ!!」

「おおおおおッ!!」

勝くんと切島くんが敵に向かって飛び出してしまった。切島くんの打撃と勝くんの爆破が決まって煙が上がる中、誰かの「やったのか……？」という声が響く。主要陣の一人だと睨んだ相手、そんな簡単にやられてくれるかしら……と経過磯ながら煙が晴れるのを待てば、唐突に私の耳元から声が出た。

「——危ない危ない。やれやれ話している最中だったので、せっかちですね……」
え？と振り向こうとしたその時には私はもう霧の中に囚われていつてそのまま視界が黒に染まる。

もう見えない霧の向こう。「藤乃ッ！」という勝くんの声が聞こえた気がした。

数秒の浮遊感の後に放り出されたのは、崩壊した市街地を模した夜のフィールドだった。突然空中に放り出されたので慌てて翼を出してゆっくりと降下する。

私が今立っているのは建物と建物のある大きな道路。瓦礫や壊れた建造物の破片で散乱としている。天井を見上げればうっすらと壁のようなもので覆われているのがわかるのでおそらくドーム型の施設なのだろう。

街灯はあるから完全な暗闇ではないものの、夜という圧倒的に不利な状況に焦りが募る。

何故私一人がここに飛ばされたかはわからないが、一刻も早く皆に合流しなければと飛び上がろうと

いた時、声が響いた。

「やつと二人でお話できるね、藤乃チャン」

闇を縫うように上空から現れたのは、先程私の名前を呼んだ敵。ウイラン

「！あなた……」

「はあーイレイザーヘッドがしつこくてまいったよ」

「……先生はどうしたの？」

「うん？ 広場の方に蹴っ飛ばしてやったから、今頃は広場の雑魚たちと戦ってるんじゃない？」

雑魚……仲間じゃないの？ あまりの言いように怪訝そうな顔で男を見ていれば、更に男が口を開いた。

「ねえねえ藤乃ちゃんツ！君の個性、『天使』っていうんでしょ？ふふ、さっきの攻撃と
いいその背の白い翼といい本当に本物の天使みたいだね！」

「どうして……貴方は何故私の名前を知っているの……？それに個性まで……」

「あはは、知りたい？ボクのお願ひ聞いてくれるなら教えてもいいよ？」

「お願い？いったい何を言うつもりなのかと身構えていれば、「あははつそんな怖い顔
しないでよー」とまるで何が楽しいのかわからないが笑いながらそう言う敵^{ライオン}。

「あのね、君にボクの子供を産んで欲しいんだ」

「なっ……」

その内容に言葉を失くす。そんな私の様子を他所に悪戯が成功した幼子のよう
きやらきやらと笑いながら「そうそう自己紹介がまだだったよねー」と明るい声で更
続ける。

「僕の名前は紅魔^{コウマ}アギト。個性は——『悪魔』だよ」

「あ、くま……？？」

「そう悪魔！君の天使と真逆でしょう？君のことを知った時にさ、運命を感じたんだよ
ね！で、これはもう産んでもらうしかないなと思って、今回の作戦についてきたんだー」
「作戦……あなた達の目的って、一体……？」

「んー？ボクの目的は藤乃ちゃんだけど、他の連中はオールマイトじゃない？」

「え?」

オールマイト? 確かに本来のカリキュラムではオールマイト先生も授業に参加してははずだったが、何の事情か今日は此処には来ていない。

オールマイトが目的: パツと考えられるのは倒すだとかそういうことだと思っただ、でも世間一般的にオールマイトは平和の象徴と言われるとてもすごいヒーローだ。それは敵の^{ツイン}中でも共通認識のはずで、忌々しくは思っけてもそうそう倒せるような相手ではないと思っているはず:

「なんかね、オールマイトを殺すんだってさー。そのためにあんな気持ち悪いのを生み出すとか、ボクが言えた義理じゃないけど、頭おかしいよね!」

「!それってどういう...」

「あれ、見なかった? あの黒い大きなヤツだよ。《脳無》っていう、まあ改造人間かな」

改造人間: !オールマイトを倒すためにそんなものまで用意したなんて:

「ねえ、紅魔さん、だったかしら? さつきから私にいろいろお話してくれるのは何の為なの?」

「アギトって呼んでよ、藤乃チャン! そりゃあ——君らに勝てるだなんて思っけてないからだよね?」

瞬間、少ない光量の中で弓矢を形成して放つ。

「うわっ」という軽い声とともに避けられたそれをそのままに空に飛び上がって何処かにある出口に向かって翔び続けければ、あつという間に追いついてきたのか背後から声がある。

「こらーおイタはダメだよー？藤乃チャン？」

フィールドは圧倒的に不利、敵の個性の名前は判明しているものの能力は未知数、加えて先程の話の内容を考えればおそらく誘拐目的……このまま此処で叩くのはあまりにも無謀すぎると必死に翔びながら出口を探していれば、ふと後ろから風を切る音が。

「!!ッな……」

ほぼ直感で避ければ、私の足当たりを横切っていく黒い矢。見れば、相手は私のように黒い球から無数に矢を撃ち出していた。

「ほーら避けないと当たっちゃうぞー？あ、安心して！お腹は狙わないし勿論殺さないから！でも、藤乃チャン逃げちゃうし、このままだと連れて帰れないでしょ？だから――」

翔びながら辛うじて攻撃を避けつつ出口を探す。が、やはり夜のフィールドで視界が悪い。出口らしい出口が見つけれないまま翔び続けていれば、ふいに右肩に強烈な熱を感じた。

「ッーああああ……ッ」

熱の後にやってきた痛みに思わず口から悲鳴があがる。見れば肩のところが矢を掠めたのか裂傷ができていて白いコスチュームを見る間に赤く染めていく。

突然の痛みにもバランスを崩したけれど、辛うじて持ち直してまだ翔べているが、一旦何処かへ身を隠して治療しないとこのままじゃ逃げるところじゃなくなる！

何処か、何処かに身を隠せるところを……！態勢を建て直さなきゃと必死で翔んでいると、おあつらえ向きなビル群を見つけたので、未だ止まない黒い矢の雨をなんとか避けつつそちらの方に翔ぶ。

「あははっいい悲鳴だったなー。ボク別にそういう趣味じゃないんだけど、もつと聞きたくなっちゃうじゃないか！」

金色の目を爛々と輝かせながら薄気味悪く笑って言う紅魔アギト。

数が少ないからあまり使いたくなかったのだけれど……！とヒツプバッグから出したあるモノを振り向きざまに彼の眼前へ投げつけた。途端、ほんの数秒眩い光が発生して夜の街を照らす。すかさず個性を使って光の輪を形成、そのまま身体、太もも、足と拘束していけば、紅魔の動きが止まった。

とりあえず隠れる時間を稼げればとそのまま飛び去って適当なビルの内部に侵入。床に降り立って翼を消し、外から姿も光も見えないような奥の方へ向かって走る私だった。

11 USJ襲撃事件 後編

「いッ……！」

あまり大きな声を立てると見つかるかもしれないので必死に歯を食いしばりながら携帯医療キットで治療する。できれば個性での治療をしたいところだけれど、思ったよりも傷が深いのか手持ちの小型懐中電灯だと光量が足りなかったので止血だけしかできなかつた。薄皮一枚張った程度の傷はまだまだ痛くて、痛みを食いしばりながら包帯を巻いていく。

本当に、何がためになるかわからないものね……と小さくため息を付いて医療キットをしまう。怪我の場所が肩という自分で巻くには巻きにくい部位なものだから多少不恰好ではあるものの、一応治療はできたのでとりあえず一安心だ。

先程紅魔に投げたのは弱体化閃光弾。通常の閃光弾はそもそも目と耳を潰して無力化するのが目的だから、いくら人より少し眩しいのに強い私でも通常の閃光弾は使えない。

でも、発現してからずっとこの個性と付き合ってきたのだ。弱点はわかっているの

で、夜や暗い屋内など光が少ない場所で戦えるようにコスチューム依頼の際発注していたのがこの弱化閃光弾。けれど、音はともかく光の調節が難しいのか、量産ができなかった為手元にあったのは2つ。そのうちサポート科の先生にでも相談しようと先延ばしにしていたのが悔やまれる。

手元にはあと一つ。先程紅魔の攻撃を避けながら翔んでいた際、ご丁寧に街灯も一緒に攻撃していたのでますます外の光は減っているはず。ならば私が攻撃手段を確保できるのはこの残り一つを使った時のみだけれど、逆に言うとそのチャンス逃すともう私に使える攻撃手段は大幅に減る。

一応翼は無事なので風を起こしたり、母ほど器用には扱えないけれど羽を飛ばしたりくらいはできるけれど、それもあの相手にどこまで通用するか……。皆はどうしているのだろうか、とふと考えて、ワープ直前に藤乃と呼んでくれた声を思い出した。今は………なんとして此処から脱出しないと………!!

「ふーじーのーチャーン?かくれんぼかい?」

外から私の名前を呼ぶ紅魔の声が聞こえる。

「いや違う、どっちかというとかくれ鬼か!あはは、いいよ!かくれ鬼しようか!ボクが鬼だよな?じゃあ捕まったら藤乃ちゃんにはボクと一緒に来てもらうね!」

ケラケラと笑って何が楽しいのか全くわからないけれど、とりあえずまずはこの

フィールドから出ないと満足に個性も使えない。本当に圧倒的に不利な状況にため息をつきたくなる。

「けど、さっきの攻撃は凄かったなー。あの拘束を抜けるのにちよつと時間食っちゃったよ」

声を聞きながら、音を立てないようにビル内部を進んで外へ向かう。声や翼の羽ばたく音の方向からして、おそらく少し離れたところで翔びながら、私を探しているであろう紅魔に見つからないように慎重に足を動かす。

「君の個性は光だろうか？だから黒霧に頼んで此処に送ってもらったんだー。もう気づいてるかもしれないけれど、ボクの個性は闇だよ。本当に何から何まで真逆だよね！」

一番最初に私の矢を防いだ壁、次いで先程嫌という程撃ち込まれた黒い矢の雨。あれが私の個性と似たような原理であるのなら、確かに真逆と言える個性だろう。そして、このフィールドが相手にとってどんなに有利かも嫌という程理解した。

「ボクさ、すつごく興味あるんだよね……天使と悪魔の間から生まれた子供は果たして……」

ふいに声が途切れた。

一体何が言いたいのだろう。何故子供を産んで欲しいだなんてふざけたこと言ってきたのか知らないし知りたくもないけれど、少し気にはなる。

けれど、今はそんな場合ではないと先を急げば、ビルの出口らしきところを前方に見つける。とそこで、翼の羽ばたく音が聞こえたので慌てて身を隠せば、近くを翔んでいくのか再度紅魔の声が聞こえた。

「うーん、このままずっとかくれ鬼してもいいんだけど、ちよつと飽きてきちゃったな。よしフィールドをちよつと変えよう！」

言った瞬間、ドオオンツという轟音が響いて、振動でパラパラと砂埃が降ってくる。「さーて藤乃チャンの隠れてるビルはどれかなー？」

破壊音と笑い声、近くで感じる地響きに、個性でビルを破壊し回っているのを察した。自分で付き合うと言いながらなんて耐え性のない……と険しい顔になるものの、どうすればいいかと必死に頭を巡らせる。しかし、考える間も与えてはくれないつもりなのか、「ここかなあー？」という声と共にとうとう私が潜んでいるビルの隣への攻撃が始まった。このままではこのビルにも攻撃が始まってしまう。

策は何も浮かばないものの、瓦礫の下敷きになるだなんて遠慮願いたいので、意を決してビルの出口から外へ出て、再び翼を出して空へ舞い上がった。

「お、そこにいたんだねー？ 藤乃チャーン」

案の定早々に見つかって再び始まる鬼ごっこ。出口を探しながら逃げる私と、黒い矢を降らせながら追いかけてくる紅魔に、残り一つの閃光弾を使って何ができるか考え

る。

と、ここでようやくと出口らしき扉を見つけた。

「出口……！」

外にさえ出られれば！光さえあれば！

逃げながらずっと探していた、やっと見つけた希望とも言うべき出口。自分では決して気を緩めていたつもりは無かったけれど、気づかぬ間に気が緩んだのか、肩をやられたときのように右の太ももと右腕に突如凄まじい熱を感じた。

「あああああッ!!」

先程とは比じゃないくらいに痛み思わず翼から力が抜けて落下し始めてしまう。どうやら矢が貫通したらしく、矢自体はすぐに消えたものの貫通した傷口が頭になりドクドクと赤い血が流れていた。

咄嗟に受け身を取ろうとしたため全身を硬い地面に打ち付けるようなことにはならなかったけれど、体制が中途半端になってしまった為にすぎぎぎ…と音を立てて道路を滑るように不時着する。

なんとか立ち上がらないと…！力を入れるも、紅魔にやられた傷や、着地の際に出来た擦り傷や打ち身であちこちが痛くて思うように力が入らない。

動け…動け…！と必死に身体を震わせる私に、啜う悪魔の声が響く。

「あはは、良かったねー！ 出口見つけられて！…でも、油断しちゃダメじゃないかー藤乃ちゃん」

地面に降り立つたのか、コツ：コツ：と音を響かせて此方に向かつてくる紅魔。
逃げなきや、逃げなきや逃げなきや…！

理由なんか知らないけれど、相手は私に『子供を産んで欲しい』と言った。これでも医療に携わるものとして小さい頃から勉強しているのだ。それがどういうことをするのかくらいは知っている。そして、女性ヒーローは男性ヒーローと違ってそういうことに関してはやはり敵に目をつけられやすいのも…！

ほんの少しだけ、今だけ女の身の自分に悔しさを覚えながら、動かない身体に喝を入れて無事な左半身を使い必死に這って出口まで向かう。矢が貫通した腕と太ももから溢れた血が地面に線を描きながら水たまりのように広がっていった。

「ああ、あんまり動かないでよ。出血過多で死んじゃうよ？ 大丈夫、大事な身体だからね！ ちやーんと後で治療してあげる」

背後から迫ってくる靴音。目的の出口まではあと数m。身体が痛みという危険信号を絶えず発しているけれど、それよりも早く脱出を…！

無我夢中で身体を動かしていれば、とうとう「はい、終わり」という軽快な声と共に右肩の傷口を掴まれて痛みに悲鳴が零れた。

「!!ッああッ!!」

「おつとごめんね? そういえば肩も怪我してたっけ。まあそれも後で治してあげるから大丈夫だよー! ……さあて、藤乃チャン、つーかまーえ——」

言い切る前に突如すぐ近くで轟音が鳴る。

一体何が起こったのかと顔を上げれば、すぐ近くの壁に穴が開いていた。

外からの眩い光とともに一人の人物が立っているのが見える。

うさ耳のようにピンと立つ前髪、筋骨隆々な逞しい身体、そのシルエットは—

「はあ…はあ……加減を知らんのかッ…」

誰に向けているかわからないけれど、そう呟きながら肩で息をしているオールマイトが立っていた。

一瞬助けに来てくれたのかと思っただけけれど、オールマイトの様子が何だかおかしいことに気づく。

ヒーローコスチュームではなくスラックスにシャツという格好で既にあちこちボロボロ。そして此方に背を向けて腕を十字に組んでいるように見える姿は、まるで何かの攻撃を受けて壁に激突してしまった様な状態で……

「オール……マイト……?」

思わず呟いた声を拾ったのか、此方に背を向けていたオールマイトがちらりと後ろを振り向いた。

「!!天使少女ツ?!」

「!なにツ?!藤乃がいんのか?!」

「え、天使そこにいたのか?!」

オールマイトだけでなく少し遠くの方から勝くんや切島くんの声も聞こえて、突然の出来事に私も、そして紅魔も呆気にとられていたけれど、オールマイトが壊してくれた壁のおかげで今は光がある!

正気に戻るのがほんの少しだけ私のほうが早かった為、瞬時に光球を展開して未だ私の肩を掴みながら傍にしゃがみこんでいる男に向かって全力で至近距離から光を放つ

た。

「…うわっ」

ほぼゼロ距離からの集中砲火。これでもヒーローの卵、矢の状態であの距離から放つてしまうと流石に殺しかねないと思いき球状にしたのはせめてもの理性か。

今度はちゃんと当たったらしく、吹っ飛んだ紅魔の身体が近くのビルに突っ込むのを見ながら今度こそ身体を起こそうとすれば、突然ものすごい速さで目の景色が変わった。

「え…」

いつの間にやら気づかないうちにオールマイトの腕の中にいて、一拍してから抱き上げられ移動させられたのに気づいたけれど、早過ぎて見えなかった…と少し呆然とする。

「天使少女…一人でよく頑張った…!」

腕の中の私を見下ろしながらいつもの笑顔でそういうオールマイト。

明るい場所、傍には信頼できるヒーローやクラスメートがいて、逃げ切れた…捕まらなくて済んだ…!

安堵で少しだけ目尻に涙が浮かぶ。

「藤乃ッ!!」

「浮かんだ涙を無事な左手の指で拭っていると勝くん達が側に来た。

「勝くん…無事で良かった…。切島くんも轟くんも緑谷くんも、大きな怪我は無さそうね…」

「バカがッお前が一番重傷だろうが！何言ってるんだボケがとつとと治せやツ!!」

「えつと、あはは…ちよつと不利なフィールドで戦つてて…つつ。それより、オールマイト先生！助けていただいてありがとうございます！ですが、その傷は…！」

傷に触らないように優しく地面に下ろされたけれど、眼前に立つその姿は、平和の象徴やトップヒーローとは思えないほどの有様で。一見すると血が滲んでいる左脇腹の傷が深そうだった。

「H A H A H A、なあに！これしきの怪我でやられる私じゃあないよ！…それよりも君のほうが酷い怪我だ。治せるかい？」

「は、はい…！でも、私より先にオールマイトを——」

言いかけた私の言葉を遮つたのは、あの灰色の男だった。

「——へえ、ガキを庇うとは…流石平和の象徴様だなあ！」

その言葉に、私に向けていた笑顔を引つ込めて剣呑な顔つきで敵を見るオールマイト。
ト。

「でも、仕方ないよな？こっちは仲間を救ける為に力を奮っただけ。さつきもその…」

地味顔のやつ。ソイツが俺に殴りかかろうとしたしな?…他が為に振るう暴力は美談になる。そうだろ?ヒーロー…!」

まるで演説するかのように両の手を広げて更に男は続けた。

「俺はなオールマイト、怒ってるんだ!同じ、暴力、がヒーローとヴィランでカテゴライズされ良し悪しが決まるこの世の中に。何が、平和の象徴、…所詮抑圧のための暴力装置だお前は…!暴力は暴力しか生まないのだと、お前を殺すことで世に知らしめるのさ…!」

「めちやくちやだな…:そういう思想犯の目は静かに燃ゆるもの…:自分が楽しみたいだけだろう、嘘つきめッ!」

「ハハッ…:バレんの早…!」

ニタリと顔についている手、指の隙間から目を三日月状にして楽しげに笑う敵。ヴィラン

もっともらしい思想を語ったかと思えばすぐバレるような嘘をついたりして何がしたいのかわからないけれど、手負いの状態では完全に足手纏いになる私は、とりあえず移動ができるようにだけでも!と足の治療から始める。

「天使さん、大丈夫ツ?!酷い怪我だ…ツ」

「めちやくちや血出てるじゃねーか!クソツ女の体にひでーことしやがる…!」

「緑谷くん、切島くん、大丈夫…:すぐに治しちゃうから。さつきまで暗いところにいたか

ら満足に個性が使えなくて…。あの、轟くん

「…なんだ？」

「ごめんなさい、少し薄暗くて光量が足りないの。炎を出して頂けないかしら？」

施設内で先程よりずっと明るいいいっても、如何せん傷が深い。早く治す為にも轟くんにお願いですれば、「わかった」と言って私の傍に膝をつき、左手から炎を出してくれた。その炎の光を頼りにまずは太ももの傷に手を翳す。やはり貫通した傷跡ということでもいつもより少し時間はかかったものの綺麗に傷が消えてホッとしながら立ち上がった。

しかし、血を流しすぎたのが立った瞬間にくらりと視界が回って少しだけフラつくのを誰かが私の腰を引き寄せたことにより今度こそしっかりと立てた。誰が支えてくれたのかとそちらを見れば…

「勝くん…」

「チツ…大丈夫かよ」

「ええ、大丈夫…ありがとうね」

お礼を言いながらやんわりと離れてそのまま腕の貫通した傷も治してしまえば、後は肩の裂傷のみだ。一番深い傷は治したので、轟くんにお礼を言って炎を収めてもらった。

「…天使、平気か？」

「ええ、本当にありがとう、轟くん。深い傷は治したからあとは大丈夫よ」

「いや、別にいい。…さて、これで3対5、…いや6だな…」

5と言いかけた轟くんが私をちらりと伺ってきたので、私も戦えると意思表示するよ
うに頷けば言い直された。

白いコスチュームの右半身は先程までの怪我で血塗れだけれど、光がある場所ならば
私もちゃんと戦える！気合いを入れるように拳をぎゅつと握りしめ敵達を見据える。

「霧の弱点はかつちゃんが暴いた…！」

「とんでもねえヤツらだが、俺らでオールマイトのサポートすりやあ撃退できる…！」

各々が構えだした時に、「ダメだツ！」というオールマイトの鋭い声が静止をかける。

「逃げなさい…！」

「…さっきのは俺がサポートに入らなきやバかったでしょ」

「それはそれだ、轟少年。ありがとう…しかし大丈夫ツ！プロの本気を見ていなさ
い…！」

「でもオールマイト…！」

「大丈夫だ…緑谷少年！」

そして向き合う敵達とオールマイト。話を聞きながら最後の怪我を治し終わった私

は、何かできることは無いかと周囲を見回していれば、灰色の髪の男が、

「脳無、黒霧、やれ。俺は子供をあしらう…」

と、ぼつりと呟いた。能力は未知数だけれど主要陣の一人、紅魔アギトとどっちが強いのかはわからないがきつと一筋縄ではいかない相手が私達に向かってくるのを察して身構えていれば、私達がいるところの後方、先程まで一人戦っていた夜のフィールドのドームにばかりと開いた穴からがらりと音がした。

ハツとしたように振り返れば、先程嫌という程見た姿が。

「あーあ、せっかく捕まえたのにまさかのオールマイト登場とか……ツイてない」

来ていた黒い服はボロボロで瓦礫で切ったのか所々に裂傷が見られるが、軽口を叩けるだけ元気なのだろう。でも、先程の攻撃が直撃してなったその姿に、ようやつと一矢報いたようで少しだけ胸がすつとした気がした。

「シーがーらーきー！お前オールマイト殺すんじゃないやなかったの？ボクの邪魔はしないって話だったよね？」

「はあ？お前こそ、女のガキ一人捕まえられないでそのザマかよ……！おまけにお前のターゲットは治癒の個性持ち…邪魔してるのはどっちの方だか…」

軽い調子で言い合っている敵達。まさかの挟み撃ちのような状態に思わず眉間に皺が寄る。

「まさかあそこであんな攻撃してくるなんて……あーあ、せつかく僕に有利なフィールドだったのになあー」

つまらなそうに呟きながら服の埃を叩く紅魔に、私達は身体の半身を背後に向けて、前と後ろを同時に警戒さるように構える。

「…おい、天使」

「轟くん……?」

「アイツがお前と戦ってたヤツか?」

「ええ、名前は紅魔アギト。個性は『悪魔』で、私と似た個性よ。空を飛んだり、黒い球体……闇を操ってそれを変形させたり……」

「なるほどな……で、自分に有利な暗いフィールドに天使を引きずり込んだのに、オールマイトの偶然のおかげとは言え取り逃がしたワケか」

「……はあ?」

最後の煽るような轟くんの言葉に、服の埃を叩いていた手を止め、不機嫌そうに紅魔が反応する。

「くくくつ……アギト、お前ガキに言われてるじゃんか……!」

「煩いよ死柄木。……まあボク大人だし?ガキの戯言にいちいち突つかかるほど子供じゃないからあ?……今なら藤乃以外全員嬲り殺して許してあげるよ……!死柄木、ガキ共は

ボクがやるからお前らはそっちで勝手にやってな」

「そーかよ」

「さあ藤乃…第二回戦と行こうか？」

言いながら黒球を展開し多量の矢を放ってくる紅魔アギトに、私も同じだけ光球を展開してそれを撃ち落とすように放つ。

「!!皆ッ!」

「オールマイトはそちらに集中を!この人は…私が——」

「俺、達、がだボケッ!」

「…ええ、私達が相手をします…!」

「しかし——」

何を言い募るオールマイトの言葉を聞きながらも、お返しとばかりに更に弓矢を具現化して追撃。手応えは感じなかったものの、すぐ様飛び上がる紅魔を地上から矢でどんどん狙い撃ちしていく。

「あーあ、明るい場所に出た途端元気になっちゃって…:…本当、さつき捕まえられなかったのが悔しいなあ…!それに、仲間もいるからボクに勝てるって思っちゃってるのかな?さつきあんなにボロボロにしてあげたのに?」

「…そうね、一人で逃げながら戦っていた先程よりずっと気が楽よ?それに…:…ここぞな

ら先程のようなことにはならない、わ！」

話しながら多量の矢を撃ち込んでいけば、怪我をしているにも関わらず器用に飛び回り避けられる。

そうして今度は不利な状況下ではないフィールドでの第二ラウンドが始まろうとしていたその時——オールマイトの方から凄まじい気配を感じて思わず振り返った。

「ツえ…?」

目にも留まらぬ速さで脳無に向かって行くオールマイト。そしてオールマイトを迎撃するように拳を振り上げる脳無。二人の拳がぶつかった時、辺りに強烈な風圧が広がった。

「ツキヤアアア！」

「ぐッ！」

「うおおッ！」

あまりの風圧に少し飛ばされたものの何とか地面にしがみつき、足と地面を縛り固定するように光の輪で拘束して耐える。強風ではつきりと目を開けられない中でも腕を壁になんとか状況を確認しようとする薄目を開いて前を見れば、一発…二発…と音からしてとても重い拳を繰り返しているオールマイトと脳無。

「おいおい…さつきショック吸収って自分で言ってたじゃんか…！」

「そうだなアツ!!…ハアアアアアツ!!」

死柄木と呼ばれていた灰色の髪の毛の男の言葉に頷きながら、吠える声とともに繰り出されるとてもないラツシュ。拳の殆どがもう目で追えぬくらいの速さで、オールマイトも勿論凄いが、それに対応しているように見える改造人間脳無の力にも驚く。

「な、なんて風だ…!」

「すつすげえ…ツ!」

「ぐっ……!」

打ち合うたびにどんどん強くなる風圧に轟くんや私と違って地面に身体を固定するすべを持たない勝くん達。彼らの方に腕を翳して飛ばされないように足を地面に固定してあげれば、驚いたようにこちらを見たのが視界の端でわかったけれど、直様視線をオールマイトに戻す。

「君の個性がシヨック無効ではなく吸収ならアア!! 限度があるんじゃないかアア!!」

見ただけではもう何発打ち込んだのかわからないくらいの数の拳。ふいに脳無が放ったその一つが、オールマイトの左脇腹の傷に直撃して一瞬だけ体制を崩したように見えた。が、体制を崩したのは本当に一瞬のようで、直様脳無を押し返し始めた。

「私対策?…私の100%の力に耐えるなら…! 更になら振り伏せようツ!!」

何発も何発も脳無の身体に拳を叩き込み、ついに脳無の身体が体勢を崩した。そこを全力で地面に叩きつけるように殴りつけ、あまりの威力に脳無が地面にバウンドして宙に浮く。そして――

「敵よ……こんな言葉を知ってるかツ!!更に向こうへ――Plus Ultraaaaa
!!!」

脳無の腹部に、今まで見た中で一番強烈な一撃が入った。

「コミックかよ……ショック吸収を無いことにしちゃった……究極の脳筋だぜ……!」
「デタラメな力だ……再生も間に合わねえほどのラッシュユってことか……!」

風圧が止み、皆で立ち上がりながら天井を見上げる。

そこにはポカリと大穴が開いて、燦々と日光が降り注いでいた。

オールマイトの最後の一撃、それによって脳無の身体がまるで彗星のように空へ消えたのはつい先程の光景だ。切島くんが言ったように、まるで本やアニメのような光景が目の前で起きて、その力に愕然とする。

「これが、オールマイト……平和の象徴……」

出した声は自分でもわかるほどに驚愕をその声音に乗せていた。

「……やはり衰えた……」

オールマイトの言葉にハッと我に返ってそちらを見れば、拳を振り抜いた姿勢から戻し、困ったように笑いながら立っていた。

「全盛期なら5発も打てば十分だったのに……300発以上も打ってしまった……」

戦闘の名残である土煙が舞う中、呟いたその人はもう全身ボロボロで……先日保健室で見た姿が脳裏をよぎる。とりあえず回復を……と足を一步踏み出したところで、バツと掌をこちらに向けて静止を促したオールマイト。その仕草に足を踏み止まる。

「……さてと敵^{サイラン}」

私達の方を向いていた身体を残りの敵^{サイラン}達に向けるオールマイト。気づけばいつの間にか紅魔も死柄木や黒霧の隣に怠そうにしながら立っていた。

「お互い、早めに決着をつけたいね……」

不敵に笑いながら言うオールマイトに、黒霧は警戒を頭にし、紅魔は「あーあ」と言

いたげな風で天上の穴を見上げ、そして死柄木はわなわなと身体を震わせていた。

「チートかよ…ッ!」

途端ガリガリと首を搔きながら呟く。

「おいおいどういいうことだ…全然弱つてないじゃないか…ッ。、アイツ、…俺に嘘を教えたのかッ?」

ブツブツと呟く死柄木の言葉に、アイツ…? 誰か情報提供者がいるの…?と、気になる一言が出てきて一瞬そちらに意識が向くも、ガリガリと首を搔き筆る音が言葉の合間に聞こえてきて不気味さが募る。

「…どうした」

「ッ!!」

「来ないのか…? クリアとか何とか言ってたが…出来るものならしてみろよ…!」

聞いたことのないような低い声でオールマイトがそう言えば、死柄木は「うう…ッ!」と悲鳴のようなものを零して後ずさる。

そして、そこに場違いなほど呑気な声が響いた。

「…なあ、今日はもう帰らない? 藤乃チャン捕まえるのはオールマイトのせいで失敗するし、オールマイト対策した脳無は空の彼方だし、お前らはともかくボクは疲れたしい…」

「はあ……？」

「!!紅魔アギト……何をッ！」

戸惑うような死柄木と黒霧の様子に構いもせず怠そうに言う紅魔。

「だつてさー？連れてきた雑魚は全滅、脳無もない。おまけに藤乃ちゃんは怪我を治してピンピンしてる。向こうには無傷のガキが他にも4人、怪我しているとは言え脳無ぶつ倒したオールマイトでしょ？そもそも誰がオールマイト相手すんの？ボクは嫌だよ？こんな明るいところでオールマイトの相手すんの。そもそもオールマイト殺したのはお前らの目的じゃん？ボクは藤乃ちゃん手に入ればそれでいいしさ」

「お前……何勝手なことを……ッ」

「はあ？オールマイトにビビって後ずさったヤツにとやかく言われたくないんですけどー？」

「お前……アギトオ……!!」

一触即発といった雰囲気では何やら揉め始めている敵達^{サイラン}。というか、先程から捕まえるだの手に入れるだのと好き勝手言ってくれるので、他の皆がちらりと私を伺うように視線を向けたのがわかった。

「落ち着いてください……死柄木弔、紅魔アギト！確かに脳無はもう手元にはいませんし、あと数分もしないうちに増援もくるでしょう。しかし、やられたとはいえ手下は死んで

「いませんで使えるヤツらは残っている。それに……よく見ればオールマイトにも脳無にやられたダメージはあると見える。私達で連携をすれば——」

「アホらし。つーか増援来るの？なに、黒霧お前取り逃がしたわけ？」

「それは……ッ」

「オールマイトにダメージがあるからなんなんだよ。手負いの状態で殺せるならとつくに、先生、が殺してんじゃないの？」

「先生……？また気になる単語が出てきた。先程の死柄木のアイツという言葉と、紅魔が言った先生。同一人物かそれとも——」

「ボク的には一旦引いて、体制立て直したほうがいいと思うんだけどー？」

「目の前にラスボスがいるのい……！くそっ！」

「死柄木弔……」

「……チツ……しようがねえ。黒霧、帰るぞ」

「つ！よろしいのですか？」

「いいさ、今日はあつちに勝ちを譲ってやる」

「……」

言葉を区切った死柄木の身体が一瞬靄に包まれて視界から消えた。

「一人くらい殺して、スコア稼いだから帰りたいよな……？」

突如緑谷くんの目の前に靄が出現して、上半身だけ靄から覗かせた死柄木の手が迫る。

「緑谷くんツツ!!」

悲鳴のような声で名前を呼ぶも、迫る手に反応できてない緑谷くんに、私もそして勝くん達も手を伸ばそうとするけれど、

「間に合わ、ない……!」

そして死柄木の手があとほんの数センチで緑谷くんに届くかというところで……パアンツと一発の銃声が響いた。

「ぐうツ……」

呻くような声が聞こえた後に靄の中に戻っていく死柄木。緑谷くんの前に発生していた小規模の靄は霧散して、地面には血痕があった。

「クソ……もう来たのか……!」

忌々しげに呟く死柄木は、右手を撃たれたのか血を流していてその手を抑えていた。その様子にもしやと思つて銃弾が飛んできた方向を見れば……雄英の先生方がずらりと並んでいるのが遠くに見える。

「増援が……!」

「来たのか……!」

遠くて声は聞こえないけれど、ミッドナイト先生やプレゼント・マイク先生などプロヒーローがずらりと並んでいるのは壮観だった。完全に捕縛していなかった敵達サイランと戦闘し始めた音が遠くから響く。

「はい、ゲームオーバー。さ、とつとと帰ろ……と、うわっ！」

断続的に銃声が鳴る中、きつとスナイプ先生の個性だろう弾丸が眼前の敵達サイランに迫った。

壁や靄で防いだ紅魔や黒霧には当たらなかつたけれど、死柄木には両足に当たつたらしく、少し体勢を崩したものの、追撃で迫る弾丸はそのまま黒霧の靄に防がれ、そしてそのまま敵達サイランの身体を靄が覆っていく。

が、そこで靄自体が何かに吸い込まれるように揺らいだ。その方向を見れば、瀬呂くんと砂藤くんサイランに身体を支えてもらいながら13号先生が指先を黒霧に向けていたので、先生の個性だろう。

吸い込まれて少しずつ引きずられながらもどんどん身体を覆っていく靄。その中で顔だけまだ見えている死柄木が言った。

「あーあ、結局一人も殺せずかよ……！今回は失敗したけど、次は殺すぞ……！平和の象徴……！」

真つ直ぐにオールマイトを見据える死柄木。そして、続くように紅魔を口を開いた。

「藤乃チャン、また会いに来るねー！その時は……今度こそ、手に入れるよ」

ニヤリと笑いながら金色の目を爛々と輝かせてそう言った紅魔。

そして靄が消えるとともに彼らの姿は音もなく消えたのだった。こうして、私達の最悪な一日の幕は降りた――

敵の主要陣が去り、駆けつけてくれた先生方が手下の敵たちを捕縛ツイランしている様子を遠目に見ながら、やっと終わったーと思ったところで、視界がぐらりとして倒れそうになる。が、それを今度はぐっと耐えて、しっかりと自分の足で立つ。

戦いは終わったけれど、私にはまだやることがある、と足を踏み出して静かにオールマイトに駆け寄れば、そこにはいつか見たあの痩せこけた姿で地面に座り込んでいた。

土煙がまだ浮かぶ中、近くに来た私以外には見えなくてよかつたと心底安堵しつつ先生に声を掛けた。

「オールマイト先生……」

「ああ、天使少女……H A H A、この姿を君に見られるのは2回目だね……そうだ、時間を取ると言いながら連絡できずすまない。この件が終わったらすぐにでも——」

「いいんですよ、そんなのいつでも……さ、まずはお腹の傷から治しますね……」

「すまないね……だが、そこだけ治したら相澤くんのところに行ってもらえないか。意識がなかったのが気になってね……きつと彼も酷い怪我を負っている」

「でも……」

「きつと君も本当は身体が辛いはずだろう？なら、その体力と力は彼の為に使ってあげて欲しい……」

「オールマイト先生……」

自分だって満身創痍のはずなのにそれでも他の人を優先させるその人に、なんとも言えない気持ちになりながら治癒をしていけば、「オールマイト！」と小声で叫びながら緑谷くんが近寄ってきて、そしてオールマイトと一緒にいる私を見て目を丸くした。

「ええ、あつ天使さんツ?! えっいや僕はその……!」

「大丈夫だ、緑谷少年……詳しい話はまだまだが、天使少女も、知っている、んだ……」

「なっ!なんで……!」

「その話も含めて後日ちゃんと時間をとるよ、今度こそ約束だ、天使少女。……さ、もうい

いから、早く相澤くんのところへ…」

「ッは、」

腹部の傷が消えたのを確認してから、驚愕の表情で私を見ている緑谷くんをちらりと見て、それから駆け出した。

そして背に翼を出して一刻も早く相澤先生の元へたどり着くように空へ舞う。眼下では先生方と敵^{サイラン}達が戦闘しているが、さすがプロヒーロー、数など物ともせずに着々と鎮圧が進んでいる。

きつと他の人達が固まっているのは入口付近だろうと真つ直ぐにそこへ向かえば、案の定皆が居た。

「…藤乃ちゃん！」

上空からやって来た私に気づいたお茶子ちゃん達。無事な姿にほつとするも、急いで地面に降り立ち「相澤先生は？」と問えば、救急隊がまだなのか地面に仰向けで寝かされている姿を指さされる。

「先生酷い怪我で…全然意識無くて…！でも藤乃ちゃんもそれ、凄い血が…！」

「ああ、私のは大丈夫よ、もう治してあるから。それより相澤先生の怪我を…！」

「藤乃ちゃんの個性なら治せるかしらッ？相澤先生、私達を助けるためにかなり無茶をして…あの黒い大男の敵^{サイラン}から物凄く攻撃を受けていたのよ…！」

泣きそうな顔で訴えるお茶子ちゃんと梅雨ちゃんをなだめながら先生の方へ足を進める。黒い大男の敵とは脳無ヴイランのことだろう。あのオールマイトに匹敵する力を持った敵に攻撃を受けたなんて……！

そして先生のもとにたどり着いて状態を見れば、全身ボロボロ、手足はあらゆる方向を向いてまさに満身創痍といった風体で硬く目を閉じていた。僅かにだが胸が上下しているのがわかって、自発呼吸はできているようでほんの少しだけ安心する。

しかし、目の周りが紫色に腫れ上がっていて恐らく顔面か眼窩ら辺の骨折を起こしているのは見て取れた。先生は目の個性故にまずはそこからやらないと今後に関わるかもしれない……！と手足の骨折より先にそちらから始める。

脳に出血などがあつた場合は私の力じやどうにもならないけれど、骨折ならば……！
先生の顔面に両の手を翳して治療し始めた。

バサリと音を立てて背の翼が先生の身体を覆うように広がり、手に光が集る。ただでさえ疲労困憊と貧血の中ごっそりと自分の力が抜けていくのを感じるが、力が抜けるその感覚に、やはりどれほど酷い怪我なのかというのを再認識した。

時間にして数分は経っているものの、一向に治らない光。これほどの怪我を治すのは初めてだからどのくらい時間がかかるかわからないけれど、疲れた身体に喝を入れて個性を使えば、そんな私とは裏腹に光が淡く点滅し始めた。これは……マズイわ……！

「くっ……！足りない……！」

「え？え？何が足りないの?!」

「光……！光量が足りないの……！本当に酷い怪我……！お願い誰か！光を頂戴！ライトでも炎でも何でも良いの！」

「光?!光つて、どうすればいいの?!あ、携帯のライト?!つて今持つてない！」

「……天使、これでいいか？」

混乱するお茶子ちゃん達を他所にずいっと差し出されたのは赤い炎。

私も自分の怪我を治すのにお世話になった轟くんの個性だった。

「……オラツ藤乃。これでいいんか」

そして逆側には両の手から火花をバチバチと発生させて光を生み出してくれる勝くん。私が空を翔んでここに急いできた時はまだ二人は広場の方から移動中だったのに、戻ってきたんだと察した。

正直今すぐにも意識を飛ばしそうな程私の体力気力は限界が近いけれど、二人が力を貸してくれたのだ。それに、最初に私を助ける為に動いてくれた先生なのだから、絶対治します……！と気合で持ち堪えて、更に個性の発動を強める。

「うっぐう……！」

「藤乃ちゃん……！」

自分でも無理をして個性を使っている自覚はある。額に脂汗が浮かぶのをそのままに、梅雨ちゃん心配そうな声が聞こえるけれど返す余裕はない。ただただひたすらに意識を手の光に集中させていけば、やがて徐々に徐々に光が収まってくる。

そうして完全に光が収まりゆつくりと手をどければ、目の腫れは治まっていつもの無精髭を生やした顔が見えた。

「はあ…はあ…よかった…っ。」

「藤乃ちゃん大丈夫?!」

「フジノン、顔色が…!」

「だいじよ、ぶ…あとは、てあし、を…!」

まだ怪我は残ってる。他にも怪我人はいる…!と思うも、既に限界を超えて個性を使用していた私は、そのまま後ろに倒れ込んだ。意識が薄らぐ中、誰かが倒れる私の背を支えてくれたような気がしたけれど、誰かを確認するまでもなく私の意識は闇沈んだ。

某県某所のBAR

「いつてえ…っ。手と両足を撃たれた…完敗だ…ッ。脳無もやられた！手下どもは瞬殺だ！子供も強かったア…ッ！」

黒霧の霧の中から出てくるなり店内に倒れ込んだ死柄木が言う。

「なあ…平和の象徴は健在だった…話が違うぞ先生エッ!!」

そして暗闇に《SOUND ONLY》の文字が浮かぶ液晶画面から、声音からして壮年だろうか。低い男の声が響く。

《違うないよ。ただ見通しが甘かったねえ…》

続くように老人の声が聞こえた。

《ふむ、舐め過ぎたな。敵ザイラン連合》なんちゆうチープな団体名で良かったわい》

小馬鹿にしたように言う老人が更に続ける。

《ところで、儂と先生の共作、脳無は?》

《回収してないのかい?》

その質問に、一拍置いた後、まるでバーテンダーのような格好をした黒霧が口を開く。

「吹き飛ばされました」

《なにッ?!》

「正確な位置先がわからなければ、いくらワープとは言え探せないのです、そのような時間も取れなかった…!」

絞りすように答えた黒霧の言葉に、《せっかくオールマイルト並のパワーにしたのに…!》という老人の悔しげな声が部屋に呻く。

《ま、仕方ないか。残念。…そういうえば、アギトの方はどうだったんだい? 会えたんだろ?》

「会えたよー! 超可愛かった! ボクの子を産むなら藤乃ちゃんしかないね!」

《ははは、良い出会いだったようだなによりだよ》

「ただ、途中オールマイルトやらの邪魔が入ってね…もう少しだったのにさー。まあ次はうまくやるよ」

楽しみに答える紅魔の声を聞いて、また壮年の男は少しだけ笑った。

《へえ、そんなに良い子だったのかい。僕も会ってみたいねえ…》

「嫌だよ。先生に会わせたら壊されるか盗られちゃうじゃないかー。ごめんだね。僕はあのままの藤乃チャンがいいんだ」

《おやおやこれは手厳しい…はははは》

《…弔。今回はこのような結果になってしまったのは仕方ない。だが決して無駄ではなかったはずだ。精銳を集めよう。じっくり時間をかけて》

「ああ……」

《我々は自由に動けない。だから、君のようなシンボルが必要なんだ…なあ、死柄木弔。次こそ、君という恐怖を世に知らしめろ》

「…わかつてるよ——先生」

1 2 戦いの後

「やあ、塚内くん！」

うすぼんやりとした意識の中、オールマイトのなんだか嬉しそうな声が聞こえた。ついで聞こえた知らない男の人の声。

うつすらと目を開ければ何処かで見たとような天井。身体は柔らかな布に包まれている、おそらくベッドか何かに寝かされているのを悟った。

「……は……」

「！目が醒めたのかい？天使少女！」

寝起きでぼんやりとした頭で声の方を見れば、隣のベッドで身体を起こしているオールマイトとページジュのコートを来た見たこと無い男性。そして、いつもの位置に座っているチヨ先生がいて、ここが保健室なのを知る。認識した途端、ガバリと勢いよく起き上がった。

「なっなんで私保健室に……いえ、それよりも相澤先生達は?！」

「まあまあ落ち着きなさい天使少女。…彼は塚内くん。私の友人の刑事さんでね。今他

の子達の様子について聞こうとしていたんだよ」

「藤乃、アンタ血を流しすぎたのと個性の使いすぎで倒れたんだよ。まったく、事態が事態なだけに文句は言えないけれど、それにしたっていつも口を酸っぱくして《自分の限界を知れ》と言ってるのにつ。課題増やしたほうが良いかね？」

「チツチヨ先生……!」

「まあまあリカバリーガールも落ち着いてください。…はじめまして天使藤乃さん。警視庁の塚内といいます。君のお父さんとは面識があつてね。写真は見せてもらったことがあるんだが、実際会つたのは初めてだね」

「父が……」

警察とヒーロー、共に治安を守る組織として自ずと接点はあるだろうけど、オールマイトの友人である刑事さんとも面識があるとは…と素直に驚く。

「して、塚内くん。他の皆の様子は？」

「ああ、貧血と疲労で倒れた天使さん以外は数人が軽傷。イレイザー・ヘッドも13号も命に別状はないそうだよ」

「そうか……」

「そうそう天使さん。病院から連絡があつただけだね」

「!はい……」

「イレイザー・ヘッドなんだが、身体はボロボロなのに首から上は無傷だつていうのでだいぶ驚いていたよ。脳にも損傷はなし。…医師の話しだと、顔面が骨折痕だらけで、下手したら目の障害が残るほどだったそうさ。君の個性のおかげだよ」

「そう、ですか…！良かった…！良かった…！」

他の怪我の治療をする前に倒れてしまった私だけれど、それでも、少しでも助けられることができて本当に良かったと胸の前で拳を握りしめながら、安堵と嬉しさで涙が頬を伝うのを指で拭う。

「3人のヒーローが身を挺していなければ、生徒らも無事じゃいらなかっただろうな…」

そんな私の様子を見ながら呟いた塚内さんの言葉に、オールマイトが待ったを掛けた。

「…一つ違うぜ、塚内くん。生徒達もまた戦い、身を挺した。こんなにも早く実戦を経験し、生き残り、大人の世界を、恐怖を知った一年生など今まであっただろうか」

オールマイトの言葉に、顔を上げる。

「…敵もバカなことをした。このクラスは強い！強いヒーローになるぞ…！…私は、^{ワイラン}そう確信しているよ」

世界一のヒーローからの言葉。

言いながら優しく見つめるオールマイトの青い瞳が夕日でキラキラと輝いていて――その言葉を、光景を、私は一生忘れないようにと胸に刻みこんだ。

もう身体も大丈夫ならさっさと帰りな、とチヨ先生に言われたので素直に保健室から出る。

私自身大きな怪我は自分で治したし、あの落下した時に打ち付けた身体にできた細かい擦り傷や打ち身などは寝ている間にチヨ先生が治してくれたのだろう、もう何処にも怪我はない。貧血も休んでいる間に輸血してくれたらしくもうすっかり体調はいい。ただ、やはり疲労はすぐにはとれないので、早く帰ろうと更衣室に向けて歩き出す。

そういえば保健室を出る時にチヨ先生に言われた言葉を思い出した。

《その服の御礼はちゃんと伝えとくんだよ》

その言葉に、ふと今の自分の格好を見下ろしてみる。

コスチュームの白いノースリーブハイネックは肩の怪我により右側が血で染まっていたはずなのに、今はシンプルな半袖の白いシャツを着ていた。下はコスチュームの短パンのままだけれど、太ももの怪我によつて血まみれだったニーハイソックスも、腕の怪我で汚れたロング手袋もつけていない。ただ、短パンの中から歩きたびに揺れるガーターベルトとショーツブーツだけがコスチュームの名残を見せる。

あまり人に見せたい格好ではないなど足早に更衣室に向かえば、前方に見えてきた女子更衣室からぞろぞろと人が出てくるのが見えた。

「！藤乃ちゃん！」

「え？フジノン?！」

「藤乃さんッ！」

一番先頭にいたお茶子ちゃんを筆頭に女の子たち全員が私の名前を呼びながら駆け寄ってくる。

「もう身体は大丈夫なん?！」

「心配したのよ」

「うわあああん！フジノン無事で良かったよー！」

「本当に！一人で何処かにワープさせられちゃった時は焦ったけど、無事で良かった！」
「切島達から聞いたんだけど、一人で敵と戦ってたんだけって？怪我也酷かったって聞いて

てたけど、元気そうだね」

「本当に良かったですわ……ご無事で何よりです……！」

口々に言うみんなにありがたうを返せば、皆もう着替えたはずなのに更衣室まで付き合ってくれて、お話ししながら着替えていく。

「そういえば、このシャツは何方のかしら？ チヨ先生に誰かが用意したものだと言いた
ただけ……」

「ああ、それなら百ちゃんか！ 倒れた最初は病院に運ばれるはずだったんだけど、原因が怪我とかじゃなくて貧血と過労だつてわかつて保健室につてことになったんだけどね。リカバリーガールがこのままじゃ寝かせられないつて言つててそれで……」

「まあフジノン血塗れだったしね……姿見た時はビックリしちゃったよ！」

「まあそうだったの……百ちゃん、ありがとうね」

「そんなとんでもない……このくらい、相澤先生の怪我を治す為に頑張つてくれた友人のためですもの！」

丁寧な頭を下げてお礼を言えば、にやかな笑顔でそう言つてくれた百ちゃん。いい友人を持ったなあと嬉しく思つていけば、「それに、良いものを見させて頂きましたから！」とさらに輝くような笑顔で言われ、良いもの？と首をかしげる。

「そうそう！あの時気絶して倒れた藤乃ちゃんをね！」

「なんと爆豪くんが！」

「お姫様抱っこで運んだんだよー！」

お茶子ちゃん、透ちゃん、三奈ちゃんが順番に説明してくれた内容に、そういうば…と倒れた直後誰かの腕が背を支えてくれたのを思い出した。

「ああ、あの腕勝くんだったのね…後でお礼を言わないと…」

「えーフジノンそんだけ?!」

「ふふふ、意識がなかったときのことだもの。それに、勝くんの筋力ならたしかに持ち上げられても不思議はないわよね」

「なるほど、覚えてないからノーカンってことか」

「ふふ、そういうことよ響香ちゃん。これが起きてるときだとちよつと照れくさかったかもしれないけれど、流石にあの時はもう気を失っていたから…」

口と表情では何でも無いことのように取り繕ったけれど、内心重くはなかっただろうかという不安ながよぎる。が、即座に頭の中からそれを追い出して手を動かせばあつという間に着替え終わった。

「藤乃ちゃん、あなたのコスチュームは私が預かっていたの。付けていた装備品は全部あると思うわ。血で汚れていたのも…一応ビニール袋で分けて一緒にいれてあるの、けろ」

「梅雨ちゃんありがとうね、とても助かるわあ」

「いいのよ、相澤先生を助けてくれた大事な友だちのためだもの。…これ、このトランクに入っているから、そのまま提出すれば修繕に出せると思うわ」

「本当にありがとう」

受け取ったトランクの中を開ければ、たしかについ先程まで着用していたコスチュームが入っている。脱いだコスチュームの残りを中に詰めていれば、梅雨ちゃんが言ったとおりビニール袋に入れられた血まみれの手袋とニーハイソックスらが視界に入った。

途端、暗闇の中逃げるしかなかった苦い記憶が蘇る。もしあの時オールマイトが来なかったら――。

もつと、もつと強くならないと…!!

あのときの恐怖や無力感が零れ出ないよう蓋をするように、パタリと静かにトランクを締めめた。

翌日、たくさん食べてたくさん寝た私はすっかり元気になっていた。昨夜の事件を理由に本日は休校だ。

昨日の夜は学校側から事情説明された両親と、その後私からの話を聞かせて話し合っていたが、どんな目的にせよ私自身が狙われているというのは確かなので、あまり一人で行動しないこと、暗い場所には近づかないことなどを約束して終わった。

最初は父の相棒サイドキックを誰か護衛につけようかと言い出したのを必死にだめたのは記憶に新しい。愛されているのはとても嬉しいけれど、前線で働いているヒーローを護衛に学校生活を送るなんて申し訳ないし、何より校内は今回の件で確実にセキュリティーを強化するだろうから学校に着いてさえしまえば大丈夫だと言えば、渋られたものなのか取まってくれた。ただ、東京駅までは送迎が着いてしまったが、これはもう仕方ないと諦める。

そんな私は今、警察署に事情聴取に来ていた。

今回の件、オールマイト以外だと、生徒の中で明確に敵ライアンに狙われたのは私一人だったために、話を聞きたいと昨日のうちに連絡があったので訪れたそこは、スーツや制服に身を包んだ警察官の方々が忙しなく行き交っている。

昨日の今日で一人で外出できるはずもなく、あーちゃんが保育園に行っている間に付き添ってかれている寧子さんと一緒にロビーで待っていたら、「やあ、待たせたね」と声がかして、そちらを見れば昨日オールマイトから紹介された塚内さんという刑事さんが立っていた。

「昨日の…塚内さん、でしたね。本日はよろしくお願いいたします」

「これはこれはご丁寧に。こちらこそご足労いただき感謝します。…さ、此方へ」

「あ、寧子さんは待ってて頂ける？きつと人に聞かれてはならないお話もするだろうか
ら…」

「わかりました。…あの刑事さん、藤乃さんをよろしくお願い致します…」

「ええ、署内は安全ですし、軽くお話を聞くだけです。…さ、行こうか、天使さん」
促されるまま歩き出せば、程なくある一室に通された。

机に椅子、柵しか無いシンプルなお部屋で、何故かドアは開け放した状態のまま椅子を勧められる。

向かい側に塚内さん。そして少し遅れて入ってきたのは制服を着た猫のお巡りさんだった。手には湯呑を一つ乗せたお盆が。

「どうぞ」

「ありがとうございます。…ふふつ猫のお巡りさんなんです」

「ああ、よく言われるよ。彼は三茶、僕の部下だね」

「は！玉川三茶であります！」

びしりと敬礼付きで名乗っていたので、私も「天使藤乃です」と椅子から立ち上がり頭を下げる。

「さて、ではお話を聞かせてもらおうか」

塚内さんの言葉に再び席について、そしてゆっくりと口を開いた。

昨日どんなことがあったか、どんな話を聞いたかを事細かに説明すれば、塚内さんは眉間に皺を寄せながら「：：そうか」と考え込むように呟いた。

それからいくつか質問された後に、答えられるだけの情報をすべて話し終えれば、「本日は来てくれてありがとう。ご協力感謝するよ」という言葉とともに見送られる。

時計を見れば、警察署に来てから2時間ほど経っていた。

「藤乃さん、蒼翔くんのお迎えまでまだ少し時間がありますし、お茶でもして行きましょうか？」

「あら、いいですねえ。じゃあ駅への道すがらお店を探してみましようか」
寧子さんの思わぬ提案に笑顔で頷きながら、二人並んで駅への道を歩く。

歩道橋に差し掛かったところ、ビルの大型ディスプレイから昨夜のニュースが聞こえてきた。

《——昨日、雄英高校ヒーロー科の災害訓練施設で生徒たちが敵に襲撃を受けた事件の続報です》

思わず足を止めてディスプレイを見る。

《警察の調べによると、犯人グループは自らを『敵連合』と名乗り、今年春から雄英高教師に就任したオールマイトの殺害を計画していたことが新たにわかりました。警察は72名の敵を逮捕しましたが、主犯格の行方は依然としてわかっていません》

思わず手すりをぎゅっと握りしめる。キャスターはもう次のニュースを読み始めていたけれど、じつと画面を見つめながら昨日の出来事が頭の中でぐるぐると流れていた。

オールマイトの殺害を企てた敵、対策として生み出した人造人間《脳無》、希少なワープの個性を持つている黒霧、明らかに主犯格の一人と思わつる死柄木吊、そして——私の拉致・誘拐が目的だった紅魔アギト。

あの金の瞳が脳内をチラつくたび、あの時の恐怖や絶望、無力感が胃の辺りを撫でるようにざわざわとする。

「あら、怖い顔してるわねえ、お嬢さん？」

明らかにこちらに向かつて呼びかけているような声が聞こえたのでそちらを向くと

「!!ミツ……香山、先生?」

「ハア、天使さん!」

いつものコスチュームではなく私服に身を包んだ香山先生が立っていた。

何故こんなところに……?と疑問を浮かべていれば、

「ちよつとお時間あるかしら?」

薄く微笑んでそう言う先生に、今度こそ首を傾げた私だった。

「ごゆつくりどうぞ」

「ありがとう、マスター」

「ありがとうございます」

お洒落なジャズが流れる落ち着いた店内、私達二人の前にはそれぞれ頼んだ飲み物とケーキが置いてあった。

先生の突然の誘いに首を傾げた私だったけれど、先生が来たということはおそらく事件のことだろうと察して、寧子さんには先に帰ってもらうことにした。私を一人にするのは：と少し心配そうな様子を見せた寧子さんだったが、香山先生が責任を持って送る、と言ってくれたので先生に頭を下げながら歩き出す寧子さんを見送り、そして先生の案内のもと訪れたこの喫茶店。

こじんまりとした佇まいで、平日お昼過ぎの時間、お客さんは私達のみ。香山先生のお知り合いがやっているお店らしく、メニューを提供したら慣れたように裏に引っ込んでしまった店主さんに軽く頭を下げる。

「突然ごめんなさいね」

「いえ、とんでもないです。：あの、先生がいらしたということは、昨日の件ですよね？」
「ああ、やつぱりわかっちゃった？」

コーヒーのカップを傾けながら微笑む香山先生。それに伴うように私も紅茶を頂けば、茶葉にこだわっているのか香りがとても良くて美味しい。

：しかし、何故香山先生なのだろうかと思っていれば、まるで思考を読んだかのよう
に先生が話しました。

「私が来たのは、私が女性ヒーローだからよ」

「！」

「貴方のことはオールマイトやりカバリーガールから聞いてるわ。昨日貴方に何があったのかもね。でも詳細は知らない。だから、警察で話してきたと思うのだけど、私にも詳しい話を聞かせてくれないかしら？ 同じ女性なら話しやすいんじゃないかというアレね！」

「そういうことでしたか。わかりました。……まず、訓練を始めようとしたら敵が出現したのは聞いているかと思います。他の皆が余興かなにかなのかと騒ぐ中、私自身は過去に敵に会ったことがあったので、直様その人達の雰囲気や余興などではなく本物なのだと思います。いつでも攻撃できるように個性を使って警戒していました。その時に敵の主犯格を観察していたのですが、黒霧、死柄木、脳無、そして例の紅魔アギトがいて、その紅魔と目があつた途端強烈な悪寒を感じて気づいたら攻撃していました。……あ、そういうえばその件で相澤先生に反省文を提出しないと……」

「反省文？」

「ええと、先生方の指示を聞かずに先走つて攻撃してしまつたので……それで先生に言われたんです」

「ふふっそうなんだ？ でもまあ、確かに先走つての攻撃は反省すべき点ではあるけれど、状況が状況だったもの。大丈夫じゃない？」

「そう、でしょうか？」

いいんだらうかと思うものの、先生に先を促されたので続きを話す。

「ええと、それで…私が攻撃した直後くらいに頭上から紅魔が現れて、そこでやつに名前を呼ばれ『会いに来た』と言われました。すぐに相澤先生が応戦してくださって、私達は13号先生の指示の下避難を開始したんですが、出口直前にあの黒霧というワープの個性の敵ヴァイランが現れ、私一人だけワープさせられました。ワープさせられた場所は夜の災害訓練上で、混乱したものの早く脱出をしないと、と出口を探そうとした時に再び紅魔が現れました。そこで、最初は紅魔と話をしていたんです」

「どんな内容か聞いても？」

「始めに『やつと二人きりで話せる』と。相手をしていた相澤先生はどうしたのかと聞いたら『広場の方に蹴り飛ばしたので、今頃は手下が相手をしているだろう』と言われました。そして、何故か私の個性を知っていて、何故知っているのか訪ねたら『お願いを聞いたら教えてあげてもいい』と言われ…」

「お願い？」

「は、こ」

今思い出すだけでも不快感が湧く内容だ。が、香山先生が話の続きを待つようにじつと見ているので、紅茶で口を湿らせてから再び息を吸う。

『子供を産んでくれ』…と言われました」

「な……子供？」

「ええ、たしかにはつきりとそう言われたので間違いないです。そして、紅魔が名前を名乗り、個性を明かして、真逆の個性に運命を感じた、私に会いたくて作戦に着いてきたと話したので、作戦とは？ 目的は？ と聞けば、紅魔の目的は私だけけれど、他の奴らはオールマイイト抹殺だろうと言われました。そこであの脳無という改造人間のことなどを聞きました」

「…随分素直にお話してくれたのね？」

「ええ、私も気になつて聞いたんですが、『君たちに勝てるだなんて思つてないからだ』と言われまして…そのあと戦闘に入りました」

冷静に思い出せば、あの時攻撃を仕掛けたのは私からだつた。不利な戦場で、不意を打つてからの逃げ一択だつたのはあの場ではそれしか取れる行動が無かつたと思つていたけれど、今はもつとやりようがあつたのではと思えてくる。自分では気の長いほうだと思つていたけれど、あの挑発で気づいたら攻撃していたのだから、まだまだ冷静さが足りなかつたなど改めて反省点が出てきた。

「それからは攻撃を避けながら出口を探して翔び周っていました。『天使と悪魔から生まれる子供に興味がある』と言つていたんですが、言葉通り興味本位なのか、それとも別に目的があるのか…何故私にそんなことをさせたいのか、具体的な目的はわかつていません。」

翔び周り逃げ続けるうちに出口を見つけた私は、一瞬の気の緩みから攻撃を受けて腕と足に怪我を負い追い詰められ、偶然とは言えオールマイトが来なかったら確実に捕まっていた。あとはオールマイトや皆と合流して…という形です」

「そう……話してくれて、ありがとうね」

テーブルの上で、負の感情が混ざり合って小さく震える私の拳に、柔らかく手を重ねながら香山先生がそう言った。

顔をうつむかせながら、「先生」と呼ぶ。

「私…あの時、本当に逃げ回るしか出来なかったんです…っ。不利な戦場だから…相手は自分に悪意を持つ敵で、^{ライオン}プロでもないヒーローの卵と1対1。…ええ、状況的には逃げるしか無かったのはわかっています。でも…」

「でも…っ」

「すぐ…悔しい…！だってあの時、オールマイトが来なかったら、私は捕まっています…っ。偶然に助けられただけなんです…！他の皆はほぼ無傷だったと聞きました。私と似た状況で一人で戦っていた尾白くんだって。でも、私だけ怪我を負った。私だけ逃げ続けるしか無かった…それが、とても悔しいんです…！」

恐怖、不安、絶望…確かに感じたけれど、一夜明け私の胸の内を占めているのは、悔しさ、だった。

あの更衣室の時、女の子たちから聞いた他の人の状況。確かに敵の主犯と当たって尚且つ一人だったのは私だけかも知れない。けれど、他の皆だつて実戦は初めてだったはずだ。なのに一人だけこの体たらく。おまけに怪我人がいたのに力の使い過ぎにより途中で気絶とは、チヨ先生が呆れるのも無理はない。

「先生……私、強くなりたいんです……もう逃げなくても良いように、もう偶然の幸運で助からなくても良いように……！ちゃん最後まで患者さんを診てられるように……去り際に紅魔が言つてました。『また会いに来る、その時は必ず手に入れる』つて。勘ではあります、必ずまた彼は現れます。だから、次はちゃんと戦えるように、ちゃんと立つてられるようになりたい……！」

ずっと燻っていた胸の内を吐露して香山先生をまつすぐ見据えれば、そこには顔をうつむかせて何故かふるふると小刻みに震えている先生の姿があつた。震え……怒り?! あ、もしや次は戦いますというのがダメだったかしら。そうよね確かに先生方から見れば子供で生徒な私達はしかるべき時までには守るべき存在。確かに先生に堂々と言うようなことでは……と怒られる不安を感じながら恐る恐る声をかけた。

「あの、先生……？」

「もおおお!!! 天使さん! 貴方めちやくちやいいわ!! そういう青い感じ、めちやくちや好みよ私!!」

「はい?」

いきなり興奮したように話す先生に思わず目が点になる。

「ああ、私にも覚えがあるわあ…自分の力の無さに憤り、悔しさが胸の中いっぱい広がって、強くなりたいと願ったあの日…!はあ、青春ねえ…!」

「えつと、あの、先生?」

「!ああ、ごめんなさい。こほん。…貴方の気持ちはわかったわ。ところで話は変わるけれど、貴方確か6月のアレ受けるのよね?」

「お存じでしたか。…はい、チヨ先生からの課題ですし、何より自分のレベルアップにも繋がりますから」

「正直治癒の能力についてはリカバリーガールや貴方のお父様に師事したほうがいいけれど、戦闘技術に関しては私達でも教えてあげられる」

「つまり……?」

「ここは先生方に任せなさいってこと!強くなりたいのでしょうか?そういう生徒を、先生は…いえ、雄英は全力でバックアップしますからね!」

ウインクしながら言う先生に、一拍遅れて内容を理解し、その場で立ち上がって頭を下げる。

「ありがとうございます!よろしく、お願いします!!」

「ええ、まかせといて！」

人より便利な個性故に初めて味わった無力感や敗北感を、しつかりとバネに変えて強くなる……！

決意を胸に秘めながら、カップ片手に微笑む香山先生に笑い返す私だった。

13 オールマイトの秘密

休校明けて翌日、いつも通り登校してガラリと教室の扉を開ければ、既にもう結構な人数が登校していた。

「フジノンおはようー!」

「藤乃ちゃんおはようー!」

「おー天使。身体はもういいのか?」

口々に声を掛けてくれる方たちにおはようと大丈夫を笑顔で返しながら席についてカバンを置く。

一限目の授業は確か…?と思いつながら教材を準備していれば、遠くの席で透ちゃんが「ねえねえ昨日のニュース見たー?!」と興奮したような声が聞こえた。

昨日のニュース…街頭で見かけたあれではなく、おそらく夜のニュース番組で放映されたほうだろうと内容を思い出せば、確かコスチューム姿のクラスメートが映っていたはずだ。生憎私はその時気絶していたので放映はされていなければ、他の皆は写真が出ていたわね…と頭の中で昨日のニュースを思い返していれば、前の席で三奈ちゃんと

梅雨ちゃんがホームルームを担当する教師は誰かという話をしている。

相澤先生は：首から上は私が治したとは言え両手足を負傷しているのだ。まだ入院中のはず、と思っていれば、梅雨ちゃんも同意見だったのか「誰がやるのかしらね？」と三奈ちゃんに返事をしていると、ガラリと教室の扉が開いた。

「おはようー」

そこから姿を表したのは、顔はいつもどおりだけれど両腕を三角帯で吊り足を引きずりながら歩いている相澤先生だった。

「……相澤先生復帰早っ!!」

「先生無事だったのですね!」

飯田くんの大きな声が真後ろから聞こえてきて、あれは無事とは言わないのでは……? と思っていたらお茶子ちゃんが似たような内容を呟くのが聞こえた。

「俺の安否はどうでもいい。…何よりまだ、戦いは終わってねえ……!」

ゆつくりと教壇へ上がった先生が言う。皆がその言葉に緊張しているのを横目に見ながら、戦い……? 戦いつて——と思ったところで、ふとカレンダーが頭の中に浮かぶ。そういえばこの時期はもうすぐ……

「雄英体育祭が迫ってるッ!」

「……クソ学校ほいのキター!!」

先生の言葉に、やはりそうかと納得する。去年までは毎年観戦していたのだ。父も事務所への勧誘のために目を通していたし、何よりヒーローを目指すものとしては欠かせない行事である。昔からこの学校を目指していたけれど、今年からはまさか自分が出る方になるなんて…と何だか感慨深くなる。

ハイテンションな歓声をあげていた皆だったけれど、響香ちゃんの言葉にその歓声が鳴りを潜めた。

「^{ヴィラン}敵の侵入されたばっかなのに、体育祭なんてやって大丈夫なんですか？」

「また襲撃されたりしたら…」

響香ちゃんに続くように言う尾白くんの懸念ももつともだと思う。学校側も何か考えがあるんだろうけれど…と先生の言葉を待っていれば、ちゃんと説明があった。

「逆に開催することで、雄英の危機管理体制が盤石つていうのを示す考えらしい。警備も例年の5倍に強化するそうだ。何よりうちの体育祭は最大のチャンス。^{ヴィラン}敵如きで中止していい催しじゃ無え。」

うちの体育祭は日本のビッグイベントの一つ。かつては、オリンピックがスポーツの祭典と呼ばれ全国が熱狂した。今は知つての通り、規模の人口も縮小し形骸化した…として日本において今、かつてのオリンピックに代わるのが——雄英体育祭だ！」

プロヒーローを目指すなら必ず成果を残したいイベント、体育祭。

勿論スカウト目的で現役のプロヒーローも見ているそのお祭りで、如何に自分をアピールできるかによって今後の進路も変わってくる。

「当然、名のあるヒーロー事務所に入った方が経験値・話題性は高くなる。時間は有限。プロに見込まれれば、その場で将来が拓けるわけだ。年に1回：計3回だけのチャンス。ヒーローを志すなら絶対に外せないイベントだ。：その気があるなら準備は怠るな！」

「「「はい！」」」

そして、「ホームルームは以上だ」と教室を出ていく先生を追いかけて、私も教室を出た。

「相澤先生」

「天使？どうした」

「いえ、その…怪我を治させて頂けないかと…」

「お前これから授業だろう」

「あ、いえ、お昼休みにでもお時間頂けませんか？」

「それなら、まあ…」

「！ではお昼休みに職員室に伺いますね！」

「はあ、わかった。：そうだ天使」

「はい?」

「頭の怪我治してくれたのはお前だつてな。ありがとうな」

「そんなとんでもないつ。他のところを治療する前に気を失ってしまいましたし…」

先日の失態が脳裏によぎる。

「医者から聞いた。お前の治癒がなければ、目に何らかの障害を負っていた可能性がある
らつてな」

「はい…私もお聞きしました」

「手足の怪我は酷いもののいずれは治る。だが障害が残った場合はそうもいかない。教
師としては情けないが、ヒーローとしては感謝してるよ」

「っはい。本当にご無事で良かったです…!先生、あの時は助けていただいて、ありがと
うございました!」

目一杯頭を下げてお礼を言えば、「顔を上げろ」と先生が言ったのでゆつくりと顔を上
げて先生を見る。

「…警察やミッドナイト先生から話は聞いた。まああれだ、俺でもミッドナイトさんで
もリカバリーガールでもいい。何かあつたら頼れ」

「…はい!」

「それにお前に関しては6月の件もある。俺は今でも反対だが…まあこれから約一月

半、おそらく他のクラスの連中なんて比じゃないくらい忙しくなるぞ。気張れよ」

「はー」

授業に遅れるからさっさと行け、という先生の言葉に、再度軽く頭を下げた踵を返す。先生の言ったとおり、これから6月までは勉強に訓練にと慌ただしい日々になるだろうけど、今よりももっと強くなると決めたのだ。チヨ先生からの課題含めて、絶対にこなしみせる…！と気合を入れながら教室に戻るのがあった。

「はい、じゃあ宿題のプリントは次回の授業までにやっておいてねー」

セメントス先生の言葉を合図に、今日の日直の「起立」という言葉が聞こえて席から立ち上がり、礼をする。先生が教室を出た瞬間に途端ざわめく教室内。

ざわざわとした喧騒の中話題に上がるのは勿論体育祭のことだった。

話の輪に加わりたいなあと思いつつも、今日は約束……というか用事があるので、誘ってくれる梅雨ちゃん達に断りを入れてランチボックス片手に教室を出た。

お昼を摂りに行く人の波を掻い潜りながら職員室まで向かえば、途中の廊下でばつりとオールマイトに会った。

「やあ天使少女!」

「オールマイト先生、こんにちは」

「おや、お昼かい? ちょうど良かった! ……例の件について話があるから、お昼を一緒に食べないか? 緑谷少年もこれから呼びに行こうと思つていたんだよ」

後半は声を潜めて伝えてくるオールマイトに、とうとうこの日が来たかと頷く。

「…なるほど、わかりました。ただすいません、これから相澤先生の怪我を治しに行くので、その後でも大丈夫でしょうか?」

「OH! 本当に君は献身的だな! わかったとも! 用事が終わったら、2Fにある仮眠室に来てくれるかい? 場所はわかるかな?」

「ええと、はい、大丈夫かと」

「じゃ、私は緑谷少年を探してくるから、また後で会おう! H A H A H A!」

キラリと白い歯を輝かせて去っていくオールマイトと別れ、足早に職員室に向かう。

今まで出てきた情報の断片から、ぼんやりと察してはいるけれど、とうとう全容が明

かされるドキドキを抑えながら職員室の扉をノックして「失礼します」と声を掛けて入室した。

「相澤先生」

「…本来に来たのか」

「ええ、お約束ですもの」

「はあ…お前は全く。その怪我人を見るとどうにかしなきゃとなるのは父親譲りか」

「この前もおつしやつてましたけれど、父とお知り合いで？」

「まあな。昔世話になった。というか、此処ら辺近郊のヒーローで世話になっていないヒーローはいないだろう」

思わぬ言葉に驚く。確かに父は医療系ヒーローとして有名だし、災害や怪我人が出れば直様駆けつけるけれど、まさかそんなに顔が広いとは。

「おお、Dr. ライトなら俺も面識あるぜエ！つーか、あそこ系列の病院はだいたいヒーローが世話になってるんだよな。セキュリティーもしっかりしてるからマスメディアも入れねえ！」

「マイク先生…ああ、そういうことですか。確かにうちの病院はセキュリティー高いですな」

「そんなわけで、ヒーローが怪我したりすると決まって系列の病院で世話になるから、必

然的にお前の親父さんと接点を持つやつは多いって事だ。……場所変えるか？」

「ああ、いえ、そのままです。では足の患部から失礼しますね」

適当な椅子に足を乗せてもらって、ズボンで捲り包帯が巻いてある患部に手を翳す。既にある程度治療を受けた後だからなのか、翼を出さなくても治りそうだったのでそのまま光を集めて治療しながら、先生の言葉を頭の中で再生する。

《ヒーローで世話になつていない人はいない》か……。さらりと言われたその言葉だけけれど、要はヒーローとはそれだけ怪我の多い仕事だという厳しさが含まれていた。そして、そんなヒーローを支える医療現場はもっと大変だということも。

私が目指す父のような医療系ヒーローは、普段のヒーロー活動に加えて医療行為も含まれる。個性には恵まれているものの、先日の一を考えてもまだ未熟。父の背中はまだつまみだ遠いな……と内心苦笑いしながら先生の治療を終え、包帯を外せば、傷一つない足が見えた。

「どうでしょうか、痛みますか？」

「いや、大したもんだ。ありがとうな」

「いえ、歩きにくそうだなと思つたゆえのお節介ですから。では腕を……」

「腕はいい。ヒーローならこれくらいは怪我はつきものだし、腕の方が骨折が酷かったらしくてな。プレートが入ってる。まっこの怪我を期にしばらくは兼業ヒーローを休

んで教職に専念するさ。体育祭関連で忙しくなるしな」

「そうですねか……わかりました。じゃあ、私はコレで」

傍らに置いたランチボックスを抱えて一礼し職員室を去ろうとすれば、背後から「天使」と名前を呼ばれたので振り返る。

「??」

「助かった。……だが、人よりやることが多いんだ、無理はするなよ」

「……はいっ先生！それじゃあ、失礼しました！」

笑顔で先生に頷いて、職員室を出た。

「はぁー可愛いな天使ちゃん。『はいっ先生♪』だってヨオオオ！」

「山田、五月蠅い」

「本名で呼ぶなア！……でもしかし、今どき見ないくらいの良い子だよなあ……」

「……そうだな、若干良い子過ぎるくらいはあるが」

「あーそう言われればそうかア？でもまあDr. ライトはいい娘を持ったもんだねえ」

「……ああ、まあな」

そんな会話が職員室で繰り返されているのも知らずに歩く私は、次の目的地である仮眠室に向かっていた。

教員が使う部屋なので職員室から然程離れていない場所にあるそこに着けば、微かに

中から人の声が聞こえて、既にお二人がいらつしやるのを悟る。

コンコン、と軽快にノックすれば、「どうぞ」と中からオールマイトの声が聞こえたのでがらりと扉を開けた。

「!!ああ天使さん?!えっオールマイト一体…?!」

「遅れてすみません」

「やあ天使少女。然程待つていないから大丈夫さ!お茶でいいかい?」

「まあ、お気遣いいただきありがとうございます。頂きますわ」

とても驚いた様子の緑谷くん。彼の隣にある椅子に腰掛けてテーブルの上にランチボックスを置く。

「かなり驚かせてしまったみたいね。オールマイト先生…彼には話していなかったんですか?」

「H A H A H A! サプライズというやつさ!」

いつもの輝く笑顔で親指を立てながらそういう先生に、「さ、さぷらいず…?」と呆然としたように呟く緑谷くん。

「さて役者が揃ったから始めようか——」

筋骨隆々な姿から、いつか見たあの痩せた姿に変わり真剣な声で言うオールマイトに、さっそく本題に入るのかと背筋を正す。次の言葉を緊張しながら待っていれば……

「——ランチをねッ!!」

「……………らっランチ…ですか…?」

「……………まあ」

「嫌だなあ緑谷少年!最初にお昼一緒に食べようって誘ったじゃないか!」

「そ、そうですけど…え?何か大事な話があったんじや…?」

「それは後で!さ、お腹ペコペコだろう?少年少女!先に腹ごしらえと行こうか!」

「ふふっそうですね」

「わ、わかりました!」

そうして先に昼食を摂ることになった。

私はいつもの自作弁当、緑谷くんは購買で買ったパン、そしてオールマイトはなんと…手作り弁当だった。だが、そのお弁当箱の大きさは成人男性にしては小さいけれど。

「先生、お料理されるんですね?」

「まあね、これでも独身生活が長いから自然とね」

「オッオールマイトの手料理…!美味しそうですね!」

「ハハツありがとう。どれ、食べがかりの少年に、少しおすそ分けだ」

言いながら唐揚げを一つ、お弁当の蓋にころんと置いて緑谷くんの前に差し出すオールマイト。確かに今日の緑谷くんの昼食はパンが二つと少し心もとないので、では私

も、と先生の蓋の上に野菜の肉巻きを置いてあげる。

「ふおおお……！オールマイトの手料理と、女の子の手料理……！ハツ……！もしやこれは夢……？」

「ふふふつ大袈裟ねえ。あ、お箸はある？ないならこの予備のフォーク、使つて？」

ケースからミニフォークを差し出せば、かなりどもった様子でお礼を言われたので、その様子が何だかおかしくてくすくす笑いながらどういたしましてを返す。

感激したように美味しい美味しいと若干涙ぐみながら言う緑谷くんは、オールマイトと二人笑いながら楽しい昼食を取り終わった後、オールマイトが入れてくれたお茶を頂きながら食後の一服をする。

「——さて、お腹も膨れたことだし、今日の本題に入ろうか」

温かい湯呑をテーブルの上に戻して、姿勢を正しながらオールマイトの話聞く。

「まず緑谷少年、今この場に天使少女がいるのは、先日のUSJの件でも言ったとおり、天使少女が事情を知っているからだ」

「その、一体いつから……？」

「私が見つけたのは、初めての戦闘訓練の時だったわ」

「!!結構最近じゃないですか！」

「私も聞くつもり、というか知るつもりはなかったのだけれど……あの日、緑谷くん個性

の反動で怪我をしたでしょう？それで、治癒したいと言った私の言葉を先生は《授業中だから》と止められて、それで授業終了後様子を見にまっすぐ保健室に向かったの。そうしたらチヨ先生とオールマイト先生が話しているのを聞いてしまつて…」

「そ、そんなことが…」

「後日時間をとるということでその時はその場を去つてもらつたんだ。もつとも、私は話すつもりはなかったのだけれどね。ただ、リカバリーガールからある提案を受けたんだ」

「提案…?」

「彼女、天使少女を、緑谷少年…君の主治医にしてはどうかとね」

「はあああ?!」

驚いたように叫ぶ緑谷くんに、たしかに驚くわよね、と苦笑いを零す。主治医と聞くと、なんだか緑谷くんが重病でも患っているかのような印象を受けるけれど、でもまあ現状個性使用の反動で使うたびにあんな怪我をしているようじゃああながち主治医も間違っていないのではという気がしてくる。

「ここからは順を追つて話そうか。まずは私のことから——」

そうしてオールマイトが話してくれたのはとても驚くべきことだった。

オールマイトの個性《O F A》ワンフォーオールは聖火のごとく代々引き継がれてきたものというこ

と。6年前、とある敵との戦いで大怪我を負い、ヒーロー活動時間に制限が出来たこと。父を主治医に身体を診てもらいながら、ヒーロー活動の合間に後継者を探していたこと。本来雄英に着任するのはその後継者探しのためだったそうだけれど、その前に緑谷くんと出会い、彼に可能性を感じて個性を譲渡したこと。

「——やはり、そうでしたか。あの時チヨ先生が言っていた『力を渡した愛弟子』という言葉がずっと引っかかっています。この個性社会、本当に多種多様な個性がある中、他人に譲渡できるような個性があってもおかしくはありませんもの」

「やはり察しが良いね、天使少女」

「そして、今代の継承者とも言うべき存在が、緑谷くんなんですけどね？」

「ああ、そうだ…」

「ちなみに、その戦いの際に負った怪我というのはどの程度何でしょう？」

「…胃を全摘、呼吸器半壊だ」

あまりの怪我の酷さに眉をしかめる。そして先程の小さなお弁当箱を見て、なるほどと納得もした。胃の摘出手術を受けた患者さんは、胃という消化活動における重要な部位の内蔵を失ったことによりその食生活がかなり変わる。聞けば怪我を負ったのは6年前ということだし、今はもう落ち着いてると思うけれど、術後すぐの頃はかなり大変だったことだろうとその苦労を心のなかで偲ぶ。

「あの！天使さんの個性でオールマイトの身体を治したりとかは……」

「緑谷少年……いいんだ」

「でも……」

「……残念ながら、私の個性ではどうにもできないわあ。聞けば怪我を負われたのは6年前とのことですよね？私の個性は外傷なら治せますが、傷を負った当初ならともかく、そこまで時間が経っているともう私に出来ることはありません。現に、チヨ先生や父でもどうにもならなかったんですよね？」

静かに聞くと、「ああ」と一つ頷くオールマイト。緑谷くんが顔をうつむかせたのが視界の端でわかった。

「リカバリーガールの個性は言わずもがな、Dr. ライトの個性でも流石に臓器を復元したりは出来ないみたいだね。傷の治療や手術自体は彼を筆頭に医師たちが頑張ってくれたのだが……」

「そうですね……申し訳ありません、もっと力がアレば……!」

「H A H A、親子だねえ。当時Dr. ライトにも似たようなことを言われたよ。いやいいんだ。この傷自体は私の油断が招いた結果でもあるしね」

油断？オールマイトほどの人が？疑問が浮かぶものの、その前にオールマイトが更に続ける。

「医師たちやりカバリーガール、Dr. ライトには感謝しているよ。術後のサポートもとても良くしてくれたからね」

「…そうですか…」

そこで、黙ってオールマイトの話を聞いていた緑谷くんが、顔を伏せ膝の上でギュツと拳を握り、それからゆっくりと私と視線を合わせた。

「僕、本当は無個性だったんだ…。それで、中学の時に縁があつてオールマイトに救われて、そしてこの力を授かった。ヒーローになれるって初めて言ってくれた人なんだ…！」
ローになれるって、君はヒーローになれるって初めて言ってくれた人なんだ…！」

「緑谷くん…オールマイトのこと、お力になれなくてごめんなさいね」

「いいんだ！僕こそ、無理を言つてごめん。…その、天使さんが主治医つていうのがいまいちまだわからないんだけど、それでも、君のそのすごい個性を僕に使つてサポートしてくれるということなら…！今はまだ借り物で、全然自分のものに出来ていない個性だけれど、自分のモノにできそうな気がするんだ！だから、どうか力を貸してくれませんか!!」

突然立ち上がりバツと勢いよく頭を下げる緑谷くん。ふわふわした黒緑色の旋毛を見ながら、「頭を上げて、緑谷くん」と声をかければ、おそろおそろといった感じで顔を上げる彼に、につこりと笑いかける。

「頼まれずとも、するつもりだったのよ?」

「え?」

「個性を使うたびにあんな酷い怪我をされたんじやあ医療に携わる者としては放っておけないし、それに嫌な言い方だけれど、個性を使つて怪我を治療するというのは私自身の鍛錬にもなりますから、ね?」

「天使さん……!」

「丁度体育祭もありますし、二人で個性を使いこなせるように修行しましょう!」

「うんツ!!」

「あ、ただ、主治医なんて仰々しい役職がついてしまったけれど、きつと期間限定になるわね」

「?えつと……?」

「だって、すぐとは言わないけれど、いつかはちゃんと使いこなせるようになるでしょう?」

「!……勿論っ!!」

目を輝かせて返事をする緑谷くんに私も笑顔を返して、そして一拍置いてから今度はオールマイトに向かい口を開いた。

「先生や緑谷くんのこと、お話はわかりました。…それで、現状先生の活動時間というの

は一体どれほどのものなんでしょうか？」

「…50分前後だ」

「50分前後?! そんな…」

「まあ、無茶が続いてね…あの脳無とやらも手強い相手だった、痛かったし…。マッスルフォーム…ああ、あのいつもの私の姿のことね。それはギリギリ1時間半くらい維持できる感じ」

「そんなに短いんですね…」

聞けば緑谷くんと出会った当初は3時間ほどはあったそうだ。しかし徐々に衰退していく身体と先日の襲撃事件の無理が祟って今はもうその時間しかヒーロー活動は出来ないらしい。聞きながら、改めて秘密の重大さに胸がずんと重くなるような感じがした。元より話すつもりはないけれど、本当に嚴重に管理しなきゃいけない秘密だ。平和の象徴が今やそれほどまでに衰弱しているとは、ヒーローにもましてや敵にも知られてはいけないこと。

「それより緑谷少年…体育祭のことなんだが…」

「はい？」

「君自身まだOFAの調節できないだろう? どうしようか?」

「それは…ああ、でも一回! あの脳みそ敵に打った時に反動がなかったんです!」

「OH！そういうや言つてたな！何が違つたんだろう？」

「違い？…今まで僕が使つてきたOFAと明らかに違つた点があるとすれば…：僕はこの力を、初めて人に使おうとしました…！」

ぎゅつと握つた拳を見つめながら言う緑谷くんに、顎に手を当てて考えるような仕草でオールマイトが呟いた。

「無意識的にブレーキをかけることに成功した感じか…：何にせよ、進展したね。良かった」

そしてそのまま立ち上がり、部屋の窓から外を見て、厳かな声で話し出す。

「ぶつちやけ、私が平和の象徴として立つていられる時間で、実はそんなに長くない」

「そんな…」

「そして、悪意を蓄えているやつの中に、それに気づき始めているものがある」

それは、先日の襲撃事件のことだろうかと思ひ当たる。あの時、死柄木が言つていた、アイツ、というまるで情報提供者がいるような口ぶり、そして紅魔が言つていた、先生、。いずれにしても、オールマイトの言うように気づき始めている敵は確かに存在し
そうだ。
ツイン

「君に力を授けたのは私を受け継いでほしいからだ。出会ったときの君のあの思いは、今も君の中で紡がれているはず…：そうだろうか？」

「はい!!」

「ならば…それを示すときだ」

「…え?」

「雄英体育祭、プロヒーロー…いや全国が注目しているビッグイベント!今こうして話しているのは他でもない、次世代のオールマイト、平和の象徴の卵、緑谷出久が…君が来たってことを世の中に知らしめて欲しい!」

青い目を爛々と輝かせながら緑谷くんにそういうオールマイト。姿は変わり身体は衰弱しても尚その覇気は健在で、緑谷くんと二人、一瞬のうちに雰囲気は圧倒されていれば、「まああれだ、天使くんという心強い味方もできたことだし、個性の調節頑張ろうか!」と先程のような明るい声で言ったことで、あつというまに先程の空気が消えた。

あまりの変わりように一瞬呆然としたものの、一息を吐いて落ち着かせ、そして笑顔で言う。

「ご期待に添えるよう尽力しますわ」

「天使さん、よろしくね!」

「ええ、よろしくね、緑谷くん。ああ、これもなにかの縁だから、出久くんと呼んでもいいかしらっ?」

「ええ?!」

「あらダメだった？なら、いずくん？みーくん？」

「いずツ…み…?!いやあの、出来ればデクと…!」

「ああ、そういえば勝くんとお茶子ちゃんもデクくんと呼んでいたわね、じゃあ、デクくん。改めて、この度緑谷出久くんの期間限定主治医になりました、天使藤乃です。よろしくね」

「よつよろしく天使さん!」

「ふふつ梅雨ちゃんじゃないけど、私も藤乃でいいのよ」

せつかくデクくんと呼ぶのだから、デクくんにもせひ下の名前で、と提案をすれば、顔を真赤にして「え?!」だとか「ふつふつふつ!?」だとか口から零れているデクくんの様子に、「慣れないうちは大丈夫。おいおい呼んでくれればいいから」と笑いかければ、ほつとしたように胸を撫で下ろすデクくん。何だか可愛い男の子だなあと思いながらくすくす笑っていると、ふとあることを思いつく。

「デクくん…個性の特訓のことだけれど、都合がいい日はある?」

「へ?」

「体育祭まではあまり時間も無いし、今できることで一番効率いいのはやはり実地訓練かしらと思つて。申請さえすれば放課後に訓練場を借りることも出来るから、どうかしら?」

「へっいいの?!」

「勿論。体育祭本番はライバルだけれど、それまではお互いに切磋琢磨しましょう?」

「うん! あ、じゃあ日にちだけど…」

「うおっほん。和気藹々と話しているところ悪いのだが、そろそろ昼休み終わるよ?」

オールマイトの言葉に時計を見れば、たしかにあと10分ほどでお昼休みが終わってしまう。なので、手早く連絡先だけ交換して、今日はお開きにすることにした。

一緒に仮眠室を出てきたデクくんは、お手洗いに寄ってから戻るといふことで途中で別れ、一人教室への道を歩く。

全貌を聞いた平和の象徴の秘密。次代の平和の象徴の主治医という立場。そしてそれに伴うデクくんの特訓相手。

ただでさえ時間が惜しいこの時期にとんでもないことになったなあと思いつつも、話を聞かないという選択肢も取れたはずの私。しかし、今日あの場でオールマイト先生の誘いに頷いて赴いたのは紛れもない私の意思で――。

「これも何かの縁、か…」

ぼつりと呟きながら教室への道をのんびりと歩く私だった。